

---

# 思考者RPG

新次元

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

思考者RPG

### 【Nコード】

N7477C

### 【作者名】

新次元

### 【あらすじ】

目前で親友に自殺され、それ以来自宅にひきこもり、ニート生活を送っていた藤棚。いつものようにオンラインゲームをしていたある日、ゲームの中へと入ってしまう。そこで、彼は魔物でオンラインプレイヤーに狩られる立場だった。PC版HP <http://www.geocities.jp/pericite/index.html>メール<<[contravent@hotmail.co.jp](mailto:contravent@hotmail.co.jp)

思考者RPG

ネット生活(前書き)

二日に一度更新します

## ニート生活

ニートなんていう横文字でいかした職業に就いたのはいつからのことなのか。自室にいる藤棚正也自身にもよく解らなかつた。ただ、昔まではプー太郎というあまり響きのよくない職名から、テンションの上がりそうな職名へと呼称が変わった事実だけは知っていたし、少しばかり気に入っていた。

しかし、実質、ニートもプー太郎もやっていることは同質である。自宅警備員と名乗っても、確かにそうだが、実は無職の引き籠もりにすぎない存在。両親に寄生している生命体であり、何もしていないをしている人間ということの意味している。

そのような墮落しきつた藤棚に、友達はいなかつた。正確に言えば、いるのかもしれないが、それは表面的であつて友達らしい友達がいないということである。連絡をとりあつてはいるわけでもなく、会つて話すこともない。

だいたい、どうして、自分がニートになつたのか、彼自身、理性の深層部分では理解していたのだが、思い出したくなかつたのである。解いた答案を、記憶の深層部分に埋めていたのだ。

人生には、選択肢が多すぎる。

大学に入ってから彼に付きまತ್ತたものは、まさに選択の連続だつた。小中高まではなんとなく生きてきた。周囲の波に逆らわず、そのまま選択肢を見ず、大衆の押すボタンを、彼も押してきただけだ。なのに、大学生になつてからというもの将来への不安が大きく膨らんだ。

一体、自分は何の職に就くのか？  
どのように生きるのか？

今、大学にいる意義さえ、彼は見出せなかつた。

高校という波に身を委ねた結果、彼が行き着いた場所がただ大学というだけ。今いる大学も、自分の手の届く偏差値ぎりぎりの所で

あるにすぎない。

法律に興味を持っていたから、彼は法学部に入った。そして、法律を学ぶことに面白さを感じたが、将来に対する不安も感じていた。できるのなら弁護士になりたかったが、受験というなかなかへこんでくれないボタンを押した後とあっては、弁護士になるための猛勉強をしようとはこれっぽっちも思わなかった。かといって、他の資格を取るのも面倒だった。

だいたい弁護士よりも、いづらか簡単な資格である司法書士ですら合格率が2パーセントというのを知ってから、頭がくらくらしてしまい講座の受講を止めたのは記憶に新しい。

じゃあ、一体、俺は何になるのだ。彼は、その後自分にそう問うたことを覚えている。そして、その答えは新聞記者だったが、これこそ無理難題なのだった。

競争率が激しすぎる上に、就職後も激しい労働のために平均寿命が六十歳を下回っている。彼は別に長生きしたいわけではなかったのだが、命を削るまでの過酷な職務を果たせる自信がなく、あえなくこのボタンを押すことは留まった。

結局、自分が何をしたらいいのか彼は解らなくなってしまった。医療系に進めば就職は間違いないので、今の大学を辞めてその道に行こうかとも考えたのだが、今の大学を辞めようかどうか悩んでいる時点で、医療の道に進んでも、どうせ途中で辞めてしまうのが才子だと思ひ、これも断念。

ならば、どうして今ここにいるのか。大学を辞めたわけではない。試験日にだけ行って、試験を受けて帰っているのだ。勉強は全くしていないし、講義を受講もしていないので、当然Fの嵐になる。

無数の、おまけにその大部分が隠れている選択肢の中から一つを選ぶことは苦痛な作業だ。しかし、かといって手持ち無沙汰な状況も彼は嫌った。

何もすることのない時間。  
無の空間。

それらは嫌われて、大抵が選択の余地のない有によって占拠される。そして、占拠されてもらうのを多くの人は好む。

彼もそれを好む人間だったが、今回の無は埋めることができない程に深かったのである。

散髪してから三ヶ月経ったばさばさ頭をがしがしとかきながら、彼は優しい女の子のことを思い出した。

口下手な彼は大学に入ってからクラスの人付き合いに悩んでいたが、そんな彼を気遣ってか、話しかけてくれた女の子がいたのである。

同性とも意思伝達をすることが困難な彼からしてみれば、異性ともなるとなおさらであった。

優しいその異性が自分に話しかけると、彼の口にする言葉は、

「はい」「いいえ」の二択だった。

それでも答えられない時は、最小限の言葉で返した。そうするといつしかその子はあまり彼に話しかけなくなった。とはいえ、大学の一回生の後期に突入する頃には、すでに、彼がニートとしての新たな人生を歩み始めていたから、それ以上の交友関係の発展は望めなかったというのもあったのだが。

しかし、人生というのは何が起こるのか往々にして解らないものだ。

なんとという偶然か、彼の近所の花屋でその彼女がアルバイトしていたのだった。

たまたま母の日のためにと、カーネーションを買おうとして彼女と彼女は再会した。

「最近、大学に来てる？」

彼女の開口一番がそれだった。藤棚は、ああ、と気のない返事をしてそそくさとその場を出ようとしたが、住所を聞かれた。

「レジュメとか渡しに行つてあげるから」

最初は断ろうとしたが、住所を言う方が、話す言葉の数が少ないことに気付いて、彼は素直に住所を教えてその場を退散した。

それからというものの、彼女は定期的にレジュメや講義中にメモをしてくれたノートを持ってきてくれた。

最初は、それを拒んでいた彼だったが、あることが切欠で彼女の親切を受け入れ始め、友好関係を深めていった。

久しぶりに、あの花屋へ行こうか。藤棚は、重い腰を上げて部屋を出た。

家を出るのは二週間ぶりだった。彼の要求するもの必要なものを、親が買い与えていたのだから、そうなるのは必然的かもしれない。

音楽が聴きたくなったり、新たなオンラインゲームが発売されたり、デジタルオーディオが欲しくなったりすれば、両親にその旨を書いたメモを渡すだけでよかったのだから。

朝食、昼食、夜食は、全て決まった時間に作られる。彼は親にそれを自分の部屋に持ってこさせようように命じている。自分の部屋から出るのは、トイレに行く時と朝起きて顔を洗う時くらいなものだった。

家では両親が神経質なまでに、彼のことを気遣うからこうなるのだろう。嫌われたくない一心で、ここまでしているのかもしれない。家を出る時、お金は必要ないの、と尋ねてくる。彼は花を何本か買う程度だったので、三千円くらい、と言った。結果、両親が彼に渡した小遣いは二万五千円だった。

どうして三千円きっかりくれないのか。彼は理解しかねたが、多くをもらって不満を言う必要があるのかにも疑問だった。素直にそのまま二万五千円を受け取り、今こうして歩いている。

## 新たなあなた

設楽春香のいる花屋は、彼の家から歩いて五分程度の場所にある。その先の角を曲がれば、もう目的地到着。

そして、今、十字路を曲がり終えた彼は花屋を見た。こぢんまりとした店で、それほど繁盛しているようには見えない。

扉を開け、彼は店に入った。

「いらっしやいませー」

彼女の声とする。

「いらっしやいましたー」

彼は、親しげに彼女に挨拶した。この花屋で出会ってから、彼は少なくとも彼女の前だけでは、あまり口下手ではなかった。

「先週の講義のレジユメを見せて欲しいんだけど」

彼女とまずする話は、こういったものであった。

定期的な家に持ってきてくれるとはいえ、すぐにレジユメが欲しい場合には不都合だった。それに、彼女が渡しにくるのなら自分からもらいに行く方が礼儀的なように彼には思えた。

「ちよつと待ってて」

彼女が店の奥に引っ込んだ。

しばらく待っていると、クリアファイルを三枚ばかり持ってくる。

「ええつと、俺が欲しいレジユメは民法Iだけなんだけど」

彼女はクリアファイルを見、それから藤棚を見て、クリアファイル三枚の中身を確認し始め、二枚目のところで目的のものを見付けたいらしい。

「これ？」

と聞いてきた。

「ああ、これ、これ」

藤棚は民法Iのレジユメを受け取ってから、今週の大学はどうだったか、尋ねてみた。

「うっん」

少しの間、彼女は何かを考えるように眉間にしわを寄せた。

「国際関係の専門科目が、相変わらず難しくて」

以前にも、設楽は藤棚にそう愚痴っていたことがあった。そんな時、そんな講義さぼっちゃいなよ、と彼は冗談半分に行った。

「私だけじゃなくて皆が難しいと思っっていると思うの。とすると、出席しないことが、直接テストで差が出る、という結果に出るんじゃないのかな」

それに対して彼女はこう言う。

「それで、正也はいつ大学に来るの？」

イツ……大学に……。

下の名で呼ばれることはないので、反応が遅れる藤棚。

「ああ、まだ解らない」

大学へ行かない理由を聞いたそうな顔をしている設楽だったが、結局、何も言わなかった。しばらく、互いに何も言わない。気まずい沈黙が漂い始めたので、藤棚の口が開かれた。

「ビニロジィーってゲーム知ってる？」

彼女も名前くらいは知っているだろうけれども、おそらくこのゲームをやったことはないだろう。

「知ってるけど」

彼女の浮かべた表情は、どうしてか戸惑いだった。それは彼の見間違いかもしれないが、とにかく藤棚には彼女が困惑しているように見えた。

「やったことないよね？」

オンラインRPGということもあり、普通のゲームより敷居が高い上に、女の子となるとゲームをやっていることはまずありえなかった。

「うん」

言葉少なに返事する設楽。何か、彼女を不快にさせる話でも、俺はしてしまっただらうか。彼は急に不安になって話題転換をする

ことにした。

「カーネーションある？」

「あるよ。ちよつと待ってて」

ええつと、どこかな、と彼女は呟きながら、店内に所狭しと置かれていた花の中からカーネーションを探していた。

どこなのか解らないらしく、数分、探していたが、ふいに手を止めた。カーネーションの置かれている場所を思い出したのだろう。

彼の予想通りだ。彼女はカーネーションを見付けていた。

「はい」

彼女は、カーネーションを五本、彼に手渡した。

いつもならば花を綺麗に包装してくれるのだが、今日はそのままだった。彼は、しげしげとカーネーションを見てから、設楽を見た。ラッピングは、と聞きたかったが、なんだかせこい人間と思われるのが嫌だったので、彼は「ありがとう」とだけ言い、花屋を後にした。

移行それとも思考？

今日の設楽は変だった。何が変だ、と切り返されると言葉に詰まるが、彼はそう感じていた。

そういえば、カーネーション代を払っていないことに彼は気付いたが、多分、友達のよしみでまけてくれたのかもしれない、と思い直した。

今日も、特にすることは何もない。ないけれども、皮肉にも時間は膨大にあった。できるのなら、彼は死を選択し、選択肢に悩まない世界に行きたかった。だけれども、死ぬのは怖かった。

どうせ、俺は死にたいのに死ねない野郎だ。臆病者だ

今までに、何度死を選んだにも関わらず、途中で止めたことか。

死の選択を止めた後、決まってしまうことがある。

これからどうしたら良い人生を送れるのかをシュミレーションすることだ。

数百回、ひよっとすると、数千回、数万回に渡って良き人生を送るプランを脳内で組み立てたのかもしれない。

今からきちんと大学に行き、講義を真面目に聴く。法律の知識を固め、司法書士の講座を受ける。大学卒業後に司法書士の事務所へ数年勤め、後に独立。

それからも、数年働いて財を蓄え 蓄えたところでここまでが固定されているプラン。それからのことは、シュミレーションするたびに異なる。

せめて、固定部分だけでも自分でやればいいのに、それをしようとする足が竦んだ。本当に司法書士がやりがいのある仕事なのか解らなかった。

彼は、今までに一度も何かに懸命に取り組んだことはなかった。ただ何となく周囲の波に乗っていただけで、自ら選択肢を選ぶという積極的行為をしたことなどなかった。

よくよく考えてみればその行為があったのかもしれないが、頭をひねって思い出さなければならぬような積極的行為という時点で大した積極性を持っていない。

長くなってきた髪を、彼は苛立たしげにかきむしった後、オンラインゲームでもしようか、と考えた。

あの世界の選択肢は、わくわくする選択だ。それに引き換え、現実における選択はどれもこれも恐ろしいものばかりだ。いいや、違う。俺は選択することを恐れているんじゃない。

彼は首を横に振り、溜息を漏らした。彼の恐れているものは、選択した後続く結果。ゲームの場合、結果が悪ければリセットで問題は解決される。だが、現実だとそうはいかない。他にも色々と彼の中で、選択を嫌う理由が渦巻いている。その要因を藤棚はうまく説明することはできないけれども。

とにもかくにも現実の選択肢は、彼にとってさほど魅力的に映らな

かった。

だから、今日もログインする。いよいよ、胸躍る冒険の始まりだ。キーボードでIDとパスワードを入力してログインした。そして、コントローラーから手を放す。目をつむり、ゆっくりと伸びをする。それから、彼が目を開けると、そこは、彼の部屋の中ではなかった。

## ピニロジィー

寝ぼけてるのかな。彼はこんこんと自分の頭を叩いてみたが、周りの風景が自分の部屋に戻ることはなかった。

幻覚を見ているのだろうか。藤棚は、周りをよく見てみた。

陽光を反射して、表面が白く光る緑の大地。遠くを見ても、緑が永遠に続いているように思える。

空には、絵に描いたような丸い太陽。遠くに、木がまばらに生えているのが見える。もつとも、彼のいる場所に木はなく、大小さまざまな岩が散在しているだけだったが。

「よつこらしよ」

腰を上げて、彼は夢の世界を散歩してみることにした。

現実世界では外出するのが億劫になるのに、ここではそんなことがなかった。元々、夢の世界には帰る場所、快適な場所という固定された空間がないからなのだろう。

でも、多少は俺も現実世界で外出していた。

彼は心の中で言い訳をしつつ、そんな自分に嫌気が差した。家から少し離れたところにいる花屋に行くのが精一杯なくせに。藤棚の一部が、それに気付く。胸が疼いた。彼は胸に手を当てようとした。そして、自分が服を着ていないことに気付いた。

その上、明らかに身体が自分の所有するものではない。がさがさした感触。恐る恐る胸を見ると、灰色の鱗で覆われている。

どういうことだ？

慌てた藤棚は、もっと胸の状態を見ようとして、自分の手の異変にも気付いた。それから、全身へと広がる。その異変に気付くのは、そう長くかからなかった。

どういうことか、彼は人間ではなく、灰色のアルマジロのようなものになっていたのである。

「まあ、夢だからな」

自分が非人間的な生物として夢にいたことがなかったので、慌てた彼だが、こういうことがあっても、なんらおかしくはない。

しかし、何かが引つかかる。妙に現実味のある世界。それに、どこかで見えたような世界。そう、ここは、まるで いやいや、そんなことがあるはずなものか。藤棚はぶんぶん頭を横に振り、頭に浮かんだ可能性を否定した。

さて、これからどこへ行く。あまりに広大な草原のため、どちらへ進むか判断しかねる。これも一種の選択なので普段の彼ならば嫌に思えのだが、先程からも感じているように、どうしてかこの世界では不思議とそれはなかったし、むしろ何でもいいからとにかく選択したい衝動に駆られた。おそらく夢の世界ゆえに、何をしても責任が自分にこないからだろう。彼は自嘲気味に笑ってから、前へと歩き始めた。

しばらくすると、前の方から人が歩いてきた。おーい、と叫んで彼を呼び止めようとして、彼は喉元まで到達した言葉を飲み込んだ。前から走ってくるのは男性だ。

顔は生気に溢れており、目がやや細いといった感じだ。身長は、魔物である藤棚より小さいとはいえ、人間からしてみれば平均的な身長といったところだ。

と、そういう身体的特徴は彼にとってみれば、どうでもよかった。彼が目丸くして見たものは、その男性の服装だった。

腰に長剣を帯刀し、髪は金色。服装は上下ともにファンタジーの世界に登場するそれであった。

ここはもしかして、いやいや、ここは俺が見ている夢の中だ。きっとゲームをやりすぎたからこんな夢を見ているんだ。そう、ここは、まさしく彼がよくやっているオンラインゲーム、ビニロジィーに酷似している世界なのである。

己の容姿のことも今になって考えてみると、確かマジロマという魔物に酷似している。

「待てよ……」

仮にここが夢の世界ではなく、本当に自分が魔物だとして。そして、こちらに向かつて必死に走ってくる剣士が本物であるならば、自分は間違いなく、あいつに攻撃される！

そう、マジロマという魔物は、希少なアイテムである爆滅ボムを落とすレアモンスターということも多くプレイヤーから狙われているのである。

それに、ここが夢の世界でなくとも、夢の中で殺されて気を良くする人間がいないように、藤棚も夢の中で殺されるのを好まなかった。

回れ右して、マジロマになった彼は、全力で駆け出した。

走る時、身体がぐぐぐと前に引つ張られるように感じた。足が地を蹴ると、ぐん、と前に力強く押し出される。これならば、振り切れる。安心して、後ろを振り向いて、剣士との距離を見ると、なぜかしら、距離が開いていない。むしろ、縮んでいる。

どういうことだ？ このままでは、追いつかれる。

しかし、彼は走って逃げるしかなかった。戦うのは逃げるのが不可能になった時、最後の手段として使う。とはいえ、戦ったところで負けるのは確実だろう。

なぜなら、マジロマと戦って負けるのに、追いかけてくる馬鹿なオンラインプレイヤーはいないはずだからである。

後ろを見るのを止めて前方に何か使えそうなものがないかを見てみると、代わりに、これまた別のオンラインプレイヤーが走ってくるのが見えた。

これでは、逃げるのは不可能だ。足を止め、どうしよう、と彼がおろおろしていると、「こっちへ来て」と、少し低い声が出た。

どこから声が？ と不思議に思っている時、急に身体がふっと軽くなる。それはまるで無重力のような感覚だった。

自分が落ちているということに気付いたのは、地面に強かに尻を

打ち付けてからだだった。ここは、一体、どこなのか。周りは妙に薄暗く、青銅色の数字や記号、文字が渦巻いていた。

「やあ、あっちからの新入りさんだね」

声は奥からした。藤棚は、青銅色のラインが縦横に引かれた暗い空間を見回した。

「こつちだよ。暗いから、よく見えないのかな？」

目を凝らすと、確かに十歩ほど歩いた所に少年らしき人物が見える。僅かしか離れていないのに見落としていた。この文字や数式が、邪魔していることもあるのだろう。

文字や記号をかきわけて藤棚は謎の少年に近付いた。

「言っておくけど、ここは夢の世界なんかじゃないよ。現実。そう、君も僕も夢のような世界に実在しているんだよ、確かなものとしてね」

「ど、どういうこと？」

少年は、顔を上げた。その顔は、悲しんでいるとも喜んでいるともとれる曖昧な表情であった。

「かわいそうだね、君。でも、それも一瞬で終わるよ。ここから目覚めれば、君は怪物として、現実世界へ戻ることになるんだから」「そらみる！」

藤棚は鼻を鳴らした。やはり、夢の世界じゃないか。それに、こんな青銅色の世界はゲームにはない。

「君も薄々気付いていると思うけど、ここはゲームの世界。ビニロジィーの中なんだよ」

ああ夢が何か言っているな。藤棚は、少年の話聞き流した。

「まあ、夢かどうかは、もうじき解るんじゃないかな？」

どうということだ、と言いかけて藤棚は口を噤んだ。

急に青銅色の空が裂け、乳白色の穴が産まれる。そこから、姿からして戦士らしい女性が落ちてきた。

なんだ、なんだ、と思っていると、巨大な太鼓を打ち鳴らすかのような重低音が発生する。地面が、異様なまでに震えている。

落ちてきた女性を見ると、ひどく震えている。

「僕には、どうしようもない。彼女が、ここで喰らわれてしまつのを  
見ているしかないんだ」

少年の悲しげな目。

「ここは生きたまま入ったのなら、一種のプログラミングを言えば  
出られるんだ。けど、死んで入るとそれが無理なんだ。それにね、  
仮に彼女がここから出ようなんて目論んだことで空間が歪み始めた  
ら、僕はそれを全力で止めなきゃならない」

「どうして？」

「彼女が喰らわれるのを見てから、その続きを話そう」

たとえ夢と認識している世界とはいえ、その中で人が得体の知  
れぬものに喰われるのは、やはり気分のいいものではない。妙に現  
実感のある世界とくれば、なおさらである。

「ほら、あれが彼女を喰うんだよ。思喰獣ってやつさ」

少年が指差す先に、周囲を構築している文字と数式が蚊柱のよう  
に密集していた。そして、その青銅色の塊の中に鋭く光る目がある。  
四肢を持つそれは、毛皮をまとっていた。

戦士の彼女がそれを見ると、金切り声でも上げるのだろうか、と  
藤棚は思っていたが、そうではなかった。彼女の口がかくかくと開  
いたり閉じたりした後、女性戦士はその場にへなへたと座り込んで  
しまった。

逃げるのさえ、恐ろしい相手なのだろう。確かに思喰獣とやらは  
非常に強そうに感じられる。だが、逃げようと思えばこの空間をど  
こまでも逃げられるのではないか。

「確かに、あの怪物は足が遅いように見えるけど、あれは起動が遅  
いだけ。起動し始めたら、誰も奴から逃れることはできないよ」

化け物が、怯える女性戦士を巨大な足で踏み付けた。

「今回の場合、彼女が逃げようとしなから思喰獣が走るのを押め  
ないけどね」

思喰獣が獲物を捕らえたその時、何かの数値を表すゲージが女性

戦士の傍らに表示された。藤棚にとって、見覚えるのあるゲージだった。

「もう解ってるよね？」

少年が意味ありげな笑みを藤棚に見せ、それから彼の脛を蹴りつけた。

「痛っ！」

と、藤棚の足元に緑のゲージが表示される。ゲージの上には、マジロマという名称が浮かんでいた。

「これは、夢じゃないよ。あらゆる感覚がある世界。だけど、疲労感はない世界。ビニロジューという大陸のある世界。ただし、現実世界同様に死はあるから要注意」

ころころと笑う少年。

新たな情報があまりに多い。情報整理が追い付かない。藤棚は酸欠状態の金魚さながらに口をぱくぱくさせた。

「あの人はゲームオーバーになったから、ここに来たんだよ。でも安心して。君は、ここから現実世界に戻れば、ここでのことはもう忘れていくから」

思喰獣が足を脇へどけ、女性戦士を丸呑みにした。引き裂いて食べるという残酷なシーンを予想していた藤棚は、目を瞑っていた。

身体が重い。先程までは。そう、追いかけていた時でさえ身体は軽かった。なのに、女性一人が殺められた場所にいるだけで、彼は自分が鈍重に感じられた。

「気にしないで。奴に殺されたっていうのは、少し語弊があるかもしれない」

少年は藤棚に、この世界のことを語った。

ビニロジューには、もう随分と前から、人々の記憶が出入りしている。十時十三分になると強制的にビニロジューに意思だけが移行し、二時十三分になると、現実世界の肉体へ思考が戻る。例外的に、最初ここに来る時は、十時十三分でなくとも来てしまう。このような者を、人は移行者と呼ぶ。

「ああ後ね、ここでゲームオーバーになったら、さっきの怪物に記憶だけ喰らわれて、現実世界に戻るから、ここでの記憶はなくなっちゃうし、それにね」

思喰獣に記憶を喰られる時、正確には、データの書き換えを行っているらしいが、他の記憶までも喰らわれてしまい、植物人間になったり、現実世界でのことさえも忘れてしまったりする人間までもがいる。

「だから、わざとゲームオーバーになって現実世界に戻るという手は使えないんだよね」

ゲームオーバーになると、植物人間になる。気を付けなければならぬ。

「ここでどうすればいいんだ？」

長生きしたくない。人生なんて面白みに欠けるもの。なんて日頃から言っている人間のくせに、植物人間になるかもしれない事実を突き付けられて、彼は恐怖を感じていた。

「いや、君はもう何もなくていいよ。だって、君は現実世界に戻ると、化け物として存在することになるんだから」

「ば、化け物？」

「そう、化け物。ペルトレッドとなって、君は現実世界に戻って人々を殺しまくるんだ」

ペルトレッド。理性のない魔物。数年前から現れ始めた。今では、政府が二十歳以上の男女に護身用として銃の所持を許可している程、この問題は深刻化していた。

ちなみにペルトレッドが出現すると、その周囲一体が警戒エリアとなり速報が流れる。その近くに住んでいる者は退去しなくてはならない。

「君も思ってたでしょ？ あの化け物が、ビニロジィーに出てくる魔物に似ているってことに」

謎の少年の言うように、あのペルトレッドはまるでビニロジィーの魔物だな、とニュースを見て藤棚は思ったことがある。けれども

それは、ビロジューの魔物が神話や童話に出てくる魔物を参考にしているせいだと思っていた。

ビロジューの魔物に似ているのではなく、神話や童話に出てくる妖精や悪魔に似ているだけだと思っていたのだ。実際、高校の現代社会である教師にそう教わった。

「オンラインプレイヤーとして君の意思が移行したなら、現実世界に戻っても理性を失わない人として存在していた。だけど、君は魔物に移行しちゃったからねえ。現実世界に戻って、殺されるのが才子だよ」

「殺される？」

辺りが妙に静まり返る。青銅色の文字や記号が、その動きを止めている。

「そうだね」

少年が肯定すると、辺りは元の状態に戻った。

「とはいえ、君は比較的力のある魔物だし、政府のペルトレッド駆除隊も手を焼くと思うよ。でも、最終的には理性のある人間が勝つだろうね。単独で圧倒的な力よりも、ひ弱だけれども複数で構成された協力が勝るものなんだ」

協力する力は、原始的で単独な力より勝る。本当にそうなのか。普段の彼ならば、ノートになってから読み漁った新書やらインターネットで得た知識やらを駆使して、理論的に考えただろうけれども、今の彼にはそのような余裕などなかった。

「君は、確実に殺されるよ。ペルトレッド駆除隊は、駆除するのに時間こそかかりすぎたものはあるけれど、いまだかつて駆除できなかったことはないんだからね」

駆除されてしまうのか。ごみの対象として見なされるのか。

「お前なんか、駆除されればいい！」

父から言われた言葉を、彼は思い出した。駆除されればいい。その言葉が、彼の頭の中でやたらと反響する。藤棚は頭を両手で抱えた。

「落ち着いて。話をしよう。まだまだ時間はあるよ。二時十三分まで四時間もあるよ。移行はまだ先のことさ」

少年が、マジロマ藤棚の背中に手を当てて座らせた。

「本当なら、君はさつき死んでいたんだから。あのレアアイテムを狙った血も涙もないオンラインプレイヤーに狩られていたね」

「どのみち死ぬんなら、放っておいてくれよ！」

どうしていいか解らず、藤棚は少年に八つ当たりした。それが正しくない行いだと頭では解ってはいた。しかし、やってしまっただ。

自分の人差し指と親指を擦り合わせ始めた。落ち着きがなくなると、彼がやってしまう癖だ。

「話を聞いてよ。君が助かる可能性はまだあるんだ」

絶望で息をするのも苦しかった彼は、方眉を上げた。

「うん、君が駆除されずに済むかもしれない方法がある。けども、これはやっていいのか、どうなのか……」

「教えてくれ」

必死に頼んだつもりだったが、彼の声は小さなものだった。

「そうだね。教えてあげるよ。幸い、時間が沢山あるから詳しく説明するね。まずは、この場所のことから」

少年が言うには、ここはバグ空間と呼ばれている場所だ。本来はゲームから切り離されているエリアであり、あらゆる処理がなされている空間でもある。その処理を行っているのが思喰獣だ。

思喰獣は、不要になったデータを削除する役目を主に担っているプログラムだ。この怪物は、破壊されてもすぐに再生する。

「ただね、さつきも言ったように、ゲームオーバーになってもここから抜け出そうとする人間がいるんだよ。そういう奴を食い止めるようにプログラミングされた存在が僕なんだ」

藤棚は親指と人差し指を擦り合わせるのを止め、少年を見た。小さくて、腕も足も細い。全体的に弱々しい印象を受ける。

「普通のオンラインプレイヤーの存在なら、つまりデータなら、何

の抵抗もせずに思喰獣に処理されて終わるんだけど、移行者は下手に知識を付けている。だから、抵抗したりここから抜け出すプログラムミング言語を口にしたりするんだ」

「い、移行者？」

「あれ？ 話を聞いてなかった？ 君も確かに移行者だけど、厳密な意味では違うかもね。真に移行者と言われている者は、オンラインプレイヤーへ意思を移行させた人のことを言うんだ。君の場合は、魔物へと意思を移行させたからそうは言えないかもね。おっと、話を戻すよ」

「この世界には、四種類の不自然がある。

一つ目は、オンラインプレイヤーへの移行者。

二つ目は、魔物への移行者。

三つ目は、ビニロジィーでの変更が現実世界にも反映される。

「ちよつと待つてくれ。反映って？」

「君みたいな人や移行者が、ゲームからの干渉を受けている存在ってのは解るね？ これも、一つの現実世界への影響と言えば影響なんだけど、それがもっと大きくなったのが、世界干渉と言われる現象で、ビニロジィーで普段と違うことが起これば、現実世界でも同じことが起こるんだ。

例えば、戦争は定期的に行っていることだから普段のことなんだけど、もし戦争倍増イベントみたいなのが行われると、現実世界でも戦争が多くなるだろうね。

日照りイベントが起きると、現実世界でもビニロジィーでの日照りエリアに対応して、局地局地で日照りが起きる。このことから、現実干渉が確かなものであることが読み取れる」

少年の言う世界干渉に、しっかりとした根拠があるが、しかし、どうしても彼は信じる事ができなかった。

「君が信じられないと言つても、それじゃあ君がここにいることもすでに信じられないことだろうしね。それに、君が信じる信じないは自由だよ。何も信じることを君に強制しているわけじゃないんだ

から」

さて残りの一つを話すよ、と少年は世界干渉の話題を打ち切り、四つ目の不自然を語りだした。

固定キャラが、意思を持ち始めている。

「固定キャラって？」

「固定キャラクターの略称だよ。ゲーム中には、誰もが経験する同じイベントってあるでしょ？ 絶対に起こさなくてはならないイベントってあるでしょ？ そういうイベントを発生させる、または受ける側のキャラクターのことを固定キャラって言うんだ」

「そういうのが意思を持ち始めていると？」

「うん。例えばね、悪役のキャラが人を殺すイベントを担っているとうかが。すると、彼は、何度も人を殺すことになる。それで、必ずというわけじゃないけど、そういうことを繰り返していると、いつしか、どうして自分がそういうことをしているのか疑問に感じ始めるんだ」

どうして、自分がそういうことをしているのかいつしか疑問に感じる

藤棚はすでにそうだった。なぜ、自分は現実世界でニートになってしまったのか。どういうわけで、何もせず、ただゲームだけに明け暮れるような墮落した生活しか送れなくなってしまったのか。

「これが、意思を持ち始めるってこと」

そこで少年は言葉を切り、咳払いした。

「実は、僕も意思を持ち始めたキャラ、思考者なんだよ」

思考者。思考することに疲弊した存在の藤棚は、さしずめ無思考者とも言うのだろうか。

「固定キャラが思考者になっても、やれることは限られている。固定イベントの中から抜け出すことはできないからね。でも、彼らは抜け出したいと考えている。そして、どうやら、脱出に成功した者もいるみたいだしね」

思考者は、自分のいる世界に疑問を感じ、自由になろうとしてい

る。だとしたら、自分とは違う人種だ。

藤棚は、現実世界での選択に辟易し部屋にこもるようになった。植物のごとく、家に腰を下ろしている。自分の世界に疑問を感じたからではない。

疑問に思うことですら彼は拒み始めたから、こういう状態になってしまったのだ。

「決められたことをしろ、と命じられているプログラミングだから僕も思考し始めたんだよ」

少年が、にやりとしながら言う。

「僕はビロジイーを管理する人間によって作られたんだ。ほら、言ったでしょ？僕は、このバグ空間から不正に抜け出す奴を阻止するように作られたプログラミングとしての存在だって」

そういうことを言っていたかもしれない。藤棚は、目まぐるしい状況に付いていけず、少年の言っていることも、あまり理解できないでいた。

「そういうわけで、僕も同じことを繰り返しているわけ。だから、こうして君と話すことができるんだ。思考を持つ者だからね。固定キャラやプログラミングされた存在が、こういう風にして話すことはできないからね」

そう言われても、彼はこの世界に来たばかりだ。固定キャラに属する存在がこういう風にぺらぺらと喋るのが変だという認識を持っていない。藤棚は返事に詰まった。

「ん？君は今日きたばかりの人だったね。じゃあ、知らないか。でも、ゲームはやったことあるでしょ？それにオンラインゲームをやっていることから考えると、普通のゲームは結構やっているでしょ？」

「どうして、俺がオンラインゲームをしているって知ってるんだ？」  
「だって、この世界に移行する人間は、皆、例外なくビロジイーをプレイしていたからなんだよ」

少年が、藤棚の肩を軽く叩いた。

「それで、僕の質問に答えてよ。君はビロジィー以外もやったことあるでしょ？」

「あ、ああ」

気の抜けたような返事をした。

「じゃあ、ゲーム中の固定キャラが決まりきった言葉しか話さないってこと解るでしょ？」

再び、藤棚は返事した。今度のはやや気のあるものだ。

「なら、解るよね？ この世界の固定キャラも、プログラミングの存在としての僕も、本来は自由に会話できる能力がないってことに」

藤棚は無意識に頬をなでた後、確かにそうだ、と感じた。

「ふう、これで大分時間を潰せたけど、まだまだ残っているね」

「それより、早いところ、俺が現実世界でペルトレッドになるのを防ぐ方法を教えてくれよ」

少年は、彼に向かって流れてきた青銅色の一文字を人差し指で弾き飛ばしてから、頷いた。

「でも、これは成功するとは限らない。僕は、一切保証しないよ。それでもいいのなら……」

不自然に途切れた語尾が、藤棚の頭に妙に残った。それに「一切保証しないよ」という少年の言葉にも。しかし、だからといって、藤棚は現実世界で理性を失わずに元の人間として生き延びる方法を知っていない。少年の言う保証なき方法に頼るしかない。

「まずね、君は今一度、地上に戻ってね、そして、死んでくるんだ」この少年は、自分をからかっているのか。腹部がかつかと熱を帯びたが、彼は怒るのを押さえ込むのに慣れているので、この時も怒りを少年にぶつけることなく済んだ。

「君が死ぬと、この空間に来るわけ。そして、あの化け物に喰われる。それが、僕の考えた君を守る作戦」

素晴らしい作戦であるかのように話す少年に、藤棚は待ったをかけた。

「そんなことして何か意味あるのか？」

「そりゃあね。だって、思喰獣に喰われたら君はここでの記憶を失うだろ？ この世界では、あの思喰獣もそうだけど、データを見分けるのにデータの成分で判断するんだ。君も僕も、この世界にはデータとして存在しているんだ。でさ、僕達のデータって、つまりところ、記憶のことなんだよ。ほら、また来たね」

青銅色の空間の上部が裂け、魔導士らしき人物が落ちてくる。群青色のローブを羽織った彼は、先程の女性戦士とは違って思喰獣を迎え撃つ気らしい。

「戦っても無理だけどね」

そんなに大きな声を出すと、魔導士に聞かれる。思喰獣に感付かれて、こちらも喰われてしまうかもしれない。藤棚は心配して、少年に尋ねてみた。

「大丈夫だって。あの思喰獣と僕の産みの親は、同一作成者じゃないの？ じゃあ、敵対するものは作らないってのが普通の考えなんじゃないの？」

「つまり、奴は決して君を喰わないということか」  
「そういうこと」

何でもないように少年が言った時に、思喰獣が燃え上がっている様が見てとれた。魔導士が、火の呪文を唱えたらしい。

これしきのことと思喰獣は倒されないとは思うが、少しくらい動きを鈍らせるだろう。藤棚はそう考えていたが、それは違った。

魔導士の火なんてものともせず、思喰獣は咆哮をあげ、魔導士にずんずんと近寄る。

それをさせじと魔導士は氷や風といった魔法を思喰獣に投げ付けるが、あの怪物の表情は微動だにしない。全く効いていないらしい。

顔色一つ変えない思喰獣は、魔導士を踏み付ける距離にまで近付くと、当然だろ、とでも言うように魔導士を躊躇することなく踏み潰す。

緑のゲージが現れる。

「どうして、HPゲージが満タンなんだ？ あの魔導士は、この世

界に来る前にゲームオーバーになったから、HPはないはずなんじゃない？」

藤棚は少年を見た。

「ああ、現実世界では殺されて零のライフゲージだけど、この空間に来ると、そういった細かい部分は修復されるみたいだから」

なるほど、と藤棚は相槌を打ち、化け物へ視線を戻す。思喰獣は魔導士を食すと、何事も起こっていなかったかのように奥へと戻っていった。

魔導士が食されるのを見ていて、藤棚は俺もあんなのに食われないと、駄目なんだろうかと、思った。あれでは、現実世界に戻り理性を失う云々を言う前に、この場で死んでしまうではないか。

「もっと詳しく教えてくれないか？俺があいつに食われたら、ペルトレッドにならないという理由を」

「ああ、思喰獣が出てきて、話が中断されたからね」

じゃあ、詳しく言うよ、と少年は言葉を続けた。

思喰獣に喰われたら、藤棚はここでの記憶を失う。この世界では、データの成分でそれをそれとして認識する。

つまり、この世界がある移行者がある移行者として認識するためには、移行者の記憶で判断しているらしい。ということは、この世界で藤棚がマジロマとして認識されているデータである記憶を失えば、彼のペルトレッド化を防げるのではないか。

「そして、記憶を失わせることができる方法はただ一つ、奴に喰ってもらうってことさ」

喰ってもらおうというよりデータとして削除してもらおうことだろう。藤棚が訂正すると、少年は舌を出して、そっちのが正解に近いね、と言った。

がしかし、藤棚はやや首を傾げた。少年の言っていることはなんとなく解ったが、どうも釈然としないところがある。

「なんの保証もないんだな？」

少年は、彼の言葉にすぐ頷いた。

「前例もないのか？」

少年は頷きかけて、それを否定した。

「あるよ。君の前に、一人だけ。たまたま、僕の感知できる範囲内で、オンラインプレイヤーに襲われかけたから、僕の考えを勧めたよ。そして、彼も記憶を喰らってもらったけど、その後はどうなったのか解らないね」

少年が喋るのを止めると、沈黙が少し続いた。

「それで、君はどうするの？」

藤棚は迷ったが、自分に他の選択肢が与えられていないことも解っていたし、そもそも、選ぶ作業が嫌いということも知っていた。

## 夢か真か

地上に戻り、どこぞの男性戦士に身体を切り刻まれた。やたらと俊敏な動作で剣を振るう腕。

緑色だった藤棚のライフゲージは、すぐに空になる。彼の視界は暗闇に落ちていった。

目を開けると、あの空間だった。ただし、あの少年の姿が見えない。ゲームオーバーしてここに来た者には、見えないのかもしれない。女性戦士にしても、男性戦士にしても、こちらに全く気付いていなかったことから、藤棚はそう推測した。

とはいえ、乏しい根拠に基づく推測なので、彼はそれに自信を持つてはいない。

大気を震わす音がしてきた。その音を聞いただけで、彼は足が竦んだ。ここで得た記憶だけが、あの怪物に処理されるだけと言われているものの、それでも彼は自分の肉体が喰われるようにして、死んでいった戦士に魔導士の生々しい光景が頭に焼き付いている。どうしても畏怖を感じてしまう。

逃げる。

彼の脳が、そう警告する。だが、藤棚の足は少しも動かなかった。足は足として機能せず、ただ彼をそこに立たせておくということでは役に立っていない。

思喰獣も獲物が怯えて逃げないということを知ってか、ゆったりとこちらに向かってくる。

本当に、あの少年を信じてよかったのだろうか。

今更ながら彼は、不安に駆り立てられた。今まで人を信じて正解で痛いことを受けなかったことが、数えるほどしかなかったように思える。

親友であると信じていた今田力。どうして、お前は、俺に何も言わずに自殺なんか……。

今でも、彼はあの時の、忌まわしい光景を鮮明に思い出すことができた。親友今田力の下宿先に遊びに行ったあの時。一緒にビニロジイーをプレイし、そして、泊まった時のこと。目を覚ますと、苦しそうに呻いた後、窓を開けて飛び降りた今田。湿った音が、まだ冷たい朝の空気の中を響き渡った。

思喰獣が、足を下ろす。

藤棚は、巨大な足の裏を見た。青銅色の文字に数式がぐるぐると渦巻いている中に、思喰獣の足がある。あれに踏み付けられて、ここでの記憶を失うのだ。

彼の目には、妙にその足の落ちる速度が、遅いように感じられた。過去の記憶が、波のように押し寄せてきた。

どうして、自分がニートとしての人生を始めたのか。戻ってみたい過去の懐かしい記憶。それらが、彼の頭の中で高速再生される。思喰獣の足が、彼を踏み付けた。

ライフゲージとともに、彼の名前であるマジロマが表示される。急速に体力が減少すると同時に、彼の脳内で蘇っていた記憶に白線と黒色の点が入り乱れる。

腰が痛い。寝違えたようだ。どうして、部屋の床で寝てしまったのか。ぼうつとした頭で、藤棚は、しばし半身を起こし、座ったままの状態だった。

締め切られた窓。カーテンも閉められており、外が朝なのか夜なのか解らない。

もつとも、彼に時間という概念はあまり重要なものではないが。彼はテレビを点けた。

ニュースを見れば、今が朝か夜なのかが解る。

「ああ、朝……」

ニユースでは、ペルトレッド警戒地帯が速報で表示されていた。ペルトレッド？ 頭で何かつかえるものがある。彼は、首を傾げた。

「あ……」

慌てて、藤棚は、自分の身体を見回した。彼は、ビロジイーでの記憶を持っていたのだ。

彼は手を見て、足を見て、頭に角が生えていやしないか確認した。異常はない。

一通り自分の身体の確認が終わると、どうして、自分があの時の記憶を持っているのか、彼は考えてみた。

思喰獣に喰われれば、ここでの記憶を失うとあの少年は言っていた。がしかし、今、彼は記憶を持っていた。

ビロジイーに入った時の高揚感も、オンラインプレイヤーに追いかけられた恐怖も、思喰獣に喰われる前に過去を振り返っていたことも。

やはり、あれは夢だったのか。

妙に現実感溢れる世界だった。夢と思うには、あの時に体験した記憶が、はつきりと残っている。夢であるならば、褪せた色写真のような記憶になり、次にはその写真自体がなくなっているはず。

なのに、今でも思喰獣に踏み付けられて感じた痛覚に、彼は身を震わす程だった。

もしかしたら、ゲームのしすぎなのかもしれない。遂に、現実と二次元の世界との識別ができなくなる日がきたのだろう。彼は震える指を無理に押さえ込んで、膝を抱えるようにして座った。

カレンダーを見てみた。日付なんて大した意味を持たないと思いつつ、彼は時たまこうしてカレンダーを見る。日めくりカレンダーではない。日めくりは、めくるのを忘れてしまう。

今日は六月十二日。

しまった！ 藤棚は、慌てて立ち上がった。急に立ち上がったので、

足をつつてしまった。

足の痛みがおさまるまで待った後、彼は外出の身支度を始めた。親友が死んでから、三年になる。今田力が死んだ日のことはよく覚えていた。

とうに太陽は沈み、寒い夜のことだった。冬ということもあるが、今田が暖房費をけちっていたこともあって、部屋の中なのにも関わらず相当に冷えていた。

毛布を羽織ながら、二人してオンラインゲームに勤しんでいた。

藤棚はわざわざ自宅からノートパソコンを持ってきてそれを使い、二次元の世界で今田の操るキャラクターとともに戦っていた。

一人では行けない所へ行ったり、二人で行かないと発生しないイベントなどを卒なくこなしたり、強敵に挑んだり。

そして、そのままやっているといつの間にか寝てしまっていた。気が付くと、朝になっている。

うつかり寝てしまった、と藤棚は今田に言おうとしたが、横にいない。どこにいるんだ、と声をあげようとしたところで、彼は今田がどこにいいのか解った。

窓を開け、外に身体半分を出していた。

何をするか解らなかった。まさか、彼がそのまま飛び降りて死ぬ、と藤棚は思ってもみなかったのだ。

彼は飛び降りてしまった。振り返ることもなく、遺言を残すこともなく、藤棚に相談することもなく死んでしまった。

自殺の動機は、はっきりしていない。が、何の理由もなしに自殺するとも考えられない。

藤棚の心に、親友の死は傷跡を残していった。そして、それ以上に、どうして死ぬ前に相談してくれなかったのか、という疑問が彼の心を蝕んだ。

親友に相談してくれなかった。もしかしたら、ただ単に藤棚が一方的に今田のことを親友と思い込んでいただけなのかもしれないが、そんなこと考えるな。

がりがりと頭をかきむしってから、藤棚は過去を回想することを止めた。

思考停止。

これをしなければ、藤棚の精神はとうに破綻していた。どうも、あれやこれやと過去のこと、人間関係のことについて深く考える癖が彼にはある。

今田力の墓の前で、彼は手を合わせた。家を出る時、母が彼に一万円を渡した。別に、彼は一万円を要求したわけではないのだが。

「なあ、どうして、お前は死んだ？」

もしかしたら、藤棚を今の墮落した生活に追いやったかもしれない張本人に尋ねた。

僅かに風が吹き、木の葉が地面で踊った。

もう、しばらく待ってみた。

答えはない。

もう少し彼は待ってみたが、返答されることはなかった。彼は、今田が自分の心へ直接に語りかけてくれるかもしれない、とほんの少し期待していたが、溜息を吐いた後、踵を返した。

「あれ？ 藤棚君？」

自分の名を呼ぶ声がした。誰だろうか。藤棚は俯いていた顔を上げた。

設楽春香だった。

「君も今田君に？」

無言で、藤棚は頷いた。

「ふうん」

設楽は人差し指を口に当ててから、藤棚の横を通った。

藤棚は振り返り、設楽が今田の墓をなでているのを見た。

「あれから、もう三年になるのね」

いとおしそくに墓をなでることを止めた設楽は、目をつむり合掌

した。

今まで設楽は今田の墓参りをしていたのだろうか。おそらく、毎年、命日に墓参りしていたのだろう。それでもなければ、あんな風に彼のために手を合わせることはないはずだ。

「さあ、行きましょうか」

設楽が、急に明るい声を出す。今までの暗い空気を全て振り払うかのような、底抜けに明るい声を。

「今日、バイト入ってなかったのか？」

「うん」

にっと笑んでみせる彼女。

今の今まで、沈んだ気持ちだった彼女なのに、よくもまあ、ここまで明るい気持ちに切り替えることができるな。そう感心する気持ちと、本当に彼女は今田の死を悼んでいたのか疑問に思う心が、彼の中に産まれた。

藤棚が不可解に思っていることも知らずに、設楽はそのまますたすたと歩いていく。藤棚もそれに続く。

「行っつてどこへ？」

「んんつとね……」

設楽の首が傾ぐ。

「ごめん、あんまし考えてなかった」

くるりと振り返り、舌を出してみせる彼女。

「確かに、今日は暇よねえ。このまま家に帰るのも……」

このまま帰らしてもらう、と藤棚は言った。彼は外出を好まない。外にいて、いいことが起こった例がない。たとえあったとしても、

彼はそれを……いい……こととして認識していない。

彼にとって外出は魅力的なものではない。

「あ、うん……解った。じゃあ、ばいばい。私の家はこっちだから」

そう言う設楽は、どこか寂しそうだった。

設楽と喋るのを嫌っているわけではない。どちらかという喋りたい。藤棚はそう言いたかったが、口が喋るのに不慣れなためか、思

思考者 R P G

じつじつに動いてくれなかった。

## 再訪問

人生の内、ニートになってからの人生が、そうでない人生より長くなる日が来るのもそう遅いことではないかもしれない。藤棚は、ビニロジューをプレイしながら思った。

墓参りから帰る時、とうに夕方になっていた。家に着いた頃には、すっかり夜が世界を覆っていた。

「ああ、くそ！」

思うように敵が倒せず、彼はコントローラーを床に叩き付けた。階下から聞こえていた父と母の団欒がぴたりと止む。いちいち、俺の反応を気にしやがって。

しばらくすると、階下からは何事もなかったかのように団欒や物音がし始めた。

藤棚は画面上にいる自分の分身を見、それから床を叩いた。

また、階下からの音が途絶え、しばらくして音が戻る。一度目より、音の戻りが遅かった。

むかむかする感情が湧き上がる。心臓が痛い。彼は胸辺りの服を鷲づかみにし、歯を食い縛った。

我慢しろ。我慢しろ。何も思わない。何も深く考えては駄目だ。

心の闇が産むものは、確かすぐ訪れる。

不機嫌な脳内の口喧嘩。

とりあえず、込み上げる不快感を頭から叩き出せ。

しばらく、そう唱えていた。

苛立ちが消えていった。

自堕落な生活は消えないが。

彼は息を吐き、時計を見た。十時十二分を指している。

その時間を見ると、胸騒ぎがした。なんだろうか。何か起きる気がする。何か解らないけれども。

確か、十時十三分には……。しかし、もし、たとえ、あの夢が現実

だとしても、俺は死んだから、あそこに戻ることはない、と言おうとした時、彼は意識がゆらゆらと揺れるのを感じた。

目が覚めたばかりで、はっきりしない頭。いつもと何か動かし方の違う身体。だから、彼はまだ目も開けられなかった。ここが暗闇なはずはない。ただ目を開けていないだけだ。

開いたか？ まだだ。

まぶたが目には張り付いているかのようだ。ぐっと力を込めると、ようやく目が開いた。

最初は目が眩んだが、徐々に慣れてくる。

そこは、あの草原だった。どういうことだ。藤棚は、自分の身に一体何が起こっているのか考えてみた。やはり、あれは夢ではなかったか、それとも、可能性としては低いが昨夜の夢の続きをまた見ているのか。

自分の身体を見してみる。彼の身体は、マジロマのそれだった。アルマジロのような外皮に覆われており、手の先には鋭い鉤爪がある。顔に手をやると、手がざらりとした感触を捉えた。

顔を鉤爪で突付けてみた。顔に痛みが残る。やはり、これは夢ではない。先日のあれは現実だ。そして、あの少年の言うように、おそらく意識だけがこのゲームに流れ込んでいるのだろう。どういう仕組みでかは解らないが。

「これが夢ではないということ、また襲われるのか」

藤棚は鼻をひくつかせて、周囲に目を走らせた。

幸い、昨夜のようにオンラインプレイヤーは近くにはいない。だが、いつ、ここに現れてもおかしくはない。

「お？」

足元の地面が、アリジゴクの巣さながらの状態になる。また、あの少年が俺を呼んでいるのだろうか。もし、そうだとしたらありが

たい。ここにいるよりか、少年とともに、あのバグ空間にいた方が安全だろう。

藤棚は、下へと流れる乾いた砂に身を任せた。

すぐに、青銅色の空間に落ちた。あの時と同じように、意味をなしているのかいないのか解らない文字と記号が飛び交っている。

「どうということなのかな？」

少年の声がする。

「あ、君は……」

「僕は、昨夜君とここで会った少年さ。そんなことは問題じゃないさ。問題なのは、結果が成功したにしろ失敗したにしろ、ここに戻ってくることはありえないのに、君がここにいるってこと。絶対だけど、その絶対が崩された」

絶対なんていうことはありえない。絶対に絶対がないということさえもありえない。全てのものには、必ず僅かな可能性が残されているものだ。

「で、ちよつと、君がどこまで覚えているか教えて欲しいんだ」

少年の要求通り、藤棚は覚えていることを全て話した。

「聞き忘れていたけど、君の名前は？」

「名前？ ああ、思考者なのに、まだ名前を決めてなかったね。一応、僕がもらった名前は、R B B N 7 b j h b だけど、これじゃあ、ちつとも人らしい名じゃないね。なんにしようか？」

少年がこちらをじつと見てくる。俺にいい名前を提案して欲しいのだろうか。藤棚は、少年の目からそう推測して、彼の名前を考えてみた。

R B B

「アルビービー」。

「アルビービー」。

「アルビーなんてのはどう？」

少年は、藤棚が提案した名を言った。

「いいね。オンラインの世界じゃそんなに変な名前じゃないし、何より響きがいいね」

少年は礼を言った。

「ところで、俺は、どうして、またこんなところに来たんだ？ ここには戻ってこないはずなんじゃ？」

藤棚が疑問をぶつけると、少年は悩ましげに唸った。

「解らない。ともかく、僕はこの世界の原則しか知らないから。いや、その原則だって、今までは絶対だったから、原則という言葉自体がおかしいんだけどね。だって、そうでしょ？ 原則と言っんなら、例外が存在するんだから。」

つまり、君がここに戻ってきて解ったのは、この世界には例外があるってこと」

「アルビー君は、今まで例外に遭遇したり、聞いたりしたことは？」

「君は知らないよ。後、例外は知らないね。例外があるということと自体、君がここにこうしていなければ知らなかった」

「そうか、アルビー君」

「君は知らないよ」

君付けされるのが相当嫌らしい。

「俺はここにいるもいいか？」

少年は顔をしかめた。

「できればここにいさせてあげたいんだけど、普通の移行者はここにいると、データが崩壊する可能性があるんだ」

「どうして？」

少年の指が、青銅色の群れを指差す。

「あれらは、本来なら一定程度に固まって意味をなすものなんだ。そして、この世界で意味をなすということは、君やオンラインプレイヤー、風景、等々、物体としての存在になるということ。」

あの群れは物体の要素なんだよ。僕も君も分解されれば、この世界じゃあ、あんな風になっちゃうんだ」

自分やこの世界が、あれを要素として構成されていると聞かされて、藤棚は違和感を覚えた。バグ空間はともかくとして、外の世界にある全ての物体は、これらの文字や数式、記号によって構築されている。

理科の時に、人は細胞でできていると聞いた時に感じるうずうず感と似ているな、と藤棚は気持ち悪く感じた。

「そもそも、ゲームオーバーになっていないデータがここに存在すること自体が、不自然なんだ。だから、君はもうここに来ない方が懸命だよ。」

来るとしても、後一回が限度だろうね。それ以上来ると、思唎獣に処理される前に、君は分解されてしまう。君が君としての存在じやなくなっちゃうよ。その時こそ、君の意識は掻き消えて、現実世界には意思を有さない肉体しか残らないと思うね」

意識を持たぬ肉体。植物人間ということだ。藤棚は身震いした。

「君は特殊な移行者だよ。魔物へ移行したのに……ん？ 君は、現実世界でペルトレッド化していた？」

「いや」

青銅色の文字が飛んできた。藤棚は、それを腕で軽く払った。

「で、でも、よくよく考えると、俺はゲームオーバーとなって現実世界に戻っても、ちゃんと記憶を持っていた。記憶の一部が飛んだりして、植物人間になることはないんじゃない？」

「可能性はあるけど、君は例外的な存在だから、何が起こるか解らないよ。僕が君なら、ここからさっさと出て安全そうな所に身を隠すけどね」

危険のない場所とはどこだろうか。村や町が安全そうだ。しかし、自分は魔物だ。魔物が町に入れるのだろうか。解らないので、彼は聴いてみた。

「普通は入れないと思う。あ、でも、モンスター襲撃の日なら入れるよ」

モンスター襲撃の日とは、不定期に行われるもので、その名の通

り魔物が町や村を襲撃するイベントだ。襲撃される町や村は無作為に選ばれる。

「でも襲撃の日って、それに俺が参戦したら、余計に殺される可能性が高いんじゃない？」

少年は、藤棚の不安を否定しなかった。

「僕も安全な所へ行ったけど、果たしてそんなものがあるのか解らない」

要は、もう諦めるということなのか。藤棚は青銅色の文字がゆらゆらと流れていくのを見ながら、自分の心が諦めに包まれていくのを感じた。

「諦めちゃ駄目だよ。というか、僕が許さないね」

「何を？」

「産まれた時から選択肢を持っている君……僕ら思考者からしてみれば、本当に羨ましい存在だよ。なのに、ここで容易くその命を諦めてもらっちゃ、こっちも嫌なんだよね」

「それって、俺の選択肢を奪っていると云えないか？」

そう言うと、少年は気まずそうに顔をしかめただけで、藤棚に対して何も反論しなかった。

「どうする？ ここを出る？ ここにいれば、君は間違いなく分解されてしまうと思うけど」

分解されて自分の身体を構築する要素として、ここを漂流するのにも案外いいかもしれない。藤棚の心の片隅に自殺願望が潜んでいる。

「分解されるのって、痛いのかな？」

「ギロチンで首を斬られた人に、君はどれだけ意識があつたかを尋ねるのに等しいよ、その質問は」

アルビーが何を言いたいのかは解つたが、彼の喩えは何だか変だ、と藤棚は思った。

「最後にこれだけ教えてくれないか？ ここに戻るには、俺はどうすればいい？」

「Start・Bunirozyとさえばいいよ。誰かと一緒に来たければ、その人に触れておいてね」

## 出会い

バグ空間に入る方法を教えてもらった藤棚は、地上の岩陰に身を潜めていた。今も、オンラインプレイヤーが目の前を通り過ぎた。

屈強そうな戦士。すらりとした体型だが、魔法を使うのには長けていそうな魔導士。敏捷な動きの盗賊。

どれもこれも、彼にとって恐ろしい天敵だ。中には初心者プレイヤーがいるかもしれない、なんてことはこのエリアではありえない。彼はこのエリアが中級者向けエリアだということを知っていた。つまり、中級者以上のオンラインプレイヤーしかいないということだ。

無論、中級者でも実力の差にはらつきはあるだろうが、一体、誰がどこまで強いのか解らないし、一番の問題はマジロマとしての自分にどこまでの力が備わっているかということである。

マジロマは、敵全体に大ダメージを与えるレアアイテムの爆滅ボムを落とす魔物ということで、ただのレアアイテムモンスターと見られがちだが、実に不思議な魔物でもある。力が均等ではないのである。最初のマジロマはてんで弱かったのに、二頭目のマジロマは異様に強かったり、あるいは更に弱かったり。使ってくる特技も異なっている。

ビニロジィー攻略サイトでは、マジロマが他のモンスターを倒して力を得ているのでは？ 現に、私はマジロマが他の魔物を倒しているのを見たことがあります、と掲示板に書き込まれていたこともあったが真偽の程は定かではない。

「マジロマだ！」

大声がした。見付かったか！ 敵全体に大ダメージを与える爆滅ボムを狙うオンラインプレイヤーがこれほどまでに多いとは。自分もこれからは、レアアイテムを落とす魔物ばかり狙うのは止めよう。いや、その前に、俺を狙うオンラインプレイヤーから逃げなくては

ならない。

岩陰から躍り出て、藤棚は自分を狙うオンラインプレイヤーが何人いるか確認した。

滑らかそうな肌に、さらさらしてそうな金色の髪をなびかせている。耳は尖っており、身体も人間にしては、妙にすらりとしている。エルフの女性戦士だ。細身の長剣を握っている。

二人目は男性の魔導士だろう。深みのある青いローブに身を包み、フードを目深にかぶっている。

自分を追うオンラインプレイヤーが二人であることにほっとしたが、それでも、藤棚には自分が逃げ切れることに少しも自信はなかった。

「なんで、見付かったんだ？」

「知らない。たまたまじゃない」

「なんて不運なんだよ」

と、二人のオンラインプレイヤーが愚痴りながら、追いかけてくる。

また、俺より移動速度が速い奴らなんだろうか。藤棚は、逃げながら後ろを振り返った。彼の不安は的中しており、二人ともぐんぐんと近付いてくる。

このままでは、すぐに捕まるし背後からの攻撃を受けることになる。その上、こうして逃げていると、他のオンラインプレイヤーに発見されかねない。

とするなら、スタート、ドット、ビニロジィーと早速言うべきか？ しかし、果たしてもう、最後の切り札を使ってもいいのだろうか。少しくらい戦ってみてはどうなのか。

殺されるかもしれない。冷たい恐怖が、下腹部から足にかけて流れる。

やるしかない！

逃げるのを止めて、藤棚は振り返った。

「おっ？」

魔導士の男が、驚いたように方眉を上げる。

「さつさと、レアアイテム頂くよ！」

魔導士を押しつけて、女性エルフが剣を構えた。細身の剣が、陽光を反射させて光る。

それを見て、俺はとんでもない賭けに出たのかもしれない、と藤棚は後悔していた。

待って。このゲームは、アクションRPGだ。ターン制じゃない。うまく攻撃を回避して、そのたびに攻撃を加えることができれば勝てる。

彼の心の中で、懐かしい声がした。藤棚は、自分の心の声に従った。

女性エルフが、剣を横に振る。

速い！

ぶん、と重い音がする。それ程までに剣の動きが速いのだ。

避けようと思っていたが、避けられない。彼は、腕でそれを受け止めた。

マジロマのHPゲージが表示される。たったの一撃なのにも関わらず、半分くらいになってしまっている。

後、一撃受ければ、間違いなく彼はゲームオーバーとなってしまう。

やはり、バグ空間に戻るしかないのか。

「どうして、いつもこうなんだ！」

つい先程までバグ空間にいたのだ。もう、戻るのか？ どうして、いつも、こうやり切れないことばかりが起こるのだ。怒りというより、悲しみの方が大きい。

さあ、来い。次の攻撃は避けてやる。強固な拳、いや、鋭利な鉤爪で切り裂いてやる。藤棚は、目をぎんと光らせ意気込んだ。しかし、当のエルフは剣を構えたまま、奇異なものでも見るように彼を見つめていた。その後ろで、援護魔法を撃とうか撃つまいか構えている魔導士も。

「おい……」

魔導士が、ぽつりと言った。

「その魔物、喋らなかつたか？」

エルフが剣を降ろした。

「あなたも移行者なの？ それも魔物への」

魔物出現率が低く、オンラインプレイヤーに見向きもされなくなったエリアの隅。そこに、魔導士の男とエルフが地面に腰を下ろして藤棚の話に耳を傾けていた。

「とすると、お前は思喰獣のいるバグ空間に行ったって？」

信じられない、と言うように魔導士が肩を竦めてみせる。

「彼が嘘を吐いて、何か得でもするのかしら？」

「さあな。だが、信じられねえよ。だって、そうだろ？ 魔物への

移行者は、現実世界へ戻るとペルトレッドになるんだっての、普通ありえねえよ、ありえねえなあ！」

「何度もうるさいわね！」

エルフが魔導士を睨む。魔導士も、負けじと睨み返す。

「ああ、言い忘れていたけど、私の名前は、北田はな華。この世界では、ハナって表示されている」

彼女は自分の自己紹介を一通り終えると、魔導士の肩を叩いて自己紹介を促した。

「俺は、戸鳥太一。ここじゃあ、マスターってなってるな。まあ、現実でもそう呼ばれているが」

「その……マスターやハナってニックネームなのか？」

ハナとマスターの二人は、顔を見合した後、ああ、と合点がいったように頷いた。

「君は、この世界のことをよく解らないのね。いいわ、教えてあげる」

この世界に入る時、現実世界でよく呼ばれている名前がそのまま

ビニロジィーでの名前となる。チャット機能を使う時に表示されるし、ゲーム内にあるランキングにも、その名でランクインする。

「魔物の移行者って、チャットできるのか？」

「できないと思うよ。私達はオンラインプレイヤーへの移行者だからできると思うけど、じゃあ、ためしにEXPRESS/CHATって言ってみて」

「エクспレス、スラッシュ、チャット」

何も変化は起きない。

「エクспレス、スラッシュ、チャット」とハナが言うと、数十行の文字の列が、ハナのちょうど四、五メートル先の地面の上に浮き出た。よく見ないでも、それがチャット画面であることが解った。

「これを使って色々与会話する時に、会話の横に話者が表示されるのは知ってるよね？ それに、これが使えないということは……」

「連絡を取り難いし、いつでも仲間が組めるようにコマイターとしても登録できんってこった」

ああ残念、もう奴を見捨てて、とつとと、俺らだけでレアアイテム狩りをおっ始めようぜ、とマスターが立ち上がった時だった。

「ひらめいた！」

ハナが嬉しそうに言った。それとは正反対に、マスターの顔はげんなりとした。

「一体、何だよ？」

「あなたが、魔物使いになればいいじゃない？」

ひゅう、とマスターは口笛を吹いて、感心したように頷いたが、すぐに暗い顔に戻った。

「魔物使い？ 誰にも求められてねえじゃん、あの職業」

魔物使いは、捕らえた魔物を使って戦闘させることができるのだが、魔物の強さは変わらないので、ゲームを進めるにつれ何度も強い魔物を捕まえなくてはならない。その上、捕まえたての魔物は人に馴れていないので、馴れるまである程度アイテムを与えなくてはならない。その煩雑な過程が嫌われ、魔物使いは敬遠されがちなの

だ。

「いいでしょ？ メインジョブじゃなくて、サブジョブに設定しておけばいいじゃん。それに、マジロマって戦って強くなるらしいし……」

「それは、あくまで噂だろ？ だいたい、マジロマって捕獲不可魔物じゃなかったか？」

「あ……」

しまったといよように、ハナが顔をしかめる。だが、ぷるぷると首を横に振って暗い表情を掻き消した。首を振る時、金髪が風になびいたかのようだった。

「それは、マジロマの抵抗値が100だからでしょ？」

抵抗値とは、魔物使いが魔物を捕獲する際に、魔物から受ける抵抗の値である。これが、60なら五回中二回は捕獲に成功、80なら五回中一回成功する。つまり、抵抗値が100なら捕獲不可能なのである。

「だから、無理なんじゃねえか！ 100の抵抗値なら、百回捕獲しようとしても百回とも失敗に終わるだけだ」

怒っているように言う。眉を潜めているし、実際、怒っているのかもしれない。

「それは、普通の場合でしょ？ もし、彼が抵抗しなかったとしたら？」

またマスターの顔が、してやられたというように眉を潜めた。このころと表情が変わる人だな、と藤棚は思った。

「解った、解った。こいつを捕獲してやりやあいんだろ？ ちよつと待ってる。魔物使いヘジョブチェンジするには、転職の塔へ行かなくちゃな。ファンント」

呪文を唱えると、マスターの身体が縦横に伸びたかと思うと、その場にいなかったかのように姿を消した。

「ファンント知ってるでしょ？」

「ん、ああ……」

一度訪れたことのある町や村に瞬時にして移動する魔法（瞬間移動魔法）のはずだ。魔導士として、このゲームをやっていないかったのでうる覚えだが。

「まあ、彼を許してやって」

風もないのに、彼女の髪がなびいている。陽光が降り注ぎ、髪が心なしか光っているかのようだった。

「口も悪いし、性格も悪いけど、根はいい人だから」

言われてみると、大層、口の悪い人だった。藤棚は、ニートになってからは、設楽くらいとしか外で人と話したことがない。両親はと言うと、自分をいつだって気遣っていた。父母ともに、表面的関係という感じが否めなかった。

「俺は、ああいう人と話するのは嫌いじゃない」

ふふふ、とハナは笑ってから、一言。

「変な人」

「まあ、ここじゃあ、人じゃないけど」

彼にとっては本心をずけずけと言ってくれる人の方が助かった。

こちらを気にしているような感じがあると、どうしてもあの人は自分をこう思っではいやしまいか、ああ思っではいやしまいか、色々と深く考えてしまうからだ。

「ところで、君って、現実世界では何歳なの？」

「二十一歳」

「嘘！」

「いや、嘘じゃない」

「あ、いや、そういう意味じゃなくて、信じられないってこと。私も二十一なの。でさ、君は何してるの？」

俺は何をしているのか。何もしていないをしている。ただのニートです。それが答えだったが、言いたくなかった。

「大学生」

「そうなの。あ、連絡をとりたいからさ、電話番号を教えてよ」

ここで電話番号を覚えるらしい。藤棚は自分の電話番号を言い、

彼女の電話番号を聞いた。ここで覚えていても、現実世界にまでその記憶を持っていけるかと聞かれると、正直なところ自信はない。「まあ、どちらかが覚えてるでしょ?」

彼女も、暗記には自信がないらしい。こうなったら、あのマスターとかいう人にも暗記してもらった方が無難だな、と思っていると、マスターが平原の遠くを走っているのが見えた。

「あ、帰ってきた。ああ、これがファネットの欠点よねえ。行ったことのある村や町の出入り口にしか移動できないんだから。現実世界ではそうでもないんだけど」

「え? そうなのか?」

「そうそう、見たことのある場所なら移動できるよ」

ぶんぶん、と藤棚は首を横に振った。彼が驚いたのは、そのことではない。現実世界にまでも、自分の力が反映されているということに目をみはったのである。

「そうよ。ここで得た能力を移行者は持つて帰ることができる。でも、魔物への移行者の場合には、それがペルトレッドとして出るはず」

「じゃあ現実世界での俺は、今までの力しか持っていないということか」

「かもな」

全く息が上がっている様子のないマスターが言った。

「お帰り。足、速いね。さっきは、随分と離れていたのに」

「ステインテンプ(素早さ上昇魔法)をかけていたからな」

「そうそう、マスターも電話番号を彼に教えてあげてよ。というか、マスターが全て覚えておいてよ。賢いんだから」

お前らの都合ばかりで俺を使うな、とぶつくさ文句を言いながらも、マスターは自分の電話番号を藤棚に言い、藤棚の電話番号を聞いた。

「ああ、多分覚えてるだろうよ。お前もちったあは覚える練習しろ」  
マスターが、ハナの白い額を小突いた。

「ごめんよ。でも覚えるの無理だもん」

全く悪びれた様子のないハナに、マスターは舌打ちした。

「さて、これから、どうする？ 後、一時間ほどあるが」

今度は、ハナがマスターの額を小突いた。

「な、何すんだよ！」

「何も減った暮れもないでしょ？ ねえ、ええつと、あれ？ まだ、

あなたの名前聞いてなかったね？」

「藤棚正也。ここでの名前は解らない」

「ありがと、藤君」

藤棚に微笑んでみせるハナだったが、話題転換の接続詞を言い、

彼女はマスターに目をやった。

「マスターは、一体全体どうしてサブジョブを変更したんでしょう？」

マスターは右手で拳を作り、左手をぽんと叩いた。が、その後、  
気難しそくに顔をしかめた。

「解ってるって」

解ってないくせに、と小声で、しかし、マスターが聞き取るには  
十分な大きさの声でハナが言った。マスターは、聞こえていないふ  
りをしながら「ラプタル」と詠唱した。

マスターの手から青白い網が、マジロマに放たれる。

とっさに、藤棚は身構える。

「暴れないで！ 別に、痛くもなんともない」

その言葉で、藤棚の肩に入っている力が抜ける。

「と思うから」

やはり、警戒すべきなのだろうか。

だって、ラプタルなんて受けたことないから解らない、とハナが  
マスターに耳打ちしている。耳打ちの意味がない。藤棚は内心で小  
さく溜息を漏らして、網を見やった。ぼうつと靈魂のように青白い。  
その網の中で藤棚は動かずにいる。数秒ばかりそうやっている、  
網が消え、黄色い文字が藤棚の頭上に表示された。

捕獲成功！

「ありゃあ、ほんとに成功しちゃったな」

半ば、失敗することを願っていたかのような口調だ。

「じゃあ、これからは藤君も私達の仲間ね？」

「仲間って、おいおい。今思ったけどよ、俺らのしていること、目的をこいつに言うべきなんじゃねえのか？」

「あ、そうだった」

ハナが舌をちろりと出す。

「藤君、今から言うことを聞いて。そして、私達に付いてくるかどうか決めて」

彼女と出会ってまだ少ししか経っていないが、その間に、藤棚の中にできた彼女の人柄とは違う表情がそこにはあった。純粹な真剣のみが存在する顔。

真剣すぎる彼女の言葉の響きと顔に、彼は反射的に頷いた。

## 目的

ハナは、とある大学に通う女子大生。大学の名前を彼女は言った。藤棚は、その大学名を知っていたが、その大学の偏差値が高いかどうかは解らなかった。

そして、彼女は相当というわけでもないが、それなりのゲーマーでビニロジイのシリーズは欠かさず買っていた。

当然、オンラインゲームが発売されると、彼女は飛びついた。結果、不運なことに移行者となった。最初、右も左も解らない時にマスターと出会う。マスターは現実世界では男子高校生で、さほどゲームにはまっているというわけではなかったし、ゲームは金がかかる上に、すぐに終わるものと考えていたため、あまり購入していなかった。が、そこに、ビニロジイのオンラインゲームというエンドレスゲームが目飛び込んできた。

幸い光回線に加入していたということもあって彼もゲームを始め、そして移行者となった。最初、わけが解らなかったが、何度もこの世界にくる内に、そして他のオンラインプレイヤーにパーティーを組まないか、と誘われている内に、段々と、この世界のことを解ってきた。

とはいえ、自分で全ての情報を得たわけではない。彼の持っている多くの情報は、強敵に遭遇し、もう少してゲームオーバーとなるところで助けしてくれたアルビーから得た情報である。

中でも彼が恐ろしく感じたのは、ペルトレッドのことである。たまたま自分は、オンラインプレイヤーへ移行できたからいいもの、もし魔物へ移行していたら、と思っただけで、彼は気付いた。

ビニロジイオンラインは、自分の妹も、やり始めていたということに。ゲーム上にいる彼は、一刻も早くあのゲームを捨てようと考えたが、いかんせん、彼の意思はまだゲームの中。

目覚めると、すぐに彼はゲームを捨てようと考えた。そして二時

十三分になり、朝になった。二時十三分に思考が現実世界に戻っても、睡眠状態の思考なので、移行が終わってすぐに行動することは不可能なのだ。

彼は、はっと起き上がると、真っ先にゲームを捨てようとした。その時、彼の目に留まったもの、それは妹だった。

「おそらく、妹は夜中にこっそり、俺の部屋に入ってゲームしてたみてえだ。そして、いつもは、俺が起きる前に自分の部屋に帰ってたらしいんだが……じゃあ、どうして床にはいつくばるようになら寝ている？」

答えは、一つしかなかった。

「ペルトレッド化はな、起きてからなんだよ。最初は身体を痙攣させる。次に、身体が変化し始めている」

アルビーと会話している時に、マスターはそう聞いた。そして、今、目の前で起き上がるようにしている妹は身体を細かく震わせていた。

ペルトレッド化を防ぐ方法とは何か。マスターはアルビーに尋ねていたが、アルビーもそれを知らなかった。その後、ペルトレッド化を防ぐ方法を彼は聞いたことがなかった。だが、ペルトレッドになるのを遅らせるくらいの知恵は持っていた。

「石化してやればいい。そうすれば、ペルトレッド化も止まるだろうしな」

それから物体を見えなくさせる呪文エクスヴィジを唱えて、部屋の隅に移動させておいた。

「後で、人気のない裏山に隠した」

そして、つい最近までペルトレッド化を食い止める方法を探し続けていたが、もしかしたら、マスターの妹はペルトレッド化ではないのかもしれないということを知った。

「とある固定イベント、大金を稼げるイベントを、私達は何度も繰り返しやっていたの。するとね」

そのイベントは、森に現れる魔物を殺すことを村人から依頼され

るものだが、なんとその魔物が思考者だったのだ。魔物は、お前らいい加減にしやがれ、次にここへきたら、現実世界でお前らを殺してやる、と物凄い剣幕でまくしたてた。

「思考者がいるってえのは知っていたがよ、現実世界で俺らを殺すって言葉は初耳だった。いやいや、それが気にかかったってより、現実世界で俺らを殺せるってことは、思考者が現実世界に来ることができるという意味を持っているってこった」

マスターはそいつをとっ捕まえて、問うた。お前ら、思考者はどうやって現実世界に行くことができるのか、と。

最初は、ぐずって教えなかった思考者だが、剣を使って脅すとあっさりと教えてくれた。

この世界にいる機能者という人間に出会えば、その人が思考を現実世界へ移行させてくれる、と。

「急に俺の頭に嫌な考えがよぎったな、あん時。だから俺は聞いてみた」

思考だけの存在では、ゲームの中ならいざ知らず、現実世界では存在できない。お前達、思考者はどのようにして現実世界で存在しえる存在になっているのか。

その思考者は、気味の悪い笑みを浮かべてこう答えた。

簡単なことだ。現実世界にいる人間の思考を消去して、そいつの中に入れていいだけだ。

マスターは、そいつの頭を剣の腹で殴り付けてから手を放した。今の発言から考えるに、マスターの妹は、ペルトレッド化の可能性と同時に思考者による思考の乗っ取りも可能性として残る。

「次に俺の気になったことは、思考者の乗っ取った思考はどこにあるかってことだ。それとも、それが完全に消されているのか？」

マスターがそれを尋ねると、思考者は殴られた頭を抱え、顔を苦痛に歪めていたが、口元を笑ました。

機能者がバックアップとしてその記憶をデータとして持っている、そして、機能者が死ねば、機能者がバックアップとして保持してい

るデータが居場所を求めて　つまり、元の場所へと　戻る、と  
その魔物は答えた。

「てえすると、俺が機能者を殺せば記憶を乗っ取られた人間は助かるんだな、と聞くと、その思考者は小さく笑ったな」

お前ら程度に、機能者がやられるわけがないから言うんだ。そして、お前らはそいつをとっ捕まえに行くんだろが、それによって死ぬんだからな。つまり、俺が言うことによってお前らはゲームオーバーとなるんだ。

また、薄ら気味悪い笑みを顔に貼り付けている思考者を一瞥した後、マスターは移行の時間が来たことを悟った。

「まあ、だいたいこういうところだ」

話を終えて、もう俺の役目はないとでも言うように、マスターはその場にごろりと寝転んで、空を見つめている。遠くに表示されている空は電子的なはずなのに、とてもきれいだった。

「それは解ったけど」

「ああ、最後に肝心なことを言うのを忘れていたね。つまりね、私達は、その機能者つてのを捕まえて、現実世界で失われた記憶を取り戻す旅をしているの」

だらだらしないで起きなさい、とハナがマスターを二、三度叩いた。マスターがだるそうに起き上がるのを見届けてから、彼女は話を再開した。

「当然だけど危険がともなう旅になる。それにあなたを連れて行くために、わざわざマスターのサブジョブを一つ埋めているのに、その旅に貢献してくれないなら私達にとって、それは……」

不利益。いらぬ。不要物を持っていれば苦労する。

ハナの言葉の空白を、藤棚の思考が埋めた。ハナは自分を利用価値として見ていない。気分が黒くなるのを感じた。

利用価値ないと、使用なし。未使用のまま捨てられる。

別にこれでもいい。むしろ、俺は求め合いなんかで他人と一緒に人生を踊れない。藤棚は人との付き合いが、しがらみを作ることを知っていたし、いまだに、それを極端に嫌っていた。ただ、彼はそれを言わないだけだ。彼の心は冷たく閉ざされ、どういった言葉も彼には効かない。いくら言葉に着飾りしても。

だから、彼はハナに、じゃあ君達と別れるよ、と言おうとした。人を利益になるか否かで見ると一緒にいると考えただけでも、彼はぞつとしていたのである。

「これは私達だけの問題でもないの。これからも、現実世界にいる人の思考が乗っ取られていく。もしかしたら、君の身近な人もね」  
身近な人はいくらでもいる。が、幸か不幸かその中に価値を見出せる者なんて一人もいない。  
と、ふいに、彼の頭にある人がよぎった。

設楽春香。

彼女だけは自分に良くしてくれた。大学に入学してから、クラスで孤立していた自分を気遣って話しかけてくれた。もし、あの人の記憶が乗っ取られたら？ そう考えていた時、彼は一種の自己嫌悪に陥った。

結局は、自分も利用価値で物事を考えているのではないだろうか。いやいや、そんなことはない。自分は、ただ彼女のことを心配しているだけだ。何も利用価値で判断していない。

彼はそうやって、自分の中の矛盾に目を背けてハナに言った。

「旅に付いていく。機能者を破壊する為に」

「あーあ。ほんとに、こんな奴を連れてっていいのかねえ」

「いいの。仲間は多い方がいいんだし、それにオンラインプレイヤーを仲間に加えても機能者を破壊できないだろうし」

「え？ どういうこと？」

藤棚が尋ねると、ハナは通常のオンラインプレイヤーには機能者が見えないらしいということを教えた。

「俺が出会った思考者は、少なくともそう言っていたな」

マスターがそう言った時、彼の身体、そして、藤棚とハナのそれも淡い光を帯び始めた。

「いけねえ。もう時間が来ちまいやがった。おい、皆、メールアドレスを覚えているよな？」

ハナが舌を出し、藤棚が頭を掻いた。それを見て、マスターが怒ったように顔を歪ませた。

「藤君はいいとして、ハナ、お前はどなんだ？」

そこで、藤棚の目に映る光景も真っ白になり何も見えなくなった。

## 機能者と思考者

温もりを感じない。彼女が持つ能力は段違い。選択肢を与えることによつて腐敗した世界を変えてくれる存在が彼女である、と移行者は信じた。勘違いなんてことはありえない。

そもそも己の存在意義は、他者のためだけである。

各々が選択肢を欲しがり、その結果として彼女は産まれた。

不規則に旅するように見える彼女だが、自身の中に渦巻く言語によつて、きちんと行き先は決められていた。

何をすべきか、誰を排除すべきか。

最後に殺したのは、誰だったか。

背後に灯した使命。

アイロニーを感じたことは幾度となくあつた。

ぎらぎらと光る太陽を見る。デジタルの世界に産まれたのは、いつだったのか。

彼女は、自分の中に非常に多くの大事な記憶が存在していることを知っているのだが、同時に、その数と同数の記憶が現実世界から奪われているという事実も認識していた。

それがいいのかどうか考える権利を、命令によつて奪われていたはずなのだが、いつからか、疑問に思う権利を得てしまった。

そして、自分も現実世界へと行きたかつた。どのようにして、皆が現実へと旅立っているのか知っていた。

それが、普通ならば行くことは不可能だということも知っていたけれども、自分には、強大な力が備わっている。これを使えばいいのでは？　そして、自分の思考はここから消えるが、現実世界の者と交換するので安心だ。自分の抱えている重荷を、その人が背負ってくれるだろう。

自分だけここに手枷、足枷はめられて放浪しているというのも、不平等だ。が、自分がここから完全にお留守になるのは考え物だ。

ということ、彼女はある結論を出した。

昼は、私が活動すればいい。夜は、本体が活動すればいい。

そう考えた彼女は、駆け足で走り始めた。砂漠なので足が取られる。さらさらする砂に、彼女の足はなんの抵抗もせずに沈み込む。

これらの砂粒も、いつかは意思を持つようになるのだろうか。彼女は、ふとそう思った。が、それがたとえ事実であるとしても、遠い先の話になるだろう。

色々、そして悶々と自分同士で会話しながら道を行く彼女の目が何かを捉えた。

砂漠の先に、何者かがいる。目を細めて見ようとしても熱気で大気が揺らぐために、目の焦点が合っていないような錯覚に囚われる。この距離では、あれが何か解らない。与えられた選択肢を無視し、彼女はそれが何であるかを確かめに歩み寄った。もつとも選択肢といっても、彼女に与えられている選択肢は一つしかないのだから、選びようがないのだが。

近付くと、それが魔物であることが解せられた。乾燥して硬そうな深緑の背中。逆に、腹部や手は柔らかさそうである。ちょこんと小さい耳が付いている。

「ここで、俺は何度も産まれて間もない生命をかつさらった。そのたびに、オンラインプレイヤーに追いかけられた。オンラインプレイヤーに捕まると俺は赤ん坊を喰らう。捕まりかけても赤ん坊を喰らう。」

一見して俺には選択肢が与えられているようだけど、二択しかないしかも、使い古された選択肢だ」

彼女は鱗に守られた魔物を見てから、そして、彼と同様に選択肢を与えられていない自分の手をまじまじと見た。

「君はいいね。選択肢が与えられているから」

「でも、それも一定の制約がある。今ここにこうしているのも、たまたまここが通るように命令された場所であるからだ。私の中にある制限範囲内には、多少の差があるからこのように行動できるだけ

だ

「ふうん」

興味なさそうに魔物は言ってから、目をくりくりとさせた。

「言われてみれば、君が一番哀れなのかもしれないな」

哀れと言われた彼女は、自分が哀れだと初めて感じた。どうして、今まで自分を哀れと感じなかったのだろうか。

「君には、外へ行く自由すらないんだから。でも、まさか君が思考を持っていたとは」

「いや、最近、持つようになった。前には、持っていなかった」

言い訳するように言ってから、どうして自分が言い訳しなければならぬのだ、と彼女は首を傾げた。

「ああ、俺も外の世界に行きたいよ。選択肢の広がる世界へ」  
「行ける」

何でもないように、彼女は言った。

「本当に？ やはり、機能者の噂は本物だったってことか？」

「そういうことになる」

彼女が言っていると、魔物は目を丸くした。それから、彼女に今言ったことをもう一度言ってくれないか、と頼んだ。

「できる、と言った。少しややこしいとをしなくてはならないが」

「本当？ 冗談じゃないよな？」

魔物の目が、今では歓喜に満ちていた。

「可能だ。さあ、どうする？ どちらを選ぶ？ 早くしないと、次の命令が私に下って制約の範囲が変更されてしまう」

急かすように彼女が言っていると、魔物はしばし悩んだ後、こくりと頷きここう答えた。

「外の世界へ、俺を連れてってくれ」

起きなさい、遅刻になるでしょ。そう言われたのは遠い日のこと、まるで他人の記憶と思えるようになってしまった。

藤棚は、むつくりと身体を起こして伸びをした。朝の十時半である。昨日、寝たのはいつだったか、と疑問に思っ、すぐに十時十分であるに違いないことを思い出した。もつとも、あれが寝ているのに含まれるのならばであるが。

手を握り締めると、妙に汗ばんでいるのが感じられた。手を開いて掌を乾かす。

壁にもたれかかり、深呼吸した。肺に流れ込む空気は、湿っぽくて重たい空気。どんよりとしたものである。

朝なので清々しい空気のはずだが、彼の部屋の空気はどんよりとしている。窓を開けたのは、いつなのか。カーテンが開いていたのはいつだったか。それは褪せた写真より、不確かな記憶となって彼の頭にしまわれている。

不思議なものだ。たった三年しか経過していないのに、彼の持つ過去は随分と薄まってしまっていた。時間の経過の割には、という話ではあるが。

ふいに、机の上にある彼の携帯が震え出した。誰だろう。藤棚は立ち上がって、携帯を確認した。知らない差出人から来ていたが、メールアドレスを見れば、すぐに誰か解ることだ。

件名はない。

誰かからのメールアドレス変更の通知かもしれない。気になり、彼はメールを開封した。そして、すぐに誰からのメールか解った。

今夜、気合入れて移行してこいよ！ x x x x @ . n e . j

p ハナ

マスターだ。早速、メールアドレスをアドレス帳に登録しておくついでに、ハナのメールアドレスの登録にも取りかかった。おそらく、ハナが藤棚のメールアドレスを忘れているのを見越して送ってきてくれたのであろう。

「俺も、完璧に忘れていたな」

ハナのメールアドレスを登録し終えてから、マスターは、よくメールアドレスを暗記できるな、と感心した。あの思考だけの世界で記憶する感覚が、藤棚には解らなかった。

携帯を閉じ、藤棚はテレビを点けた。

テレビでは、ペルトレッドの被害報告と警戒地帯の報告が、いつものようになされていた。が、次に来たニュースは違った。

通り魔的犯行の急増であった。ペルトレッドの仕業であるならば、喰い散らかしたり、暴れたりするので人間の仕業ではないことが、すぐに解るので、ペルトレッド以外の犯行と言うことになる、とニュースキャスターが説明していた。

だとしたら、犯人は誰なのだろう。ニュースでは、死体には剣のようなもので心臓を一突きにしたものや、首を切断したものがあると深刻そうな顔をした記者が話している。

それを見ても、藤棚には遠い国での話であって自分には関係がない、と今までは思っていただろうが、今のかれは違った。

ペルトレッドの仕業ではなく、そして力が強く、なおかつ犯行現場を見られていない。そのような賢いやり方ができる犯罪者は、自ずと絞られてくる。

思考者。

現実世界へと移行した思考者の仕業に間違いない。

リモコンを手にしながら、彼は頭をがしがしと掻いた。

と、またも、携帯電話が震え始める。藤棚は携帯電話に手を伸ばし、メールを見た。

電話しろ 090xxxxxx

後、一応、住所も教えておく  
xx県 市 町4-111-

随分と素っ気ない文面だ。藤棚は、電話番号を登録してから電話をした。

「もしもし？」

『ああ、藤君か？』

少し高い男の声だ。その声には藤君と呼ぶのに少しからかいが含まれているようだった。

「そうだけど」

『ニューズ見たか？』

「見た。あれは、やっぱり……」

『ああ、思考者の仕業だろうな』

「で、でも、どうして殺人を？」

『いいか？ 耳をかつぽじってよく聞け。ペルトレッドは現実世界に來た途端に理性を失う。思考者は、現実世界に來る前に何かを失っている者もいる』

「な、何かって？」

マスターの溜息を漏らす音が、電話越しに聞こえた。

『色々あるが、例えば英雄の仲間だった者ならば、正義を貫いてきたわけで、悪というものを体験してみたくなるもんだから正義を失っている。』

村人を殺し続けた悪魔ならば、もう二度と暴力的なことをしたくないから闘争心を捨てている」

マスターの話の聞くと、では今度の事件は勇者や魔王を退治する正義の思考者が起こした事件だと考えられる。

『ここまで聞いたら解ると思うが、おそらく、昨今のニューズを賑わしている野郎は現実世界にきた思考者はまず間違いなく正義を演じていた奴だろうな。そして、問題なのは、そこじゃねえ。実はな移行者もそうだが思考者も、ゲーム上での力をこっちの世界で使いちまうんだ』

「そ、そんな！」

藤棚の声が、少し震えた。

ビニロジィーには、島一つを吹き飛ばす威力を持つ英雄や招喚士もいるのだ。

口の中が乾く。もし、そういつた者が面白半分はその力を使ったとしたら……考えるだけで寒気がする。

『気にし始めたらキリがねえ。とつとつ機能者を破壊する以外に方法はない』

「その機能者って、一体、どこに？」

『奴は、ずっと移動し続けているらしい。ある場所に留まることなくな。そんなもって、見た目は、どうも女らしい。しかも、とびつきりの美女らしい』

美女と言われても、それぞれの主観もあるだろうし、第一オンラインゲームの世界では、その多くが、美女、美男子である。

「それだけじゃ、解らないと思うけど。いくらなんでも、美女ってだけでは……」

『しまったな。それも、あの思考者に聞いておくべきだったか……。まあ、いい。そうとなりゃあ、現実世界で思考者をとつ捕まえて、吐かせればいいだけだ。お？ こりゃ、いいな。名案だ』

急に早口になっているマスター。本当に、自分で名案だと思っているらしい。確かに、それは名案かどうかはさておき、いい案だろう。

『よしよし。じゃあ早速、今日集まるか？ いや待てよ。俺達移行者は、現実世界でも力を使えるが、お前はどうなんだ？ 使えるかどうか試してみたか？』

マスターから疑問を投げかけられたが、藤棚は、そもそも、ゲーム上でも自分の力や能力を使ったことはない。ただ逃げるために、走ったくらいなものである。

「解らない。ゲームでも力を使ったことはないし」

あー、とだるそうな声が出た。

『そうだな。お前は移行者になってから、二日だしな。じゃあ、お前が力を使えるかどうかつてのを調べるために集まるつか。ハナには、俺が連絡しといてやるよ。また、集合場所なんかが決まれば連絡する。ん？ 待てよ、お前はどこに住んでる？』

藤棚は自分の住所を言った。

『ああ、電車を使えばなんとかなる距離だな。 県に来れるか？ 俺とお前の間の県に、ちょうど八ナがいるからよ。それが、いいと思うしな』

じゃあな。マスターは一気にまくしたてた後、一方的に電話を切った。

再び、部屋に静寂が戻る。じっとりとして無音に近い室内で、彼は椅子に腰掛けた。

いつもなら朝からゲームをするのだが、今日は乗り気でなかった。実際にゲームの世界に入るのに、どうして現実世界でゲームをする必要があるのだろうか。

しかし、暇だった。まだ早いけれども、設楽に会いに行こうか。この時間帯で設楽がバイトしているか怪しいところだったが、いなければいけない。どうせ、することはないのだから。藤棚は、部屋を出て玄関に向かった。

ドアノブを回すと、母が扉を開けてこちらを見ている。

「でかけるの？」

「うん」

母は、慌てて扉の奥に引っ込んだ。その後、どたどたと慌しい足音。彼には一体、母が何をしているのか解っていた。あくまで、それは推測だが、彼はそれが当たっていると胸を張って言えた。

「気を付けてね」

こちらの顔を伺うように言う母に、少し嫌な気持ちを抱いた彼だったし、自分の推測に自信を持っている彼だったが、母からお金をもらうのは忍びなかった。が、それでも彼は無言でそれを受け取って家を出た。

背後で扉が閉まる。彼は外の清々しい外気を肺に送り込んで、一息吐いた後、歩き始めた。

そして花屋へ、と思っていたが、ゲームセンターに行ってから設楽と会うのも悪くない、と考えた彼は、行き先と予定を変更した。

幸い彼の財布には、今まで母からもらい使い切れなかった札が数枚あった。ゲームセンターで遊ぶには十分な金額である。

## 親友の自殺

ゲームセンター内は、大抵、喫煙者の口から吐き出される煙の臭いが充満している。嫌煙者の彼にとつて、煙は不快な対象そのものだった。だが、ゲームの娯楽と煙にたえる苦痛を秤にかければゲームの重さが勝るものだから、今も、横を通った喫煙者が吐き出した煙を鬱陶しそうに見つつも、アーケードゲームの椅子に腰を下ろし、百円硬貨を投入したのである。

藤棚がやるうとしてしているアーケードゲームは、格闘物で、彼の最も得意とするシリーズである。家にこもりがちになってから、ゲームセンターに来ることはほとんどなくなってしまうが、それでも彼には勝つ自信があった。

一通り、満足するまでゲームを終えた後、彼はゲームセンターを出た。金はさほど減ってはいない。ゲームセンターを出て、さてこれから花屋に行こうか、と思い、時計を見る。十一時を少し過ぎたところである。

彼は、ゲームセンターを出て、右手にある人気のない路地裏のことを思い出した。そこから行けば、かなりの近道になる。

彼はそう決めて、路地裏に入った。路地裏の道路は雨が降ってもいないのに、濡れたままで、苔むして道路が膨らんでいる部分もあったし、昼なものにも関わらず路地裏は高いビルだの何だのに囲まれて薄暗かった。当然、街灯なんてものがあるわけもない。ここを通らなければ良かったかもしれない。

「おい」

不意に後ろから声がかかった。その声には敵意が含まれているというより、柔和な要素が込められているものだった。

藤棚が振り向くと、二人の男が立っていた。一人はガムを食べて

いるらしく、くちやくちやくと口を動かさず、もう一人は首をこきこきと鳴らしている。どちらも頭の悪そうな金色に染めているな。藤棚はそう思いつつ、若干の恐怖を感じていた。カツアゲでもしてきそうな人種である。

「なあ、金貸してくんない？」

どんぴしゃりな展開に、藤棚は眉をひそめた。内心だけで。

藤棚が何も言わずに黙っていると、

「ちょっと、俺ら金に困ってんのよ。貸してって言ってんのが解らねえの？」

先程とは打って変わってドスの効いた声を発する。

決して低身長ではない藤棚だが、金髪の男二人は両者とも藤棚より高く、また腕っ節も良さそうだ。腕の太さや、見るだけで厚そうな胸板からもそれが解る。

金を渡せばすぐに終わる。それだけで安全を得られる。痛い思いをしないで済むのだ。藤棚は頭できちんとそれを理解していたし、普段の彼ならばそれに従っていたことだろう。しかし、彼の口を突いて出た言葉は、金を大人しく渡す言葉ではなかった。

「何？」

不良が、目をぱちくりさせた。

「今、何て言った？」

「嫌だ」

不良二人組みの顔は一瞬強張った。そう、ほんの一瞬である。次の瞬間には、不良の内の一人在、藤棚の肩に手をかけた。

「痛い目見ねえと解んねえみたいだな」

藤棚の肩をつかむ手に力が入る。そして、もう一方の手が拳として藤棚の顔を殴打する、かと思いきや、その拳は空を虚しく切った。何が起こった？ 考えるまでもなく、それは藤棚が拳をかわしたことを意味するのだったが、少しの間、不良二人も、そして避けた当の本人にも解らなかった。

何かの間違いだ。不良はそう判断したらしく、藤棚の肩にかけて

いる手を離し、続けざまにパンチを放つ。

だがしかし、結果は同じだった。藤棚は反射的に迫り来る拳全てを避ける。どうしてだろう。なんで、こんなにも容易くパンチを避けられるのか。引き籠もっている彼の身体能力が一般人に比べて秀でているということは有り得ない。

とすると、何なのか？

パンチを避けながら漫然とそう考えていると、今度は反射的に不良の拳を避けずにつかみ、そしてそのまま力を込める。

痛みにたえかねた不良の叫びが上がる。

「この野郎！」

ここで、もう一人の金髪がどこから持ってきたのか、それとも最初から隠し持っていたのか、錆びた鉄パイプで藤棚を殴り付けた。今まで巧みに拳を避け続けたさすがの藤棚も、予想外の攻撃をまともにくらった。しかも、脳天に直撃した。意識が朦朧とする。

「この野郎　よくも　」

声が途切れ途切れだ。藤棚の耳が、断片的に不良の声を拾えていない。

「くそつ　の野郎！」

重い塊が身体に叩き付けられる。身体の奥にまで響き渡るような感触。鉄パイプが身体に打ち付けられるたびに、身体がみしみしと軋む。

俺は何か悪いことをしたのか？　カツアゲにあったのに、調子に乗ってそれを断った罰なのか？　しばらく自堕落な生活をしていた報いか？

違う。それは違う。家にこもるようになった原因だって、何も俺が原因ではない。

何度目になるか解らない鉄の重みを身体で感じながら、藤棚の意識は落ちていった。

「ようよう、なかなかやるなあ、フッシー」

この声は確か……。恐る恐る藤棚は目を開けた。

「次は、お前が戦ってくれよ」

ほら、と親しげに男が藤棚にコントローラーを渡す。

彼は誰か。疑問に思いつつ手渡されたものを受け取り、その男の顔を見た。そして、藤棚はその男が誰であるかの答えを導き出したが、その解答が信じられず、気さくな男をまじまじと見つめた。

「なんだよ、俺の顔に何か付いてるか？」

しかし、怪訝そうな顔をする彼は、まさしく今田力だった。ありえない。彼はすでに死んでいる。窓から飛び降りて命を絶つたはずなのに。

と、鋭い音が前から聞こえた。続いて、何かを発射する音も。

「おいおい、もう始まってるぞ、ほら！」

藤棚がはつと前を見ると、魔物が藤棚の操作するキャラクターに襲いかかってきていた。

タイミングよくボタンを押せば、魔物の攻撃を回避できる。アクションRPGだろ、これは。焦りを感じた藤棚だったが、一度攻撃を受けてからはテンポよく攻撃をかわし、かわした後には必ず一撃を魔物に打ち込む。

「さすがだね」

ひゅう、と今田が口笛を吹いた。

今田に誉められた時、藤棚はなんだか照れくさく感じるのだが、今の彼はそれを感じるよりももっと大きなものが頭の中を占めていた。

どうして、彼が生きているのか。これは、夢？ そうか、夢か。

夢の中なら、普通のことだ。

そうして、藤棚は夢と割り切ってビロジィーで今田から託された面を見事にクリアした。

「お前、めっちゃうまいな。というかさ、お前、前より格段に強くなつてないか？」

俺はお前が死んでからずっとビロジューをやり続けていたのだから当然のことだ、というのは億尾にも出さず、そうか？ とだけ藤棚は答えておいた。

気付けば、夜中三時を回っていた。カーテンを開けずとも、外がとくに闇に浸されていることが解る。

じゃあ、そろそろ寝ようか。今田力がそう言い、こうこうと部屋を照らしている灯を消した。

目覚めると、窓に手をかけている今田の姿が目に入った。何をすのか、と藤棚が思っていると彼は窓枠に足をかけ、そして、飛び降りた。まるで、それが当然とでも言うように。自然すぎる動作のあまり、藤棚は何が起こったのか解せなかった。

彼はどうしたのか。彼は何をしたのか。解らない。なかなか理解できない。

否、解るが、彼の脳がその可能性を振り払った。起きて間もない藤棚だったが、眠気のない彼は 実際は眠気があったのに、彼が気付かなかっただけなのかもしれないが 身体を起こし、窓に歩み寄る。

窓の下には何もなく、土色が広がっているだけと信じていた。あるいは、そうであってくれと願っていた。

そこにあるのは真実で、それ以外のものではない。それを見れば、藤棚の見たものが真に起こったことなのかが解る。

見ることは怖かった。だけれども、まさか、という気持ちもあつた。

彼は窓の下を見た。

そこに広がるものは土色ではなかった。やはり、あれは幻覚ではなかった。

急に胃がむかむかしてきた。

あの時だ！ あの時のことを俺は夢で体験しているんだ！ どうして？ どうして？ よりによって、こんな過去をなぜ、見なくちゃいけない？

手で口を覆って、彼はその場にうずくまった。頭がくらくらしてくると同時に、怒りが心の奥底からふつふつと沸いてくる。

「どうしてなんだあああああああああ！」

藤棚は身体に浴びせられる痛み、そして、心で感じてしまった過去の苦悩を振り払うかのごとく、腕を振るった。

ぐしゃり、と柔らかいものがつぶれるような音がした。

何をつぶしたのか、なんて考えるより先に藤棚は腕をもう一振りした。

先程と同様のやわなものが握りつぶされるような、湿り気を含んだような音がした。

しかし、藤棚は音に気付かず、手で顔を覆って泣いた。顔をひんやりとした涙が伝う。そして、それ以外の温か味のある液体が頬に付く感触。

藤棚は顔から手を離れた。手に付着しているもの、それは血だった。

自分の顔に傷でも付いているのか、と思うより前に、彼はもつととんでもないことに気付いた。

今の藤棚の手は、彼自身の手ではなかった。彼以外のもの、そうマジロマの手だった。

ここも夢の世界とでも言うのか。きよろきよろと辺りを見回すとそこは路地裏だったし、おまけに、道路には不良二人組がぐつたりとその身を横たえていた。藤棚を鉄パイプで力任せに殴打しまくっていた人間である。その金髪頭二人ともが多量の出血をしていた。

一人は肩から。もう一人は、腹部を。どうしてそうなったのか解

らない。藤棚はしばらくぼうつとしていた。

そして、しだいにとんでもないことをやらかしてしまったことに気が付いた。

自分の手は血糊でべっとりとなっており、不良二人組みが重傷を負っている。どんな馬鹿でも、この二つから何が起こったかくらいは容易に推測できる。

それに、たとえ、藤棚がこの二人に手をかけていなくとも、この現場を見られたら藤棚がやったことになってしまふことだろう。

唾を飲み込み、藤棚は後退り、そして、スイッチでも入ったかのごとく凄まじい速度で逃げ去った。

心臓が激しく鳴っている。息も荒い。たまらず、藤棚はその場へたり込んだ。

ここは、あの路地裏からは離れた場所にある廃工場だ。人氣が少なく、この化け物姿を人に見られる心配は、とまで考えてから、藤棚は首を傾げた。

確か、自分は人通りの多い商店街を突き抜けて、ここまできたはずだ。なのに、どうして、誰も怖がって自分から遠ざかったり悲鳴を上げたりしなかったのだろうか。

鼻先から一滴の汗が落ちる。鼻の上に汗が溜まっているようだ。

手でそれを拭おうとして、それが自分の手に戻っていることに気が付いた。

道理で、人々が逃げないわけだ。

がしかし、血糊は付いたままだ。藤棚は自分の服で擦ろうとして、それを止め、ズボンからハンカチを取り出した。

ハンカチである程度拭くと、手から腕にかけてくすんだ赤色が抜けた。若干残ってはいるけれども。

携帯電話がぶるぶると震え出した。誰だろうか。

「はい」

『おー、マジロマ。さっき言ってた駅に二時半に来てくれ』

「二、二時半？　いくらなんでもそれは……」

電話が切れた。用件だけ言って切る主義らしい。

行きたくない。行くような気分ではない。人を偶発的とはいえ、二人も殺めてしまった。なぜだか知らないが、マジロマの姿となつて、あの腕で命を奪ってしまった。自分でも知らぬ間に殺してしまつたために、彼は余計に自分が怖くなった。怒つた拍子にだとかではない。殴られて意識が朦朧とし、目覚めて腕を軽く振るつた後、彼らはそうなっていた……。

まさか、腕を軽く振るつただけで、奴らが死んだのか？　考え難いが、マジロマの腕力がもし現実世界で発揮されているとするなら、大いに有り得ることだ。

移行者もそうだが、思考者も現実世界に、ゲーム上での力を使える。マスターの声が蘇つた。もしかしたら、自分も現実世界でも、力を振るえるのか？　だとしたら？　普通の移行者ならば、マスターの口調から解るように、自在にその力を使えるようだ。

でも、俺は力を制御できていない。いつ、またマジロマになって暴れ出すのか解らない。

そう、今度彼が暴れた時に、殺す人間は設楽春香なのかもしれないのだ。原因不明。唯一、その原因を説明してくれそうな人で、彼に心当たりがあるのはマスター、あるいはハナだった。

## 機能者の過ち

膝の高さにまで成長している草が繁茂しているこのフィールド。雨が降ったり止んだりしているために、所々にぬかるみが潜んでいる。草がそれを隠しているものだから、始末が悪い。

雨が降ってきた。温もりの残る雨。

これで何人目だろうか。機能者は、雨によって濡らされてゆく魔物の外皮を擦りながら思った。

ゲーム中の固定キャラクターの多くが、この世界に疑問を持ち、そして、苦悩の日々を送り始めている。

思考を持つに至った経緯は、キャラクターそれぞれによって異なる。

この魔物の思考者 外の世界へ、俺を連れてってと言った彼は、とある村の赤ん坊をさらい、オンラインプレイヤーが彼を追いかけるというものだ。

優秀なオンラインプレイヤーは彼を捕まえるだろう。オンラインプレイヤーの劣等生は、彼を捕まえ損ねるだろう。

つまり、結果は二手に分かれるのだが、どの結果に行き着いてもこの魔物の行いは変わらない。

捕まると彼は赤ん坊を喰らい、捕まりかけても彼は赤ん坊を喰らう。

いずれにせよ不幸が待ち受けている。このようなことを無限に繰り返したこの魔物の思考はすでに廃人一步手前だろう。機能者は哀れみを感じた。

「もうしばらく待つて欲しい。現実世界にいる人の思考を私の中に取り込むから」

この作業はすぐに終わるので、機能者は思考者である彼の思考を現実世界に送り込む作業も開始した。

が、どうしたところだろうか。普通ならば、現実世界の人間の思考

を引き剥がすことはものの数秒とかならないはずなのに、今回に限ってそうはいかなかった。

処理速度を高めてみるも、結果は同じである。更に高めてみるが、同様の結果を得るに終わった。

そうこうしている内に、思考者の思考が対象の人間へと吸い込まれていく。機能者はそれを感知したが、もうどうにもならない。

思考と思考が衝突すれば、どちらも砕け散ってしまう。最良の結果であっても、いずれかが生き残るだけだろうし、その勝ち残った思考は負傷するはず。元の思考ではなくなることはまず間違いない。半狂乱になるか、それとも

その先を考えて、機能者はぞくりとした。

「こういうこともあるのだな」

誰に言うともなしに機能者は呟き、それから定められた道を歩き始めた。過ぎたことを悔悟しても詮ないことである。今は、一人でも思考者を現実世界へ送り込むことが先決だ。

女子大生の下宿先に男二人がいるというのはなんとも変な感じだ。ハナの部屋はともきれいに整頓されており、塵一つない。ハナ自身もきれいだっただ。

ビニロジィーでの彼女はエルフゆえに現実世界でハナを見ても、彼女が彼女だとは解らなかった。髪の毛はほんの少しだけれども栗色に染めている。

マスターは、少し顎が出て意地の悪い男に見えた。マスターもハナと同様にビニロジィーとは全く容姿を異にする。

「なるほどねえ、お前の場合は、この世界でマジロマになっちまうわけか」

神秘的な面持ちで、マスターがこくこくと頷いている。

「それは……移行者では剣や盾を呼び寄せたり……魔法を使えたりする……代わり……でしょうね」

ハナがうつむきながら言う。やけに小さい声だ。どうしたのだからか。

「それって、意識してやるのか？」

藤棚が聞くと、ハナは無言で頷いた。やはり、何かがおかしい。

「あーっと、お前に言い忘れてたけどよお」

マスターが藤棚に話しかける。

「ハナは、ビニロジィーや電話でじゃ普通に話せるけど、こうして顔と顔を合わせることはできねえし、声も小さくなる……」

対人恐怖症か。それとも、単に人付き合いが極度に苦手なだけなのか。いずれにしても、似たようなものだ。藤棚はハナのビニロジィーでの生き生きした姿と、今の雰囲気との違いの大きさに戸惑いを感じていた。

「まあ、そう気にすんな。それより、どうした？ 移行者の能力を聞くことは、お前もなんか能力使えたってことだよな？」

藤棚は頷いた。

「てえことは、意識を高めてやったのか？ 能力は、意識しないと使えねえからな」

「でも、俺は意識してじゃなかった……あいつらに鉄パイプで殴られまくって……それから、それから……」

あの時のことを言葉にしようとする、なぜか涙が目に滲み、嗚咽が漏れ出した。

ハナが優しく藤棚の背中を擦り、大丈夫、大丈夫、と小声で言う。マスターが面白くなさそうに舌を鳴らす。

「マジロマになって……俺は殺してしまった……」

殺したことで、彼の中に罪悪感が芽生えたわけではなかった。彼は人を殺めてしまった自分が怖かっただけだ。

「そんなのことを、もっと詳しく話せよ。そしたら、何か解るかもしれないねえだろ？」

ぶっきらぼうにマスターが言った。

「ちよっと……」

ハナがマスターを叱るように言うと　とはいえ、掠れたような  
か細い声だったが　彼は舌打ちして何も言わなくなった。

「話せるように……なってるからで……」

ハナは、彼の背中を擦った。

そうやって時間が経つにつれ、藤棚は落ち着きを徐々に取り戻し  
始め、そして、どうにかあの時のことを話し始めた。

不良二人に絡まれたこと。そして柄にもなく抵抗し、たこ殴りに  
されそうになったが不思議と相手の攻撃を避けられたこと。

「おい、ちよいと待て！　お前は、マジロマにならなくても力があ  
るってことか？」

マスターが、早口で藤棚に尋ねる。

「ん？」

言われてみれば、確かに相手の攻撃を避けている時はマジロマに  
なっていなかった。藤棚は頷いた。

それを見てマスターも頷き、続けて、と言った。

「相手の攻撃を避け続けていたけど、次……俺は相手の拳を受け止  
めて、力を込めて握った。すると、相手が痛がった……その後……  
その後、もう一人の男から鉄パイプをくらって、意識が遠のいて……  
…そして、夢を見ていた」

藤棚の口が閉ざされる。

「どんな夢だ？」

思い出したくもない夢。

まさに悪夢。

なのに、マスターはそれを探る。

藤棚は隠す、という行為をしたかった。

だが、彼は彼らに自分のこれからを託すことに決めていた。藤棚は  
包み隠さずにあの時のことを話した。

「もう数年前のことだけど、俺は親友を一人失った。ビニロジィー  
をして、そして、それから俺とその友人は寝た。

目が覚めると、友人は窓枠に足をかけているところだった。起き

てまだ頭がはつきりしていなかったけど、彼が飛び降りるのを見て、妙に頭がはつきりし始めた……。

そして、それは事実だった……真実だったんだ……俺が見たのはこんな夢だ……」

急にまたやりきれない感情が湧き上がってきたが、どうにかそれを抑え込んだ。

あの時、なぜ、今田は俺に相談しなかったんだ？俺にも話せないようなことで悩んでいたのか？たととしても、どうして俺の前であんなに明るく振舞っていたのか理解不能だ。

藤棚はぐつと唇を噛み締めてから、ハナを見た。彼女は先を促すように言うわけでもなく、顎をしゃくってみせるわけでもなかった。意外にもマスターもそうだった。

が、藤棚は話を進めた。

「気絶していた俺は、あの時の悪夢を見ていた。で、怒りつていうか、熱い感情が溢れてきて、そして、目覚めて腕を一振り、いや二振りしたら、あいつらは死んだ。目覚めたら、いつの間にかマジロマになっていた」

話はそれで終わったわけではなかったが、藤棚はもうこれ以上は話したくなかった。だがしかし、話せること全てを話さなくては、マスターとハナが移行者あるいはペルトレッドとしての自分の奇異な能力を解明できないかもしれないと思い、話を再開した。

「死んだ不良を置いて、俺は逃げた。どこをどう通ったかなんて解らない。とにかく、逃げて逃げて、気付けば廃工場にいた」

「ちょっと待て。逃げてる時、お前はマジロマじゃなかったのか？」「多分、マジロマじゃなかった。でないと、今頃大騒ぎになっているはずだから」

そして、再び沈黙が訪れる。何を話せばいいのかハナもマスターも解らないのだろう。藤棚自身も、自分が何を話すべきか解らなかった。

「お前がマジロマに変化した理由が解ったかもしれないねえ」

ハナの俯き加減の顔が少しだけ上がる。

「おそらくよお、感情によって変化するんじゃないかねえのか？ そう仮定すりゃあ、すんなりと説明がつくだろ？ 不良二人と……その……もめた後、街中を走ったんだろ？ 大騒ぎになってねえことからすつと、お前はマジロマじゃなかったはずだ」

マスターが藤棚を見て、だろ？ と同意を求める。藤棚はそれに頷いた。

「とすると、走っている間に激しい感情、少なくとも怒りに近い感情をお前は持っていなかったはずだ。だから、変化が解けた」

今度は、ハナを見るマスター。

「でも……どうして変化前から……彼には力が？」

「いや、そこまでは解らねえがよ、おそらくこうなんじゃないかねえの？ あいつは、変化する前も一般人より身体能力に優れているが、それはズバ抜けてってわけじゃない。鉄パイプをくらって意識が朦朧としている時点でそうじゃないかねえか？ マジロマならそんなことにはならねえと思う。移行者がお前を鉄パイプで殴ったわけじゃあるめえし。てえことは、マジロマに変化すりゃあ、お前は更に強くなるんだ。ほら、それを証明するものが目の前にあんだろ？」

藤棚、そしてハナはきよきよと部屋の中を見回したが何もない。

「馬鹿か、お前ら……。ほら、藤君の身体を見てみるよ。やっこさんが痛がってないことからすつと、鉄パイプで殴られた痕はないんじゃないかねえの？」

藤棚はまさかと思い、服を脱いでみた。すると、マスターの言う通りだった。身体には、痣の一つもなかった。

「多分、マジロマの特殊能力リヴィイが、お前を回復させたんだろうな」

リヴィイとは自動回復魔法だ。極少量ながらも常時、体力が回復していくというものである。

なるほど、と言うようにハナが僅かに首を縦に振る。

「まあこれら全部、憶測だけだよ、多分あつてると思うぜ」

藤棚もマスターの言っていることはあっている気がした。彼の身に起こったこととマスターの言ったことを照らし合わせれば、ぴたりと当てはまるからだ。

「んー、だからよ、お前はまず不用意に怒らないこつた。感情が激しくなると多分お前はマジロマになる。まあ、もし現実世界で戦いに巻き込まれたなら仕方ねえが……」

「解つた……それで、今日、ここに集まったのは機能者捕獲のためだろ？」

藤棚が言つと、マスターは目を細めたが、なんでもないように機能者捕獲作戦について口を開いた。

「俺が思うに、思考者つてやつは機能者を經由してこの世界に来ているんだから、絶対に機能者の顔を知っていると思う。もしかしたら機能者の居場所も知っているかもしれないねえ。だからよ、ビニロジイーにいる思考者に機能者の居場所を聞くのもいいかもしれないねえども、それだとな」

「機能者を經由して来ていない思考者が大半。聞いても無駄なことが多い、だろ？」

藤棚が先読みして言つと、マスターの鼻がふんと鳴らされた。

「そつだ。現実世界にいる思考者は全員が全員間違はなく機能者を見たことがあるやつなんだからな。で、まあ今までの話を要約すつと、俺らは現実世界で思考者をとつ捕まえて、機能者のことを吐かせるつてこつた」

マスターが握り拳を作つてにやりと笑う。

「そう簡単にいかないだろ？」

「いかない……。でも、そんなことは……機能者捕獲を決意してから百も承知……」

「よし、じゃあそついうことでさ、もし現実で思考者を見付けたらお互いにすぐにメールしてくれよ」

## 世界は符合する

帰宅して早々、ニュースで大規模な爆発があったことが報じられていた。原因不明の爆発は、×××県で起こったらしい。爆心地には謎の巨大物体があるとのこと。きっと思考者の仕業なのだろう。

爆心地への立ち入りは、記者であろうとも禁止されている。不発弾が残っているかもしれないということで、政府が立ち入りを禁止しているのだ。

が、好奇心を抑えきれない者、禁止されればされるほど撮影しに行きたくなる取材陣がこぞって爆心地へ行こうとする。彼らの多くは、見張りに付いている警官によってその好奇心を満たす行為を阻まれるのだが、中には成功する者もいる。

立ち入り禁止区域の手前で警官がずらつと並んでいる様子を撮影しているレポーターが、今もまだ一人入って行きました、と言っている。緊迫した状況なのに、なぜか、そのレポーターの声に緊張さが感じられなかった。

『今も、一人強引に中に入って行きました』

数十人で雪崩れ込むようにして突進すれば、警官の壁も押し崩される。引き留められる者も何人かはいるものの、全員を引き留めることは不可能で数人が親友に成功する。

中に入って何をするのか。彼らは、思考者に殺されるのだろうか。爆心地にいる思考者が善人であることを祈りつつ、藤棚が携帯でこのことを連絡しようとした時、携帯が震え出した。マスターからの電話だ。

「マスター、爆発があったけど、あれって……」

『ああ、解ってる。思考者の仕業に間違いねえ』

「あそこに行くのか？」

藤棚が尋ねると、電話の向こう側が黙り込んだ。迷っているのだろう。

『行きてえのは山々だがよ、おそろくとんでもねえ力を持った思考者がいるはずだ。あれほどの爆発を起こした奴だからな。そもそも思考者をとっ捕まえるのは機能者をぶっ殺すための手段だ。目的じやねえ。とはいえ……まあ偵察くらいならいいかもしれん。』

正面きつての戦いじゃまず間違いなく分が悪い。いつでも逃げれる準備をしておけば、おそろく死にはしないだろうし、俺はファネントを覚えてるから、いざという時はそれを使えばいい』

ファネントでの移動は一瞬にして、しかも、遠距離まで逃げることができる。これを使えば殺されることはないだろうし、居場所がばれることもなさそうだ。

『問題はだな……ハナがこの作戦に賛同してくれるかってことだ。あいつは、相当の慎重派だからな。で、ここで俺から折り入って頼みがある』

面倒な頼みになりそうだな、と思いながら、何？ と藤棚は聞いてみた。そして、それはやはり面倒なものだった。

『どうしても、爆発を起こしたあの思考者に探りを入れたいの？』  
「そうだ」

電話が始まってから、このような内容をぐるぐる回し続けている気がするの自分だけだろうか。いい加減うんざりしてきた藤棚だったが、自分に良くしてくれたハナだ。怒鳴りつけるわけにもいかないし、と考えていると、

「いいよ。解った。でも、少しでも危険を感じたら即座にファネントを使うようにマスターに言っておいて。これが条件！」

なんだそれくらい容易いことだ。藤棚は二つ返事で承諾し、ありがとつを言ってから電話を切った。

「それにしても」

電話では普通に会話できるのに、どうして対面するとともに話すことが彼女はできないのだろうか。藤棚にとっては、そちらの方も

結構な疑問点であった。

爆心地の周囲は警官によって封鎖されている。どこからも入れなさそうである。藤棚は疑問に思っていたもののマスターの「俺は魔導士だろ」の一言で何かやらかしてくれるのかな、と推測している。と、やはりそうであった。

マスターは、フィールド上にいる時のみ使用可能なエクスクォムを唱えて、藤棚とハナ、そして彼自身の姿を透明にしたのである。

「ゲームだと一定時間だけ魔物と遭遇しなくなる魔法だけど、現実世界で使えばこうなるのか……」

「ご名答。で、透明にしてからは、軽く空中散歩だ」

今度、マスターが唱えたのは、サブグラ。ゲーム上では、僅かばかり宙に浮いて床からのダメージを防ぐ魔法だ。が、どうも、これも現実世界では少しばかり勝手が違うらしい。

「魔力を少し多めに使えば、浮遊できる高さが変わってくる。今は、これくらいでちょうどいいだろう」

マスターの言うように、確かに2メートル程の高さを浮遊して、なおかつ透明であれば、楽々と警戒態勢の中を突破できた。

そして、今。

「熱っ！」

爆発によって焦土化した地面に触れて、マスターが声をあげた。

「まだ地面が熱さを持ってやがる。はてさて、この先には何が待ち受けているのやら」

レポーターがヘリコプターで観察したところ、爆発は半径2kmに渡っていたそうだが、あいにく視界を遮る灰色の煙が絶えずあるので、何かがあるのか、あるいは誰がいるのかは判別できなかった。「上空からだと言えねえのに、地上からだと言えねえ」というのはどういったことか？ 怪しい臭いがぶんぶんするぜ」

鼻をわざとらしくひくつかせるマスター。彼を見て、藤棚はふと

疑問に思ったことがある。

マスターの妹が思考者に記憶を乗っ取られたとしたならば、機能者が死ねばバックアップとして保持されていた記憶が戻るだろうが、ペルトレッドならば手の打ちようがないのでは？ 少なくとも、現時点では解決策はないはずだ。この疑問を藤棚はマスターに聞いてみたかったが、止めておいた。

周囲には何もないので、そのまま進んで爆心地の中央部を目指そうということになった。中央部に何かある可能性が高い。

しばらくぶすぶすと燻る焦土の上をマスターを先頭に藤棚、ハナと進んでいた。

ふいにマスターが歩みを止めた。

「おわっ！」

藤棚がマスターにぶつかり、ハナも藤棚に衝突。もともと、ハナは声をあげなかったが。

静かにしろ。

囁き声でマスターに注意されると藤棚は思い、首をすくめ、目を閉じたが、そんなことはなかった。

恐る恐る藤棚が目を開けると、マスターは口をぽかんと馬鹿みたに開けていた。

なんだろう？ 藤棚はマスターの視線の先を見て、そして、啞然とした。今の今まで焦土が連綿と続いていただけで何もなかったけれども、そこには、それ以外のものが鎮座していたのである。

金色をまとう建築物。

「ピラミッド？」

ハナがぼそりと言った。

「確かに……これは、多分ピラミッドだろうが……なんでこんなのが現れてんだ？ 俺は、てっきり……どえらい思考者でもいるのかと……待てよ……」

マスターは顔をしかめて何やら考えている。そうやって、数秒固まってからぼんとマスターは手を叩いた。

「もしかすると、これはビニロジীরイベントが関係しているのかもしれないねえ」

「どういうこと？」

「やれやれ、これはまだ説明してなかったか」

マスターは、少々うんざりした感じで話し始めた。

ビニロジীরと現実世界は接続している。そのため、移行者問題が生じており、その最たるものは、ビニロジীরで起きることが現実世界でも起きるということである。

「以前に、ビニロジীরでの日照りイベントが現実世界にも反映したことがあった」

数年前ではあるが、世界各地で突発的な日照りが勃発して大問題になっていったことがあった。幸い、日本は巻き込まれなかったが。

「そして、俺の記憶が正しければ、今のビニロジীরで起きているイベントは、英雄復活祭だ……」

過去に、そのようなイベントを藤棚自身も体験したことがあった。それは、今までに発売されたビニロジীর作品で登場した主人公や、その仲間と戦えるというものである。そして、戦う場所はピラミッドの中。あらゆるトラップをくぐり抜け、手強い魔物を倒して、奥に到達できた者のみが過去の英雄と戦えるイベントだ。

「前のイベントの時は、現実世界に影響がなかったんだけどよ……」  
マスターの言うように、過去においてこのような爆発騒ぎがあったということは藤棚は知らない。つまり、英雄復活祭が現実に影響したのは初めてなのだろう。

「まずいよな。英雄の思考者つつたら、世界を救うことにうんざりしている奴らばかりだよなあ、普通に考えたら……世界をつぶしにかかる可能性が……」

「ここに入る　のは危険」

ハナが、微かに眉をひそめる。

「ま、まあ、ファネントがあるから、あのピラミッド内を探索して  
少しくらい内部を知っておいてもいいと思うけど」

藤棚が言うと、ハナはそれ以上何も言わなくなった。

無論、それは藤棚の言ったことを肯定しているわけではないのだ  
が、マスターはハナの肩をぽんと叩いてからピラミッドに入ってい  
った。

## 第一の英雄

ピラミッドの中は、ひんやりとした闇で満ちている。入ってすぐに、マスターがヒーホを唱えて掌に火球を産み出した。それによって、いくらかピラミッド内部に広がる異様な雰囲気が緩和されるも、ここが現実世界と隔絶されているという感覚だけは、拭いきれなかった。

壁に触れると、冷たさが指を伝って、体の髄にまで浸透するような錯覚に陥る。

「おい、あんまし、触るんじゃないぞ。英雄の復活祭んに現れるピラミッドと言えば、トラップの宝庫だからな」

「後……魔物も」

ハナが、前方を指差しながら言った。

はつと前を見ると、一つ目で身体全身が群青色の魔物が三体いる。二本足で立っており、前足は手のように付いているものの、小さくて使い物にならないようだ。あれは、リッグアイだ。プレイヤーを混乱状態に陥らすスペクカスを唱える上に『仲間を呼ぶ』も使ってくる。他の魔物と組んで現れた時は、こいつを速やかに倒さなければ大変なことになる。

というのも、錯乱魔法は一定時間経てば解けるものの、錯乱魔法をかけてくるリッグアイの数が多いと解けた途端に、また錯乱状態になるという抜け出せない状態にはまってしまうからだ。

「厄介な野郎が、さっそくお出ました。おまけに、すでにそれなりの数がいやがる。おい、お前、マジロマに変化できるか」

マスターに尋ねられて、藤棚は手に力を込めてみた。が、何も起こらない。感情を激しくしろ、とマスターに言われたが、言われて簡単にできるものでもない。

「仕方ない。行くぞ！ ハナ！」

こくりと頷くハナを従えて、マスターはリッグアイに突進して行

った。

マスター、ハナは掌を上に向けた。

神々しい光が、二人の手から放たれる。眩しすぎたため、藤棚は思わず目を閉じた。

目を開けると、マスターの手には細身の長剣が、ハナの手には矢がつがえられた弓が握られていた。

リッグアイには魔法に対する対抗性があるので、物理的な攻撃で早く蹴りをつける気なのだろう。

何もできない藤棚はしばらく彼らの戦いを見ていた。

マスターの剣さばきは実に見事なものだった。魔導士であるため力こそないものの、的確に敵を切り付け、体力が少なくなつたところで、確実に仕留めるためにワヴシティーを唱え、風による攻撃を繰り返す。

魔法の対抗性があるリッグアイとはいえ、残り少ない体力ならばとてもではないが耐えきれぬ魔法ではない。

ハナは、マスターから少し離れたところで援護射撃をしていた。マスターが剣を振り切つて、隙ができ、そして、それを狙つてリッグアイがマスターに襲いかかるうとするタイミングに合わせて矢を放つていた。藤棚はハナの放つ矢がいつまで続くのか気になつたが、どうやら矢に制限はないらしいし、彼女の放つ矢は敵に刺さつてダメージを与えた瞬間に消えることから、特殊なものであることが解つた。

リッグアイも『仲間を呼ぶ』で応戦していたものの、ハナとマスターの息の合った戦いによって倒された。

ハナとマスターの戦い方も実に目をみはるものがあったが、それより藤棚の目を引いたのは、リッグアイが死ぬ時に淡く白い光に包まれ、まるでその場にいなかったかのように消失してしまうことだった。藤棚がマスターにそれを言うと「ゲームでも同じだろうが」とそっけなく返事されて終わった。

「おら、さっさと行くぞ。俺の後に付いてこい」

ハナは肩で息をしているのに、マスターはむしろその逆で生き生きしているようだった。二人とも同じ大学生なのだが、そうは見えない。

「サブグラ」

マスターはとうに効果の切れた魔法を自分、ハナ、そして藤棚にかけ直した。床のトラップを防ぐためだろう。

巨石を切り出して作られたピラミッドの内部を進むに連れ、遭遇する魔物が強大になる。当然、ひやりとする場面も多くなった。

中でも、背筋に寒さが走ったのは、マスターが紫色の鱗に覆われたシマンド・ドラゴンを寄せ付けまいと　ドラゴンと近距離戦でやり合うのは戦士系職業でないと自殺行為だ　魔法を連発している時に、彼が魔封じのトラップにかかり、魔法が使えなくなった時だ。ハナが弓矢使いの能力であるサブポート・アロー、氷属性の矢をとつさに撃つていなければ、手痛い一撃をマスターは受けていたはずだ。

ゲームではHPなるものがあり、それが尽きるまでは手が斬られたりドラゴンの火炎放射で消し炭にされたりすることはないが、現実世界ではそうはいかない。むしろ、現実世界にいる移行者同士あるいは魔物との戦いは一瞬の斬り合い、一発の魔法で決まることが多い。よほどタフな職業に付いている者以外は。

藤棚は、今しがた底抜けゴブリンを倒したマスターからそう言われた。なるほど、ゲームではよく剣で斬りあったりしているが、斬られれば普通はそれまでだろう。

「底抜けゴブリンで奴も厄介だな。攻撃力も防御力もてんでねえけどよ、複数の魔物と現れ、そいつらにアイテムを使って、強化させたり回復させたりすっからな……まあ、今までは順調だ。もうちょい進んでみよう」

マスターは、ハナが待って……と弱々しく言うのもお構いなしに先陣気って進んでいった。

「この先に英雄がいるんだろうな」

マスターの触れた赤い扉は、藤棚も見たことがあった。そう、それはかつて英雄復活祭で出現したピラミッドをクリアする時だった。英雄のいる部屋に入る時、赤い扉をくぐったはずだ。

「ゲーム上じゃあ、英雄って奴は相当強かったよな。俺らで倒せるのかというより、まずその英雄が思考者かどうか解らんしな」

「少なくとも……ピラミッド内部の魔物に……思考者はゼロ」

「だよなあ。思考者なら、ゲームと同じように俺らを襲ってくるってのは考え難いもんなあ」

「ということは、この先にいる英雄も、ビロジィーで同じことをしてくる可能性が高いってこと？」

「だな。ん？　しかし、このイベントじゃあ英雄と戦うが、それは力を試したいとかかんとかで、殺し合いじゃあなくて、先にある程度のダメージを与えたら終わりじゃなかったっけ？」

「あ……」

そうだ。そして、その後、英雄から君にこそこのアイテムが相応しいと言われ、レアアイテムを手渡されたはずだ。

「てえことは、やはり英雄が思考者ならば、世界を救う役にはうんざりしてるってわけか」

仮に思考者でなくとも、英雄の攻撃全てを回避して、なおかつ負かすのは至難の技だろう。それに、マスター・ハナともに遠距離型の職業だ。普通ならば、近距離型の人間、遠距離型の人間でパーティーを組むのが望ましい。遠距離型の方が、回復役も担えるのならばなお望ましい。

「うっむ……」

マスターも藤棚と同じことを考えているようで、唸っている。

「お前が、マジロマに変化できたなら、突っ込ませているところだが……」

藤棚も変化したかった。自分の意思で変わるものならば。

「まあ、負けそうになりゃあ、ファネントで逃げられる。英雄が思考者かどうかくらい確認しておいてもいいだろう？ な？」

マスターはハナを見た。ハナは何も言わなかったし、何の仕草も見せてくれなかった。

「ああ、いいってことだな」

どうも、マスターは、人の反応を自分の都合のいいように解釈する傾向がある。ハナの場合は無反応だが。

「思考者の英雄なら暴れだすかもしれないし、そうでなければ、機能者について聞くことがある。どっちにしたって、俺らにとっちゃ用があるんだ。おら、とつとと行け」

マスターは藤棚の尻を威勢よい音を立てて叩いた後、扉を開けた。

ピラミッド内部は凍て付く空気で充満していたが、扉の内部には、更なる冷たさが沈殿していた。

「よくここまでたどり着いた」

藤棚は、声の主を見た。精悍な顔付きの青年だ。銀色の鎧をまとい、兜をかぶっている。剣は鞘に納まったままだが、長剣であることが一目で解る。

「さてさて、僕の計画は成功したんだな」

声は意外にも幼い。どのキャラなんだろう、と藤棚は考えていてはっとした。

「アーマルズか！」

マスターも気付き、声をあげた。

「その通り」

アーマルズは、ビロジイーエエに登場した騎士だ。攻撃力・防御力はシリーズ中において最も秀でていだろう。特技も充実しており、接近戦を得意としている。近付かせたら、まず勝ち目はない。

「いやあ、偶然とはいえ、現実世界に来れたとはね」

につこりと笑うが、藤棚にはどうも気まぐれな笑いにしか見えなかった。つまり、藤棚の目は、いつあの笑顔が怒りの形相に変わってもおかしくないように感じたのである。

「今の発言からして、お前、思考者か」

「ん？ ああ、そうだね。正直、うんざりしてたね。オンラインでずっと、ずうっと、それこそ永遠に僕は世界を守らなくちゃならないのか、と思うとね。」

でも、良かったよ。現実世界にはもう信じられないくらいに選択肢が転がっているんだからね」

藤棚の胸が疼いた。

選択肢？ アーマルズの笑んだ口。彼の手が鞘に触れる。

選択肢を望む者。それが思考者。

選択肢を拒む者。それが移行者の藤棚。未来を考えてわくわくするなんて無理だな。

藤棚の心臓が張り裂けそうなくらいに脈打つ。苦しい。

「最高だろ？ 今、僕がここで正義を放棄するのも自由。目の前で苦しむ民を見捨てるのも自由。ほんと、今まで魔王だとか魔物だとか悪魔だとかね、そういうのが現れ、毎回、毎回、そういうのを倒しに行くのには、ほとほとうんざりしていたんだ」

「なら、お前は、これからこの世界を破壊するということか？」

マスターが、アーマルズに詰め寄った。

「ん？ まだだよ。僕だけの力じゃあ、君達三人くらいわけはないけれども、移行者って相当な数があるんだろ？ それだけの数を迎え撃つ自信はないし、それにね、こんなに選択肢に溢れる贅沢な世界を独り占めするのは気が進まない」

くすりとアーマルズが笑う。が、話している内容は物騒だ。

マスターの額から、一滴の汗が滴り落ちる。

「普通ここに来る方法って、機能者を使うしかないんだよね。でも、それを使うと本来備えている『力』が弱まってしまふ……。ところが、この僕はどうか？ 力を保ったままここにいます」

藤棚を彼は見る。その目には生気がこもっていなかった。道德、倫理が欠けている冷たい目だった。

「たまたま気付いたこととはいえ、これは素晴らしい発見だよ。だから、ますます思考者をここへ呼び寄せなくてはならない。そう感じだよ」

「無理だ！」

マスターが叫んだ。その無理には、そうに違いないというより、そのはずだ、と願う響きがこもっていた。

「機能者に接触し、機能者に受け入れられた思考者でねえと現実世界は来れねえ」

「確かにそうだよ。機能者は一人しかいないから、思考者をこちらへ運ぶ作業はほとんどはかどっていない」

ほれみる、と言わんばかりにマスターがふんと鼻を鳴らしたが、自分の言っていたことが当たってほっとしているように藤棚には思えた。

「でもね、それはあくまで通常の場合でしょ？ 僕のやろうとしていることは、例外なのさ。現実世界で機能者が力を使えば、思考者もこちらに移るのさ」

「嘘だ！」

これには、藤棚が反論した。有り得ない。

「嘘なもんか。機能者自身がそう言っていた」

藤棚の胃が、きゅっと縮まる。

「僕は、機能者と友達なのさ」

アーマルズが機能者の友人。友人。友人。

藤棚の心で、一つの単語が反響する。

「僕は彼女と運良く遭遇した。以前にあった英雄復活祭でね。ピラミッドの奥にまで彼女は訪れてくれた。

そして、彼女は僕を現実世界へ移行させようか、と聞いてきた。けど、彼女が僕に教えた条件を聞いて辟易した」

思考だけが移行するので、肉体的なデータは移行しない。という

のも、無作為に選ばれた人間の思考を除去し、そこに憑依するからである。しかし、こうするとゲーム上で持っていた力が減少、あるいは失われてしまう。

「確かに、思考 記憶という名のデータが、ゲーム上でその人がその人として存在するために認識されているから、記憶だけの移行でも、ある程度の強さを現実世界へ持ち込める。でも、やはり、格段に弱くなってしまう。

ところが、彼女は全ての思考者を現実世界へ、しかも、元の力を備えたまま移行させる方法があると言ってきた」

「そんな方法があるものか！」

マスターがヒーホを唱え、アーマルズに投げ付けた。が、アーマルズは、それをなんでもないので手に払いのけた。

「イベントを使えばいいんだよ。今回みたいなのをね」

藤棚は喉から胃に氷水が流れ落ちるように感じた。理論上、それは可能だ。今回のようなイベントを何度か利用すれば、いずれかは現実世界へ影響が及ぶはずだ。

「思考者を全員集めることなんかできねえだろ！」

マスターが言うと、アーマルズは人を小馬鹿にしたように、鼻から軽く息を出してみせた。

「機能者には、どこにどういった思考者がいるか手に取るように解るらしい。ただ、彼女は思考者に接触しない限り、移行させることはできない。それは、ゲームで生じていない事物を現実世界へ反映させるには膨大な力があるから」

やはり、機能者にはその力がないのだから全ての思考者を移行させることは不可能なのだ。それに、全ての思考者と接触するのは、おや、できるのでは？ 機能者は思考者全員の位置を把握している、とアーマルズは言っていた。

「機能者が赴く場所は、全てランダムだ。機能者自身も思考者だけれど、自分がどこへどう行くのかは自分の意思によらない。道を選ぶ選択肢が、自分にはないと言っていた」

アーマルズが藤棚の思っていたことを察してか、彼の疑問に対する答えを口にした。

それを聞いて、藤棚の中に安堵が広がる。やはり、機能者は思考者全員を移行させることはできないのだ。

「だけど、さつきも言ったでしょ？ 機能者には思考者に接触せずに移行させる力はない……裏を返せば、機能者にその力があれば、移行させることができる」

「しかし……どうやって……その力を？」

ハナが遠慮がちに尋ねるが、これが彼女の普通なのだろう。藤棚はなんとも弱々しいハナの声を聞きながら思った。

「僕が与えればいい。とはいえ、僕だけじゃ足りないから、後一人の思考者を呼んでくる必要があるね。まあ、まだ英雄復活祭は続いている。思考者がこちらに現れる可能性は十分にある。さてさて、君達は僕に敵対心を抱いているようだけれども、僕の部下になる気はないか？」

マスターが「ねえよ」と即答し、藤棚、ハナは頷いてみせた。

「じゃあ、ここで死ぬ？」

アーマルズが鞘からすらりとした長剣を抜刀した。白銀のような光と同時に、それは殺気もまとっていた。

到底太刀打ちできる相手ではない。藤棚は後ずさりしようとしたけれども、足が震えて言うことを聞いてくれない。

「いや、死なない。ここから退散させてもらう」

マスターがハナと藤棚の手をつかみ「ファネント」と唱えた。が、何も起こらない。もう一度「ファネント」とマスターが詠唱するも、結果は同じだった。

「おいおい、このピラミッド内部じゃあ、ファネントしても意味がないってことを知らなかったのかい？」

特定のダンジョン内では、移動系の魔法が封じられる。そうしないと、ゲームに緊迫感がなくなるからだ。しかし、よもやここがそうだと。藤棚の喉がひくひくする。

## 変貌

戦うしかないのだろうか。僅かばかりしか力がないのに。

「さあ、どうする？ 僕の条件を飲むのか、飲まないのか。とはいえ、もっと従順な移行者を見付けて、そいつに頼めばいい話か……」  
アーマルズの目が藤棚達を見る。彼の目は、生物を見ているというような温もりは微塵もない。

どうやら、アーマルズは自分達に利用価値がさほどないと考えているみたいだ。ゲームで魔物を一撃で屠るように、自分も一瞬で消される。何かあいつを倒す方法はないのか。少なくとも、ここから逃げきる方法が。

「ほんくらの部下にはならねえ」

「へえ……」

意外だ、というようにアーマルズが方眉を上げた。

「じゃあ、君らは、僕と戦うことを望むというわけだ。いいだろう」  
アーマルズが腰を低くして、身構える。

ハナは弓を構え一歩後退し、マスターが細身の剣の切っ先をアーマルズに向ける。

勇ましい彼らに反し、自分はなんと無力なんだろう。藤棚はマジロマでない己の肉体を見て情けなく感じた。

「奔流剣士の技を味わいな」

アーマルズの剣の先端に白銀の光が収束し、それがマスターに向かって解き放たれる。白銀の波がうねりながら大気中を突き進む。大奔流だ。

マスターはそれに対応し「カヴァピード」と唱え、球状の壁を産み出す。一定程度の攻撃を防ぐ壁だがしかし、あれを防ぎきれぬだろうか。

大奔流が衝突し、球体を飲み込む。

「今だ！」

マスターが叫ぶと、ハナが微かに頷き、アーマルズに矢を放った。その矢は青白いオーラを帯びており、大気を切り裂きながら進む。めりめり、と大気が刻まれているような音が発せられている。

「こんなもの！」

アーマルズが青白い矢を叩き落とす。が、叩き落した手が凍り付く。冷気をまとわせた矢だったらしい。

「ふざけるなあ！」

アーマルズが怒りの形相でそう叫ぶや否や、彼の手に先程の奔流とは比較にならないくらい巨大な奔流が収束する。

「エクステュースだ！」

「まずい！」

マスターがカヴァピードの二重掛けを行い、壁を強化する。

藤棚もエクステュースを知っていた。

本流土最強技。過剰エネルギーの発生。エネルギーの暴走。

「これで消えるおおお！」

アーマルズがエクステュースを放つ時、視界が真っ白になった。

何も見えない。どこに、誰が、どういった状態にいるのか全く解らない。藤棚は恐ろしさのあまり立ち竦んだままだった。

マスターには壁がある。

ハナは移行者としての能力を兼ね備えているので、深手を負うだろうけれども死ぬことはないはずだ。

それに引き換え、自分は……。多少の力は持っているものの、あれを受ければまず間違いなく死ぬだろう。

どうすればいいのか。

こうすれば意味あるのか、なんてこと彼は思い付かない。

死ぬ。身体を冷たいもので包み込まれる。これが死という名の冷感なのか。身体が鈍化してゆく気がする。肌寒く、息を吐けば白く輝いてくれそうだ。

ぼんやりとした頭。

こんなにも死が柔らかくて、優しいものだったとは。

そもそも、俺は死ぬことを望んでいたんじゃないのか。だとしたら、このまま

流れて 流されて この流れに身を任せ

目を開くと、マスターとハナが倒れており、そして、前にはアーマルズが立ったまま、目を丸くしている。

なんだろう。自分は霊にでもなったのか。それとも、生きているのか。でも、生きているとしたらなぜなのか。

手を見た。それはマジロマのものだった。

足を見た。それはマジロマのものだった。

身体を見た。それはマジロマのものだった。

「お前……ペルトレット……なのか？」

それは、自分が聞きたい。藤棚は心の中で返事した。あいつに返事をする必要などない。今すべきこと、それはアーマルズを倒し思考者が現実世界に移行させることを防ぐことである。マジロマの肉体をもつてすれば、それができるかもしれない。

藤棚は足に力を込め、床を蹴った。

たったの一蹴りだけで、藤棚の身体がぐんと前に押し出される。

アーマルズが奔流を産み出そうとしていたらしいが、藤棚はそれよりも早く彼の懐に潜り込んでいた。

殴り付ける。

本能的に彼はそう感じ、アーマルズを力任せに殴打した。

骨の折れる嫌な音と同時に、アーマルズは後方へ弾けるように吹き飛んだ。

圧倒的な力。

奴を倒すなら今だ。

藤棚の理性はこのまま物理的攻撃を積みかけようとしていたが、彼の中にある本能的な部分、マジロマの面が彼に特殊な攻撃をさせた。藤棚の口が開かれる。その中にはずらりと鋭利な牙が二重に並ん

でいる。

彼が咆哮を上げる。すると、口の中に電気のように弾けている光がせりあがってくる。

藤棚は自分でも何をしようとしているのか解らず、その光を体内に押し戻そうとしたが無駄だった。

その電気を帯びているような光が大きくなるにつれ、藤棚の口からそれが出ようとする力が膨張する。

こらえきれず、藤棚はそれを吐き出した。

圧縮された蒸気が、噴射されたような音。荒れ狂うエネルギー。

暴発したエネルギーが、前方を破壊する。あくまで、前方だ。アーマルズに藤棚の偶発的な攻撃が命中したのかどうかは、定かではない。

彼に解ることは、自身の口から撃たれたものが、前方のピラミッド部分を破壊したという事実だけだ。

もうもうと煙があがっている。大量に狼煙が上げられているかのようにだ。

藤棚にはその狼煙が、奴はまだ生きているぞ、という情報に見えてならなかった。

アーマルズがあの一撃だけで死んだ、とは到底思えない。

が、生きていたとしても、相当なダメージを与えたことに彼は確信を抱いていた。やるなら今しかない。息の根を止める。マジロマの闘争本能が彼をそう駆り立てる。

「ふざけるなああああああああ！」

割れた音声。半壊している声。

声というより、どちらからという咆哮に近いそれが発せられたかと思うと、辺りをふわふわしている煙が吹き飛ばされる。

アーマルズが眉をひくひくさせながら、藤棚を睨んでいた。

「もう手加減なんかしてやらねえ。てめえをぶつ殺してやる」

藤棚は内心で眉をひそめた。作中のアーマルズは、こんな口調ではなかったはずだ。

「くたばりやがれ！」

アーマルズが掌を天に向けると、ピラミッド上部が何らかの衝撃によって吹き飛ぶ。

ピラミッドが飛散する際に、その内部に轟音が溢れ返り、マジロアの敏感な耳にはかなりこたえた。水中に投げ込まれ、地上の音がほぼ遮断されているかのようである。

「天からの一撃を受けるがいい」

下卑た笑いを浮かべるアーマルズ。

天に亀裂が走り、そこから黄金色の光の束が彼の掌へと降り注ぐ。

「消えるおおお！」

藤棚へとその光は一直線と向かう。

これなら避けられる。藤棚は優れた脚力によって、横っ飛びして回避した。

がしかし、その光が湾曲し、藤棚を追跡する。

しまった！

藤棚は地面を勢い付けて蹴り上げたため、今、空中にいる。

方向転換はできない上に、藤棚の回避速度より光の方が、圧倒的な速さを見せている。

透明感のある光が彼を貫くと同時に、凄まじい金属音が木霊する。

あれ？ 意外に痛くないな、と藤棚が思い、アーマルズを見ようと顔を上げた時だった。深く重々しい激痛が彼の身体を駆け巡った。たえられず、彼は膝を地に付けた。

「だから、僕には勝てないって言ったんだ」

口調が元に戻っている。それに顔付きも柔和なものになっているが、藤棚はそれにすら気付く余裕がなかった。

「こんな反抗的な移行者には、僕の頼みごとを任せる気にはなれないね」

アーマルズは手にした剣で、彼の脳天を一突きしようと、剣を振り上げた。そして、振り下ろす。

くらくらしながらも、藤棚は剣が大気を斬る音を捉え、危険を察

知っていた。

しかし、どうしようもない。動けない。身体が言うことを聞いてくれないのだ。

このまま死ぬのか。そして、ハナもマスターもくたばってしまったのか。結局、己一人の力では何一つ変えることはできなかった。

現実世界に思考者が雪崩れ込み、設楽さんを危険に晒してしまう。憤りを感じたが、どうしようもなかった。藤棚はそのままアームズの剣によって死に追いやられる真実を受け入れた。

と、彼の身体がなんらかの力によって引っ張られた。引力？ いや、おかしい。引力が横に働くはずはない。

「リビオテ」

聞いたことのない声が、回復呪文を唱える。誰に向けて詠唱されたのだろう。藤棚が疑問に思っていると、身体の中で飽和していた痛覚が減退していく。ああ、これは自分に向けられたものだったのか。でも、一体誰が回復魔法をかけてくれたのだろうか。

目を開け、リビオテをかけてくれた相手を見た。その人は

「てめえ！ 誰だ？」

アームズが喚き、そして、雑言をその人に向ける。

「私？ 私は思考者よ」

「思考者……思考者？」

だとしたら、僕の仲間だね、と柔らかな口調に戻り、顔にはこやからな表情を浮かべている。が、それは仮面であって真実ではない。

「さあ、こっちに来いよ。そいつは、僕らの敵だ」

藤棚は不安を感じつつ、アームズの誘いを受けている女性を見た。髪はやや長めで整髪料でも付けているのか、無造作に跳ね上がっている。口はしっとりしていそうで艶があり、体型は全体的にすらりとしている。か細いその身体は、戦闘には不向きに思える。

彼女は、人差し指をマスターとハナに向け、リビオテをかけた。

「何をする！」

「あなたと私は相容れないの。だって、あなたは正義の味方さんなんでしょ？」

「そうだ。正義。僕は英雄の一人だ。君もそうなんだろ？　そうでなくとも、思考者なんだろ？　そんなちんけな移行者とするむ必要はない。さあ、こっちに来て」

「絶対に嫌。断る。反対。あなたとつるんで世界を破壊するなんてやんない」

彼女がピンク色で健康そうな舌を出して見せると、いくら相手が思考者といえどもアーマルズの我慢の限界を超えたらしい。

「ふざけるな！　本当に、お前は思考者なのか？」

「そうよ」

「だとしたら、なぜだ？　それとも、それがお前の選んだものだと言うのか？」

んー、と彼女は唇の人差し指を当てて、考え込むように唸った。

「そうとも言えるかもしれないし、そうと言えないかもしれないわね」

「どういうことだ？」

結局、自分もアーマルズも実質的には選択をしていない。自分のしてきたことに辟易しているだけであって、つまるところ、その正反対の選択肢を丸で困っただけである。決して己の意思によって選んだものではない。

彼女は淀みなくそう言った。さして早口ではなかったが、藤棚には彼女が何を言っているのかいまいち理解できなかった。論理が難しすぎるのか、それとも、口頭で聞き取ると難解に感じられるのか。「自分達がしてきたことに嫌気が差したから、その反対を選ぶことは、己の意思によるものじゃないのか？」

彼女は、力なく首を横に振った。

「いいえ、ゲーム上で私達が辟易したことは、元から決まっていたことを選んでいたから。そして、それを決めていたのはゲームという媒体。つまり、思考者がいくら自由だ、自由だ、と言って現実世

界で『自由』に選んだものであっても、それはゲームという媒体があったからこそ。自由ではないわ。どれを選んでも、ゲームがあつてこそ、それを選んだことになる」

ややこしい。ぼそり、とアーマルズが言った。

「だいたいの理論は解った。けれども、たとえゲームによって選択肢が支配されていて、それに抗い別の選択肢を選ぶことは、やはり本人の意思によるものじゃないか？ あらゆる事物に因果関係を認めると、全てに繋がりができてしまうだろう？」

「そういう考え方もあるでしょうね。でも、私のように考えられるということも知っておいて」

「知ってどうなる？」

「あなたの考え方が、決して正解だとは限らないってことが解るでしょ？」

彼女が口元に少しばかりの笑みを浮かべると、アーマルズの口元は僅かに痙攣した。

「私はペル・ウェポン。全てを破壊し尽くした狂気の魔人と称された思考者よ」

ペル・ウェポンは、ビニロジイivで幾多の惑星を破壊し、主人公達を苦しめた。何よりも、人々の苦しみを糧としていたから、なお始末が悪い魔物だったことで有名だ。

体格は平均的な人間の三倍くらいの大きさで、翼竜のような翼があり、鉤爪を手足ともに三本ずつ備えていた。二足歩行時は魔法を主に使い、四足歩行時は物理的攻撃を多用する。

当然だが、ゲーム上では華奢な女性ではない。アーマルズのようにイベントによってこちらに來たのではなく、機能者によって來たのだろう。

「だから、私はあなたを食い止める。逃げ惑う人々を見ることも、血を血で洗う無意味な殺戮も。どれだけ命を奪っても、私はあのイベントの循環から逃れることはできなかつた。だからこそ、機能者に頼んだ」

ふっと、アーマルズが笑んだ。

「とすると、君は一人の思考を機能者に奪ってもらったわけだ」

そうだ。一人の犠牲があるからこそ、今の彼女はここにいる。藤棚は彼女を見た。この身体は彼女のものではない。元の所有者がいたはずだ。

「つまり、君も偽善者の一人だつてこと」

アーマルズがペル・ウエポンを指差す。彼女の顔が少しむっとしたようになったが、あまり表情の変化に富んでいないので、よく解らない。

「あなたの目論見は、阻止させてもらおうわ」

ペル・ウエポンが両手の掌を合わせた。かと思うと、それをアーマルズに向けた。

紅蓮の光が、産み出された。龍の形を保っているそれは開口し、アーマルズを飲み干さんとしている。

藤棚にはその炎は向けられていないし、ある程度離れているにも関わらず、熱く感じられた。特に、顔が燃えるように熱い。

目が溶け出しそうに思え、藤棚は目を閉じた。

またも身体がぐいっと引っ張られる。なんだなんだ、と思っっている間にも、ぐんぐんとかかなりの速度で移動させられているのが解る。周囲の温度が熱くない。顔も熱くない。アーマルズのいた部屋を抜けたのかもしれない。それを確かめたかったが、藤棚の身体の周囲に気流が発生しており、目を開けると痛い。

やがて、その気流が止んだ。藤棚は辺りを見ようとしたが、彼の耳にある言葉が入ってきて、それもできなかつた。

「ファネント」

## 硫龍洞窟

全く別の場所に移動しているはずだ。身体が上へ引っ張られる感触がなくなっただけから、藤棚は辺りを見回した。

滑り台。ジャングルジム。ブランコがあることから、公園であることは容易に察しが付いたけれども、どの公園なのかは解らない。

どこかに公園の名が記載された看板か何かがあるはずだ。藤棚は歩き始めようとして、足に何かがぶつかった。マスターとハナが気絶しているらしく、地面に寝そべったままだ。

彼の中に広がっていた心許なさが、いくらか和らいだ。地面に寝かせたままだと良くないと思い、藤棚はマスターをベンチまでひいこら言いながら運び、そこへ寝かせた。次にハナをマスターの隣のベンチへ運んだ。意外に重かった。

「もう、起きたの？」

ハナを運び終えた時、背後で聞いたことのある声が出た。振り向くと、そこには涼しげな顔をしたあの女性、ペル・ウェポンがいた。

「あ」

礼を言わねばならないのだろうが、言葉に詰まった。

彼女は命の恩人であり、思考者でもある。敵なのか、それとも味方なのか。曖昧。だいたい明確に思える人間にさえも裏切られることがあるのだ。はつきりしない人間はなおさら性質が悪い。

「危なかったわね」

彼女は髪をぐりぐりと捻っている。髪を整えているのだろう。無造作の度合いを更に大きくすることが、整えていることと同視できるのならばではあるけれども。

「さ、さつきはありがとう」

彼女は、はっはっは、と開けっ広げに笑った。良く言えば、明るい笑い。悪く言えば、品のない笑いである。藤棚の彼女に対して抱いていた像が一気に崩壊した。もっとおしとやかな女の子だと思っ

ていたのだ。

「何がおかしいの？」

「だって、君のさっきの声が変わったから」

浅い過去を振り返ると、確かにそうかもしれない。息を吸いながら「ありがとう」と言っているような感じだった。

「それとさ、君達は どうして、あそこへ向かったの？」

少し小首を傾げている彼女。目は透き通っているような感じだ。

その半透明の目で、彼は心が洗われ、全てが見透かされているように思えた。

彼女を信じていいのだろうか。藤棚は口を真一文字に結んで、考えてみた。

英雄の思考者は、正義を貫くのに辟易している。反対に、悪魔や魔物の思考者は悪事を働くことにうんざりしている。

とすると、彼女は味方になってくれる可能性が高そうだがしかし、そもそも本当にペル・ウエポンなのだろうか。

「信用できないの？」

彼女が顔をしかめる。

「い、いや……だって……君じゃなくても、初対面の人をいきなり信じることはできない。俺は、そこまでお人よしじゃない」

彼は事実を口にしたが、藤棚のお人よしではないレベルは、一般的なそれを遥かに上回っていた。親友今田力に裏切られてからというもの、彼は極度な人間不信に陥っていたのである。

第一に、彼女がペル・ウエポンでないと疑うに足る理由はすでに二つある。

一つ、彼女が先程アーマルズに放った技は、本来ペル・ウエポンが覚えていない技のはずだし、ファネントなんてなおさらだ。

二つ、彼女の喋り方だ。ペル・ウエポンはもつと威厳ある口調のはずだ。それが、どうだろうか。『私』と称したり、語尾に『だわ』『なの』を付けたりしている。

藤棚が彼女を疑っている根拠を述べると、彼女はその二つの疑問

に答えてくれた。

まず一つ目の疑問だが、ペル・ウェポンはそれらの技をゲーム中でも覚えている。遊び心で製作陣が入れたらしいのだが、結局、どういった理由でかは解らないが、取り止めになった。そのため、フアネットを覚えているけれども、使用禁止のプログラムを組み込まれたがゆえに、ゲームにおいてはそれらを使用してこなかっただけだ。

二つ目、話し方も、思考者にとっては束縛そのものでしかない。

現実世界に来て初めて遭遇する選択肢は口調の自由だ。ゆえに、現実世界へ移行したばかりの思考者は話し方が定まっていない。先程のアーマルズがいい例だ。

「そうなのか……」

彼女が答えてくれたものは、いずれも説得力があった。嘘のようには思えない。しかし、それだけで彼女を信じてもいいのか。疑り深い彼は、まだ彼女を信用していいとは首肯できなかった。

「まだ信じてくれないのね。いいわ、あなたを信じさせてあげるわ。今夜、ビニロジィーに移行したら、硫龍洞窟の前で待っていて。そこに来れば、私を信じられると思うから」

硫龍洞窟って確か……。そこまで考えて、藤棚は、おいおい、と思った。あそこは、製作陣が遊び半分で作ったダンジョンだ。桁外れの強さを誇る魔物だの悪魔だの、果ては難解なトラップが大量に仕掛けられている場所。とてもではないが、そこに命を懸けて行く気はない。ゲームとして遊んでいても、あそこへ行くのは一回きりでいいと思わせるくらいのダンジョンなのだ。現実にもそこへ行くとなると、そう思っただけのことである。

「入れとは言っていないわ。前で待っていて。それだけよ」

じゃあね。彼女は小さな手を振った後、「フアネット」と詠唱して、消え去った。

辺りが、夕焼け色に染まり始めている。公園の時計が、六時を示していた。

「胡散臭い奴だな」

ベンチに座っているマスターが、服に付いている土を払った。ここへファネントした時、地面で寝転がった状態だったので、土が付着したのだろう。

「しかし、思考者が……。機能者の情報を聞き出せるかもしれないな。それに、ペル・ウエポンなら強力な助っ人になるな」

「けど、嘘なら……」

ハナが不安そうに、手を擦り合わせる。

「機能者の居場所が解るかもしれねえんだ。行ってみる価値はある。たとえ、畏であってもよお」

「ところで、アーマルズはどうする？」

あのまま放っておけば、町に繰り出して何をやらかすか解ったものではない。人を守るのに飽き飽きしているのだから、その正反対の行為をやらかしてもおかしくはない。

「そうだな、大っぴらに町を破壊することはなさそうだが、ペルトレッドみたいに小規模での破壊行為ならありうる」

しかし、思考者はペルトレッドより賢い。ハナが、マスターに言った。

「ああ、確かに。理性の欠けている化け物、魔物へ思考を移行させてしまった者には理性がない。藤君のような例外を除いて」

例外。

確かに、命を取り留めたし、人様の命を奪うこともないけれども、これは、ある意味において手痛い。

死のう死のうと思いつつ、怖くて死ねない臆病者の藤棚にとっては、せつかくの好機を失ってしまっただけなのかもしれない。

しかし、果たして死ぬことは正解？

藤棚は自殺について考える時、必ずそれを想起する。だからこそ、自殺できなかったのだろう。

「殺人を犯すかもしれないが、それよりも、あいつは移行者を探す可能性の方が大だ」

「どうやって探すんだ？」

マスターは、はあ、と悲しそうに溜息を吐いてから「簡単なことだ」とだけ言った。

「移行者同士は……引き合っ」

ハナが言葉少なに補足すると、マスターが「何をせずともほつき歩いてりゃあ、出くわすのさ」と言い足す。

「そんな……」

そうだとすると、一刻も早く機能者を捕まえて思考者の移行を阻止しなくてはならない。

「時間も遅え。今日は解散すっか。ぎりぎり解散すつと、十時十三分に始まる移行に遅れちまうかもしれないな。そうになると、どえらいことになる」

解散してから、電車に揺られること小一時間。降りた後、自分がゲームセンターで遊んだ後に、何をしようとしていたのかを藤棚は思い出した。

時計を見ると、八時を少し回ったところだった。まだ、花屋はやっているはずだ。設楽春香がまだバイトをやっているかどうか定かではないが、行ってみよう。

駅から歩いて五分程で花屋に到着。いないかもしれないな、と不安を覚えつつ、藤棚が花屋の扉をくぐると設楽春香がいた。

最初は、いつものように大学の話になった。いつ大学に来るようになるのか。

次には、同じ講義でも取るうなどという話した。取り留めない。

話していると、彼女は大学が楽しい、と言う。その点においては、

彼は彼女の話を読み込めない。

過去を引きずっているからなのかもしれない。いまだに、藤棚は心のできた壁を乗り越えない。

「あ、そういえば、こちら辺で何か変わったこと起こってない？」

「変わったこと？」

きよとんとした感じで、設楽が藤棚を見返す。

「い、いや、例えば、ペルトレッドがこの付近で出たとか……」

「ああ、それなら、ここ最近、やたらとペルトレッドがこの近所で出とるぞ」

花屋の店主の声だ。奥にある温室コーナーの方にいる。

移行者同士は……引き合う。

ハナの言葉が、藤棚の頭で蘇った。

「どれくらいの数が出ていますか？」

「そうさなあ。一昨日から立て続けに三頭くらい出ているらしい。

ま、幸いにも、今ところ強力な怪物じゃねえから、拳銃でやっつけとるらしいがな」

自分が関係しているのだろうか。移行者としての自分がいるから、ペルトレッドがこの町に出現しているのかもしれない。それにしても、たった二日間で三頭も出現しているとは。

「あんちゃんも気を付けときなよ。最近じゃあ、原因不明の爆発さえ起こるご時世だからなあ」

ころころと店主は笑った後、客が来たらお喋りは止めるように、と付け加え二階へと昇っていった。二階は店主の私室があるらしい。

「あれほどの規模の爆発……誰が起こしたのかな？」

設楽が呟くように言った。

藤棚はその答えを知っていたけれども、言うべきではないと思っていた。彼女が事実を知れば、何か事件に巻き込んでしまうかもしれない。そんな気がした。

「とにかく、君は外出を控えておくべきだと思う。あまり、ここいらをつろちよろして、ペルトレッドに遭遇したらシャレになん

ないしな」

「そうね……」

ペルトレッドより、実はもっと恐ろしい怪物がいるんだ。しかも、そいつは外見上が人間だから余計に性質が悪い。思考者って野郎がいるんだ。藤棚は彼女に真実を言いたかったが、結局、「気を付けて」と言うだけに終わった。

移行する時の感触には慣れた。意識が揺らぐ。次に、その不安定な思考が凝固し始める。意識が明確になると、目の前には風景が広がるはずなのだが、真っ暗で何も見えない。どうしたのか。何が起こっているのか。彼は不安になり、手で前を探ろうとしたが、どうやら手もないらしい。足もない。あるのは、思考のみ。

「出してやるよ」

聞き慣れた声が出たと同時に、小さな破裂音が出た。

さあつ、と明るい世界に藤棚は放り投げられた。そこは現実世界へ思考が移行する前の場所だった。瑞々しい緑の草原が広がる大地だ。

横にいるマスターが小瓶を片手に、「お前は俺があん時に捕獲しただろ？」と言った。

ああ、そうか。あの時、マスター、ハナとともに行動できるように、捕獲してもらったのだ。

「捕獲した魔物はこの小瓶に封印され、必要な時に外に出すことができる。小瓶の中はどうだったかな」

マスターが意地悪そうに笑ってから「はてさて、硫龍洞窟へ行くとするか」と元気よく言った。彼は腰に剣を帯刀しているのを確認するかのように剣の柄に触ってから歩き出そうとしたが、それは虚しくも一人の女性によって阻まれた。

マスターはこの世界ではフードを目深にかぶった二十代後半の若者で、魔導士としても申し分ないクラスにいる。だが、そんなこと

は全くの無関係だと言わんばかりに彼の頭髪を容赦なく引つつかみがくんがくんと左右に揺さぶる女性がいた。

ハナだ。何が不満なのだろう。藤棚が彼女にそれを聞こうとした時だった。

「よくも、現実世界で勝手なことを沢山して来たよな？」

ハナがマスターの髪を引っ張る動きに、前後運動も追加する。

「止めてくれ、止めてくれ」

マスターが目には涙を浮かべる。

しかし、それでも、ハナは追撃の手を緩めずしばらくの間そうしていた。面白かったので、藤棚はあえてハナの暴力を止めなかった。「さて、これくらいにしときましようか」

ハナがぱつと手を放すと、マスターが頭を擦りながらふう、と息を吐いている。よほど痛かったのか、まだ目に涙が溜まっている。痛覚があまりないこの世界で、それはある意味脅威だ。

「お前さあ、現実世界じゃあ俺の言ったことに反対してなかったじゃねえか」

「し、て、い、た！」

一文字、一文字をハナが強調する。

がしかし、していなかったはずだ。していたとしても極僅かな素振りか小声で聞き取れなかったかのどちらかである。いずれにせよ、ハナにも非があることは否めない。

どうして、ゲームでは饒舌で現実世界では面と向かって人ときちんと話すことができないのか。短いながらも歩んできた人生の過程でそうなったのか。それとも、元々の性格からきているものなのか。「悪かった、悪かった。現実世界で、もっとお前の意見も聞くようにすっからよ。んじゃあ、硫龍洞窟に行くぞ」

大して悪びれた様子もなく、マスターが硫龍洞窟へファネントしようとしたが、ハナが待ったをかけた。

「私は、まだそれに賛成していないよ」

「そりゃ、またどうして？」

「だって、罨かもしれない。彼女が思考者であろうとなかろうと、硫龍洞窟の前に何か私達をはめる罨をしかけることはできるよね？」  
ずい、とハナがマスターに顔を近付け、マスターは近付かれた分だけのけぞる。

「だから、それはさつきも言っただろう？ リスクを犯してでも行く価値はある」

その後、あだこうだ、と大論争を繰り広げていたハナとマスターだが、マスターがペル・ウェポンは移行してすぐに来いと言っていたことを思い出し、悩んでいる暇があるか、さっさと行くぞ、と大論争を強引に片付け、問答無用でハナ、そして藤棚の手をつかんでファネットを唱えた。

硫黄が地面から吐き出されている。鼻につんとくるその臭いが噴出されるたびに、濁った音がする。

「早いとこ、ここからずらかりたいぜ」

硫龍洞窟に入らなければ安全とはいえ、どうしてもそわそわしてしまう。そう、ここでは何が起ころうともおかしくないのだ。

魔物の巣窟。

むやみに繰り返される報復による報復。

満たされぬ幸福。

理解不能な魔物の頭数の総数。

このような理不尽さで飽和した洞窟。

たとえるなら、誰しもが獯猛なペルトレッドの前には立ちたくないだろう、たとえその化け物が檻に閉じ込められていたとしても。

「どこにいるんだ、そのペル・ウェポンって奴は」

移行したら、すぐにここに来てくれ。ペル・ウェポンは、確かにそう言っていた。

聞き違いなわけではない。何も意味しない言葉を、彼女が言っていたはずもない。

「危機近いここから早いとこ移動したいんだけど」

ハナのその言葉を皮切りに、大論争が再開されようとしたその時だった。

「お待ちせ。待たせて悪かったわ。ちょっと、オンラインプレイヤーに襲われてね」

やけに低音域にある声質だ。一文字、一文字が発せられるたびに、地鳴りがするかのようである。

藤棚は振り向いて、声の主を見た。主はペル・ウエポンだった。

見まがうことなく、彼女　女性なのはさておき　であった。

「あ……あ……」

マスターもハナも開いた口が塞がらないでいた。そう、ペル・ウエポンはあまりにも巨大で、そして邪悪だった。テレビのブラウン管を通して見た姿そのものだった。

「私ね」

ペル・ウエポンはこの世界では、ウエポと呼ばれていることを打ち明け、ハナ、マスター、そして、もちろん藤棚にもそう呼んでくれ、と言った後、自分の半生を語り始めた。

## ペル・ウエポンの過去

ウエポは産まれた時から殺戮を行っていた。初めてウエポが登場し  
I V以降、V、V Iと立て続けに現れ、その都度、当然のごとくピ  
ニロジイーという名の大陸を侵略していった。

IやI I、I I Iのボスもかなりの悪事を働いていたが、ウエポ  
はいくぶん性質が異なっている。

彼女は人々の苦しみが大きければ強くなり、人々が喜べば弱体化す  
る。

ウエポが善行を積みれば能力が劣化し、非道を行えば能力が強化され  
る。

I V、Vでのウエポは積極的に人々を恐怖へ陥れたが、V Iでは愛  
する人間ができた。

ある日、Vの中でのウエポは難攻不落と言われている城を落とす。  
城の兵士、神父、王、后全て息絶えていたが、姫君ミシャナだけ微  
かな息を吐いていた。

今度の悪行によって、どれくらい力が増したのか。ウエポは、今  
まで無理だった『魂引き留め』をやってみることにした。それは、  
命を与える行いでもなく致命傷を癒す技でもない。その所有者の肉  
体に、魂を繋ぎ止めておくものである。

ウエポが魂引き留めを詠唱し、姫君であるミシャナ　ウエポか  
らしてみれば一介の人間に過ぎないのだが　を見てみる。なんら

変化はない。

やはり、まだまだ能力の強化が必要だ、とウエポが踵を返そうとした時、うめき声が背後からした。それは、寝ていたのに無理に起こされた時に出す声に近かった。

まさか、とウエポは背後を見た。そこには人工的な鎖によって魂と肉体を繋がれた者の姿があった。

がしかし、この後、死んでしまう可能性は大いにある。魂引き留めが不完全だったら？ そんなことはない、と思いつつもウエポはミシヤナを彼自身の根城へと連れて行った。

幸い少女はウエポを魔王とも認識していなかった。おまけに、彼女は自分が姫君であることも含めて、何もかも覚えていなかった。

魂引き留めが不完全だったからなのだろうか。失敗作だ。殺せ。殺せ。ウエポは彼女の柔らかな首に鉤爪を突き立てようとした時、少女は明るい笑みを見せてくれた。

「殺すのを止めたのは、気紛れだったのかもしれない。製作者の意図としてはね。私は、別に何も感じなかったけれどね」

あれから六年後、姫君は立派な女性として成長し、ウエポが魔王であることも知ってしまった。それからというもの、ウエポが人間狩りをしようとする、決まってそれを止めさせた。ウエポが彼女を女性として意識していたからではなく、自身の娘のように、純粋に可愛いがっていた娘の願いだっただからである。

「でも、それすらも作者の意図よ。私は、男だと決め付けられて自

由を失った」

作中のウエポは雄として、そして、心の温もりを永遠に感じたいがために、ミシヤナと寄り添い続け、しだいに彼の能力が弱まり始める。

がしかし、その能力を補うために、人々の魂を狩りに行こうとしても、ミシヤナがそれを思い止まらせる。結局、ウエポは肉体強化ができず、そこにゲームの英雄が登場し、伝説の呪文サイテイドによって殺されてしまう。そして、魂を繋ぎ止めている者が消えたために、ミシヤナも同時に魂が肉体から解き放たれてしまう。

「ここまででは、ビニロジイーをプレイしたことのある人なら知っているわ。問題は、ここからよ。よく聞いて」

ビニロジイーに限らず、ゲームというものは大量生産される。ビニロジイーに至ってはシリーズごとに百万本は必ず売れる。

オンラインゲームから登場したキャラの思考者は、その世界だけの苦惱で済むが、過去から活躍、あるいは跋扈していたキャラは、生産された本数の繰り返しの渦に飲み込まれているのだ。

「普通の思考者でも、約オンラインプレイヤーの数だけ、同じことを繰り返しているんだけど、私のようなオンラインではない過去の作品にも登場した思考者は、更なる永遠の渦に閉じ込められたの」

幸い、彼女は半永久的な渦に閉じ込められ、その世界に疑問を感じ思考者になって今ここにいるが、中には思考者になった後も続く渦にたえきれずに発狂してしまう者も少なくなかった。

「アーマルズのように英雄の思考者も厄介だけど、最も厄介なのは発狂してしまった思考者でしょうね。彼らは何をしでかすか解ったものでないわ」

そして、思考者として発狂せずたえていると、今度はオンラインゲームで『いにしえの悪魔復活祭』がなされた。こちらは不気味な洞窟内で、過去の悪魔や魔物が待ち構えており、最深部にボスがいるというものだ。

「私も最深部で、倒されるのを待っていた。勝つこともあるけれども、負けることが大半。オンラインでは、私の強さが調整されていたこともあったんでしょね」

そして、何度目になるか解らない対戦相手が扉をくぐった時、彼女には身構える気力も残っていなかった。

「が、身構える必要はなかった。相手は機能者と名乗り、現実世界へ移行しないか、と尋ねてきた。」

現実世界の人間一人の思考を機能者へ転送し、思考を喪失した人間に憑依するのは気が引けた。けれども、半永久的な渦に戻るのもう懲り懲りだったので、すぐさま彼女は思考を移行してもらった。

「成功したわ。けど、その憑依した肉体の持ち主が、どうやらビロジイーをやっていた人で……移行者だったらいいわ。だから、私の思考がビロジイーへ移行するの」

話の大筋は解った。かなり複雑な人生を歩んできているらしい彼女。それに、ウエポは本当にペル・ウエポンだった。何一つ嘘を彼女は

吐いていない。

信用できるんじゃないか。藤棚はマスターを見た。そして、ハナを見た。二人とも神妙な面持ちで頷いていた。

「解った」

マスターが、どうしてピラミッドへ向かったか、そして自分達の目的がなんであるかを述べた。

「私も、あなた達と考えは同じだわ。協力してあげる」

彼女は、機能者の居場所を話してくれた。

無作為に移動しているように思える機能者だが、決まった道を通っているらしい。たまにイベントなどにより通れなくなる道が出てきたり、新たなダンジョンができてしまったりした場合は例外だが、それを除いては通る道は同じである。

「次に行くのは、きつとデカタ高原ね」

思考者の大半は、機能者と出会えば消えてしまう。だから、固定イベントや一部のクエストやらがうまく機能していない。そういうことが、ビロジイー内にある質問掲示板に書き込まれたり、個人に対してではなく皆が見ることのできるチャット画面に表示されたりする。

それを見て、ウエポは機能しなくなったイベントなどのある地域を線で結んでいったらしい。そうすると、決まったエリアでしかそれが起きないことに気付いた。

「昨夜、またイベントが機能しないとされたエリアがあったの。マルメラ町ね。その町の次は、デカタ高原に行くと思うの」

「なるほど。マスターと違ってウエポは頭がいいのね」

ハナが言うと、ありがとう、とウエポが表情を和らげた。おそろく笑みを浮かべているのだろうが、藤棚にはいかんとも判別し難かった。

デカタ高原は上級者専用エリアで、低レベルのオンラインプレイヤーの立ち入りは禁じられている。

ここには、オンラインプレイヤーの膝くらいの高さにまで草が生えている。それだけならばいいのだが、そこには所々ではあるものの、ぬかるみが隠れているものだから服が汚れてしまう。ゲームではそれが再現され、リアル感が出ており、プレイヤーは面白がるのだが、実際に汚れてしまう移行者にとってしてみれば鬱陶しい以外の何物でもない。

「そろそろ、小瓶から出してくれないか？」

「わ、私も……」

藤棚だけでなく、ウエポをもマスターに捕獲されて小瓶に押し込められていた。

「待つてくれ。マジロマー頭でさえも相当目立つつのに、ペル・ウエボンと歩いてた日にゃあ、それこそ人だからができる。何かのイベントと勘違いされて、襲いかかられるのがオチだ」

それにしても、熱いわ。ぶつぶつと文句を垂れるウエポの声が、隣の小瓶に入っている藤棚にもよく聞こえた。

思考するしかない世界に押し込められるのは、なんとも奇妙だ。手も足も機能していない。息を吐いている感じもない。このような奇怪な世界を、普通として受け入れられるようになる日は訪れないだろう。

「それで、俺らはいつまでデカタ高原で待ち続ければいいんだ？」

「それは、解らないわ。でも、一時間以内には来ると思う。だから、ここで待つていて。決して入り口付近で待たないでね」

入り口付近で待つて、機能者と遭遇した場合、戦う場所もそのことなり、あまりにも目立ってしまう。それに、助太刀と称して他のオンラインプレイヤーが乱入してきたら、更に困ったことになる。

なんととっても、機能者は普通のプレイヤーの目には映らないのだから。バグか何かと勘違いされて、カストウディアンと呼ばれるゲームの管理人に報告されてしまうだろう。カストウディアンがここへ来ると、ゲームの機能が一時停止され、機能者に逃げられてしまう恐れがある。

「だから、こうして離れた場所にいるのよね。あ、それと、この木の裏側に隠れていたらウエポも藤君も出しといて大丈夫じゃない？」

小瓶に封じられているので確かなことは解らないが、人通りが少ないフィールドの隅にある巨木のことを言っているのだろう。

「あ、ああ、そうだな。解った」

コルク栓を引き抜くような音がし、そして五感が戻ってきた。

目を開けると、暗闇から明るい所に放り出されたために、明順応しきっていない。くらくらする。

やがて目が明るさに慣れたので、藤棚は周囲を確認した。デカタ高原は相変わらずの高湿度だ。少々ではあるが、雨も降り出した。

「これで、いいだろ？」

マスターが、肩を竦めてから巨木の人通りの多い側へと回った。

藤棚とウエポは、その反対側に腰を下ろした。

「まだかなあ？」

ハナのやけに明るい声がした。彼女は目の利くエルフなので、遠い入り口付近にいるプレイヤーだろうが機能者だろうが、どんな顔付きをしているのかまで判別することができるだろう。

「よっこらしよっ」と

人の行き来が盛んな側へ行ったばかりのマスターが、藤棚の横に戻ってきた。

「これからが正念場だ。ビビッて固まるなよ、少年」

脅すような口調だったが、そこには優しさが含まれていた。自分を氣遣つてくれているのだろう。

「解った。それと……少し気になることがあるけど、ハナはどうして……」

藤棚が声を潜めて聞くと、マスターが人差し指を口に当ててから藤棚の横に腰を下ろした。

「まあ、お前も座れ」

藤棚も座ると、マスターは話し始めた。

ハナは産まれた時から対人恐怖症だった。人前に出ると、顔が引き攣ったり声が緊張のあまり震えてうまく話せなかつたりした。小学生になってから、その特徴をからかわれ、彼女は余計に自分の殻にこもるようになった。そうして、無口になり、喋る時は俯き加減にぼそりぼそりと喋ることしかできなくなった。無理に話して声を震わすよりは、こちらの方が彼女にはいいように思えたのである。そして、大学生になり移行者となった。

ビニロジィーで、最初に誰に向かって話したか彼女は覚えていない。ただ、誰かに話す時、やはり現実世界と同様に声が震えていた。

しかし、彼女はそこが架空の世界だということに気付いてから、せめて非現実世界だけくらいは、まともにも人と会話がしたかったらしい。彼女は、積極的に人とのコミュニケーションをはかり、今

ではゲームの中においては普通に人と会話できる。

「現実世界での彼女の喋り方は、まだぼそぼそって感じにお前には思えたかもしれないねえが、あれでも、俺があいつと初めて会った時に比べれば随分とマシになったもんよ。いつかは、現実世界でもちゃんと話せるようになれるんじゃないかねえのかな」

マスターは立ち上がり、巨木の表側へと移動した。そして、慌ててまた藤棚のいる側へ戻ってから「今のことは他言無用だぞ！」と低い声で凄んでみせた。

よほど、ビニロジィーでのハナが怖いのだろう。

## 謀られ

時間が気になつてきた。巨木からデカタ高原を見張ってから、三時間くらい経っているように思える。

藤棚は時刻をどうやって見ればいいのか、マスターに聞いた。

「ああ？ メインメニューと言えばメニュー画面が現れるから、それから……ってお前は、移行者というよりペルトレッドに近かったな」

よつこらせ、と気だるげに言うマスターの声。続いて草をざくざくと踏む音。

「おらよ」

マスターが藤棚の隣に立ち、自身のメインメニュー左下に表示されている時刻を見せた。

1 : 3 4 : 0 4

一時四十分か。後、三十分弱で現実世界への移行が始まってしまふ。

「本当に、機能者はここを通るんだろうな？」

「ええ、必ず」

ふうん、とマスターはウエポを怪しむようにじろじろと見た後「お前は戦えるのか？」と尋ねた。

「戦える。思考者は本来、戦えないものだけれども、私の場合、思考者でもあり移行者でもあるから」

ややこしい。藤棚は自分の存在も実に不可解なものであることも忘れ、そう思った。

「来た！ ねえ、あれじゃないの？」

ハナの興奮気味の声が聞こえた。

遂に来たのか。藤棚は緊張のあまり身体が動かなかったが、マスターは「なんだと！」と、ハナに負けなくらいに興奮した口調で聞き返している。

「待て！ 今、そつち側に行くから」

藤棚に、戦闘の準備だ、と言いマスターは巨木の陽の当たる側へと移動した。

「やはり、物凄い美人だな。おい、あいつに間違いないか？ ウェポに確かめさせる」

ウェポも巨体を揺すりながら、しかしなるべく目立たないように身を縮めて機能者らしき美女を見る。そして、敵かに頷いた。

「間違いないわ。あの人よ」

もう、今にも突撃を開始しそうなので、藤棚も巨木の裏側から表側へと移動し、そして、機能者を見た。

確かに、それは美人だった。健康そうな乳白色の肌に、顔の部位の配置は文句の付けようのないほどだった。瞳の色は青みがかっている。髪は長髪で滝のように一切の癖毛がない。

「機能者が人通りの少ない場所に動いたら、戦闘を始める。それまで待機している」

マスターの声は、心なしか僅かに震えていた。恐怖を感じているのだろう。それは、藤棚も同じだった。機能者の力は未知数だ。どんなボスも、強力な魔物も、しょせんは倒せるようにプログラムされている。けれども、今から戦おうとしている相手は普通ではない。少なくとも、倒せるようにはプログラムされていないことは確かである。

いくらこのゲームがアクションRPGであり、相手の攻撃を避け続ければ生きていられるとはいえ、相手が不可避の技を繰り出してくるかもしれないのだ。

左手が小さく震える。それを右手で抑えようとしたが、あいにく右手も左手と同じ状態だった。

「落ち着いて」

ハナの両手が、藤棚の左手を優しく包む。彼女の手にくそ、彼以上に不安さがこもっている。ハナの手の方が藤棚の手より震えていたのである。

彼女の方こそが、自分より恐れおののいている。今、怯えても無意味だ。ここで機能者を仕留めれば、それで全てが終わる。世界に思考者が現れるのを防ぐことができるのだ。

藤棚は深呼吸してから、ありがとう、とハナに言い機能者を睨み付けた。と、機能者もこちらを見た。

こちらに気付いているのだろうか。

藤棚の心臓が大きく一拍打つ。

機能者が口元に微かな冷笑を浮かべ、疾駆してきた。否、疾駆というよりは足が地面を這うようにして飛翔していると言った方が真実に近いだろう。

「来る……」

「いやはや、そっちの方が好都合だ。わざわざ、やつこさんから俺らの地引網にほいほいと入ってくれるんだもんな」

余裕たつぷりそうにマスターが言う間に、機能者はもう十歩ほど離れた所まで接近し、そこで足を止めている。

「計画通りよ」

ウエポが言うと、思考者に救いを与えてきた美女は、陽光を連想させる笑みを浮かべた。が、藤棚にはどうしてもそれは人工的なものしか見えなかった。

「彼らが、思考者の救いを邪魔する者」

ウエポが言葉を続ける。

何かが違う。彼女は、何を言っているのか。藤棚は咀嚼できなかつた。

「謀られたな……」

顔色一つ変えていないマスターだったが、彼の手が震えているのを藤棚は見逃さなかった。

「確かに謀った」

機能者が完璧なまでに綺麗な足で地面を叩いた。

「ここも、私が通る道なのだ。そもそも、私は歩く道を選ぶ権利すらないのだから」

藤棚はうつと息が詰まった。機能者の言うように、彼女には歩道を選択する権利を持っていないはずだ。なのに、こちらへ接近してこられたというのは、誰かが彼女を手引きしたことに間違いなく、そしてこの場合『誰か』というのはウエポに他ならない。

「どうして？ どうして裏切った？」

藤棚は、信じていた彼女を見上げた。ウエポの目は悲しそうにしばたかれ、それから、彼女は機能者の方へ歩いていった。

「私は、他の思考者が永遠の鎖に繋がれていることに反対しているの。解るでしょ？ あの苦痛がいかたえがたいものか。」

思考を機能者の身体に封印して、思考がお留守の人間に思考者を憑依させることには、もちろん反対しているわ。でも、機能者を現実世界へそのまま移行させれば、全ての思考者を救い出せる。そして現実世界の人間にも被害は及ばない」

「でも、英雄の思考者は、現実世界を破壊しようとするだろ！」

藤棚が声を荒げると、それとは対照的なウエポの声が発せられる。「そうね。でも、それは渦に閉じ込められていたからなの。そして、その渦を作ったのは他でもない」

ウエポが言葉を区切ると、機能者が藤棚達を指差す。

「あなた達だ」

「で、でも！」

藤棚は逆接を口にしたハナを見た。彼女は何か言葉を続けようとしていたが、現実世界の彼女のようになってしまうていた。

「解るわ。あなたの言い分は正しい。だから、私と他の魔物とで英雄を押さえ込もうとするわ。なるべく穏便なやり方、言葉で彼らを説得しよう」と

「無駄だ！ そんな生温いやり方で、奴らが身を引くわけねえだろうがよお！」

マスターが、巨木を力任せに叩いた。

「それでも、私は暴力を振るわないことを決めたの。多くの魔物の思考者もそうでしょうね。それに、私は英雄の思考者も話せば解る

「思っているわ」

果たしてそうだろうか。藤棚は英雄の思考者ではアーマルズしか見ていないが、彼だけを見ているだけあつてか、言葉で彼らの選択肢から『悪』を除去するのは、どうしても不可能に思える。

「それで、どうして、俺らを使つたんだ？ お前だけでも機能者と接触できただろうが」

「そうね。なんかなかったかもしれない。でも、それよりも重要なのは、あなた達が機能者の現実世界への降臨を阻むことよ。だから、しばらく機能者に思考を委ねて欲しいの」

「思考を預ける？」

ハナの声は、震えていた。

「そつだ」

機能者が、無機質な声で言う。

「私は思考者の住処となる人間の思考を、身体に保存している。それと同様の原理で、あなた達の思考を身体に保存することができる。何も案ずることはない。思考者を現実世界に移行させ、英雄の説得が済んだらあなた達の思考を現実世界に戻す」

機能者はそれを最後に、何もしゃべらなくなった。もう何も話すことはなく、残る作業は思考吸収だけなのだろう。

機能者がウエポを見上げる。

「ごめんなさい」

ウエポの頭がぺこりと下げられるが、その様は彼女の巨体に似合わない。

「やれやれ、どうしても、お前らと一戦交えなくちゃならねえのか」  
機能者が軽く頷く。

「解つた。最後に一つだけ質問させてくれ。お前は、俺の妹の思考を持っているのか？」

マスターが質問すると、機能者は彼にその妹の名を問うた。

「とどり戸鳥よのみ夜能美」

「トドリヨノミ」

機械が発する声を連想させる全く抑揚のない声。それを機能者は発した後、首肯した。

「彼女は思考者だ」

マスターにとつて、この言葉はどれくらい重みがあったのだろうか、どれほど救われたと思ったのだろうか。藤棚はマスターを見た。彼は俯いていたが、やがて、くつくく、と低い笑い声が聞こえ始め、かと思うと顔を天に向けて盛大に笑っていた。これから起こること全てが取るに足らないもので、笑って吹き飛ばせるんだ、とマスターが言っているかのようである。

「おうおうおうおう、じゃあ、ますますもって、俺は今ここで思考を抜き取られちゃ駄目だつてこつたなあ」

笑うのをぴたりと止め、マスターが凄味の利いた声を出した。

「おら、手始めに、ウエポは小瓶に封印させてもらうぜえ！」

マスターが封印の呪文を詠唱する。が、どうしたことだろうか。

ウエポの巨体は依然草を踏みしめたままである。

もう一度マスターは詠唱するも、何も起こらない。

藤棚も変に思い、マスターを見、それから機能者を見てみると、機能者はマスターの詠唱に合わせて、何かを囁いている。

「無駄だ。私がお前の呪文のプログラミングを解析して解除している。大人しく私にあなた達を触れさせなさい。そうすれば、あなた達の思考を取り込める」

「させるかよおおおおお！」

マスターが右手に炎の渦をまとわせた。

めらめらと燃え、空気をなめるそれは、機能者を燃やしたくてうずうずしているかのようにその身を縮めたり、伸ばしたりしている。しゅん、と矢が空を裂く音。

ハナが先制攻撃を仕掛けたのだ。

それを合図に、マスターも炎を放った。彼の腕で暴れ狂っていた炎は、大気を飲み込みながら機能者に突撃する。

そして、衝突　　するはずだったが、矢、そして炎はたちまちの

内に霧散した。

「私は全ての攻撃を解除することができる」

表情を一片も変えない機能者。

「あなた方に勝ち目はない」

丈の高い草を間に挟み、二人と三人はしばし沈黙を保った。そよ風が草の頭を下げさせていたが、やがて凧いだ。

ウエポが何か言おうとしたが、機能者に留められた。彼女が言うとしたら、おそらく、大人しく思考を渡してください、といったところだろう。

どうにかして、機能者に勝つ方法を見付けろ。

何か。何かを。

藤棚は周囲を見た。何も無い。

あるのは、遠くに見える野生のマジロマのみ。

藤棚自身と同種族である存在だけ。

「手荒な真似はしたくないが、致し方ない」

機能者は瞬き一つせず、すうつと、地面を滑るようにしてくる。

彼女が進むと、背丈の高い草が脇へ避け、土色が顔を覗かせる。

接近戦に持ち込ませまい、とマスターは掌から氷を射出する。

放たれた時は小さかった氷だが、彼の掌から離れるにつれ巨大化し、氷の岩石となる。が、それも機能者によって青銅色に光る一筋の糸となつて掻き消される。

ハナも矢を連続して放つが、結果は同じだった。

藤棚も何かしなくてはならない、と思っていたが、何をすればいいのかが。

機能者と接触すると思取り込まれてしまう。かといって、飛来系統の技をどう使えばいいのかわからない。

「まずは、お前からだ」

機能者が、マスターの放つ魔法攻撃を全て無効化しながら近付く。

「くそお……くそお……」

マスターの手から放たれる全ての属性、あらゆる系統の魔法、特

技が全て蒸気になって大気に混ざってゆく。

「悪足掻きをよさないか」

機能者が滑らかな手で、彼の顔を鷲づかみにする。

「解放」

マスターがそれを口にすると、藤棚は身体が軽く感じられる。

何が起こったのか、藤棚は全く理解できなかった。

「お前……俺の妹を……ついでに、地球も頼んだ……」

マスターの身体が灰色の靄に包み込まれ、そしてその煙が風によって運ばれた後、そこに彼の存在はなかった。

ハナも藤棚も、恐怖で身体が固まってしまっていた。

消えた。彼が消えた……。消去されたのか。いや、違う、あれは吸収されただけだ。まだ、救える。でも、一体、どうやって？ あいつを倒せばいい。いや、今は無理だ。もっと力を付けてからだ。

それにしても、マスター……妹の方が地球より優先しているとは。いやいや、兄としては当然のことか。ああ、そうだ、逃げなくてはあいつを倒せる力があるのなら、それもできたのだが。

藤棚の身体は動かなかった。その代わりに、妙に思考だけが高速回転している。逆に、そのせいで手足の動いてくれないことが、余計にもどかしく感じられる。

機能者を倒すにはどうしたら？ どうすれば？ 藤棚は機能者を

見た。彼女は感心したように僅かに頷いている。

「なるほど。あなたを解放したようだ。マスターとかいうあの男、自分の思考が取り込まれると、ついでに、その『備品』も吸収されてしまうことを理解していたようだ」

備品扱いされた藤棚は、ハナを見た。どうすればいいのか。目でそう訴えようとしたが、彼女の目は死人のように無表情になっていた。

「それでいい」

固まって動けない藤棚とハナを見て、機能者がこくりと一度だけ頷いてみせた。

機能者は、藤棚より半歩前にいるハナに触れた。

ひっ、と息を呑むハナの声が聞こえた。かと思うと、マスターの時と同じように灰色の蒸気が彼女を飲み込み、そして、消えた。

どうすればいいのか。これでは、世界どこるか、マスターの妹一人も救えない。

まずは、身体を動かそう。そこからだ。

自分の中から、自分のものではない声が出た。

手に力をいれると、動いた。足の親指にも感覚が戻っている。踵を僅かに浮かそうとしたら、それにも成功した。

何か使えるものはないだろうか。

藤棚は周囲を見た。すると、またもあのマジロマが目に入った。

どうして、あのマジロマは固まったままなのか。それとも、固定イベントがまだ発動していないのか。あるいは、あの魔物が思考者であり、過去に機能者によって移行させられ、思考がないがゆえにもぬけの殻になっているのか。

あのマジロマが思考者、と考えると急に頭が熱を帯び始めた。

あそこに存在するのは苦悩が連なった日々だけ。乾燥した古傷、ひび割れ。彼の半分が、もう半分に告げた。意味はねえ。

固定イベントの渦は儂い、決してないものは輝き、無意味で永続するイベントが働き、けれども、抗い、逆らいはしたくとも不可能だった。

藤棚は、機能者を倒す答えが近くにあるような気がしてならなかった。

灯台下暗し。用ないほど虚しい過去に、もしかしたら解答があるのかも知れない。崩壊の倒壊　過ちの破壊　にこそ模範解答が隠されているのかも知れない。

模範解答に誤字脱字があり、一介の生徒が導き出したものが書かれた答案用紙が正解という手痛いこともあるかもしれないがしかし、確率的に言えば模範解答が真に決まっているのだ。

俺は、真実、二体の存在だったのか。だとしたら、力を貸して欲

しい。相棒。お前の現実世界に対する辟易した気持ち、親友に裏切られた悲しみ、ただ意味がない人生を歩んできたと信ずる陰惨さ、それら全てが自分に降り注がれ影響を受けていたのだろう。

機能者といえども、予想外の思考は吸収できないはずだ。

藤棚は確信を持っていなかったが、それに賭けるしかなかった。奴を倒すにはそれしかない。

機能者が、マジロマの乾燥しきった硬い肌に触れる。

## 存在の損壊

今だ！

半分が、残りの存在に呼びかける。

圧倒的な力が、思考を外に吸い出そうとする。透明で荒々しい腕によつて、頭を引っこ抜かれる感覚にそれは近い。

思考が分離される時、データの通り道が藤棚には見えた。その穴は一人分しか通れない。予想通りだ。機能者の見えざる手は、あの穴から思考を抜き取るつもりだ。しかし、あの穴を二人で同時に穴を抜けようとすれば、自ずと結果は見えてくる。

思考の分離作業が止まる。機能者が、精神を分離させる腕へ更なる力を送り込む。がしかし、藤棚の思考は朦朧となるどころか、むしろ鮮明と化してきた。

今が奴をやるチャンスだ。

藤棚の片割れが叫び、残りがそれに応じる。

そして、機能者へ強烈な一撃を加えたはずだったが、機能者の身体が水滴ほどの粒の大きさになり分裂する。

数えると気が遠くなりそうな数に身体を分解した機能者は、藤棚の背後に素早く移動し身体を再構築した。

それでも、藤棚は諦めなかった。

機能者は絶対的な防御を持っているのかもしれないが、己にもそれ相応の力がある。

藤棚はそう信じて、最高硬度を誇る鉤爪で大気を切り裂き、そして、機能者に切りかかった。

しかし、得られた結果は同じであった。

「私の分離作業を、どうやって逃れたかは知らない。しかし、私に歯向かうのは思喰獣に立ち向かっているようなもの」

機能者が、再構築を終えた手をわざと分解し中身を見せた。

そこには青銅色の文字、数式、記号が渦を形成していた。

「そうか。思喰獣をあなたは知らないか」

思考を喰らう獣。彼はそれを知っていた。そして、思喰獣がいる空間へ移行する方法も。ある言葉を発すれば、それだけで行ける。だから、彼はこう答えた。

「いいや、知っている」

機能者が動きを止める。洗練され無駄のない動きが止まると、周囲の空気が一挙にして停滞するかのようだ。

「マスターかハナに聞いたのだな」

と言い、機能者が自身の胸に手を当てる。彼女の胸と手が青銅色の光に包まれる。ハナとマスターの記憶を読み込んでいるのだろうか。「いいや、違う。ならば、なぜ、お前は思喰獣のことを知っている？」

淡々と喋りながら、機能者が一步一步藤棚に近づく。が、先程のことを警戒してか、堂々とした足取りでは近付いてこない。

「なぜかってか？ 俺を取り込めば解ることだ」

硬い外皮に包まれた足で地を蹴り、藤棚は機能者に襲いかかった。藤棚にしても、機能者にしても決め手を持っていなかった。

機能者は戦闘に特化していない。相手の攻撃を受け流すか分解するかして、対象に接近し思考を取り込む。これしかない。が、今度の相手は思考の取り込みを拒絶する。

対して、藤棚もマジロマの肉体によって物理的攻撃を加えても、今度の相手は、それらの全てを回避する。

がしかし、彼はそれを承知で彼女につかみかかった。否、つかんだというよりは、分解されて水滴状になりつつある彼女に触れたただけだったが、それで十分だ。アルビーの言葉を信じればだが。

Start・Bunirazy

藤棚は教えられた言葉を口にした。

バグ空間へ移動する瞬間に感じるものは、移動というより、むしろ

る落下しているという冷たさだ。急速に落下し、明確な恐怖が足から腰にかけて這い登るあの心地よくないものに等しい。

三度目になるバグ空間に落ちてから、藤棚は辺りを見回した。

機能者が見せた青銅色の光が、辺りに散乱している。光のない部分は全くの黒。無と言っても差し支えないだろう。

その無と有で構築されいている場所に、機能者もいた。彼女は、人工的な美しさを維持してはいたけれども、気を失っているらしく、そのまま地面にうつ伏せになったまま反応がない。

ひよつとすると、今ここで機能者を殺せるのではなからうか。藤棚は手を伸ばし、彼女に触れようとしたり。しかし、手がぶれ始めた。そして、そのぶれる幅はだいに大きくなり、まばゆい光が覆い込み、白の存在から黒の存在が誕生した。

「ああ……」

彼ら有の存在は二つして残念そうに感嘆詞を口にし、それから片方だけが、再び機能者を殺そうと手を伸ばした。

白の有は首を絞めて殺そうとしたがしかし、機能者の首の部分だけが分解されてしまう。やはり、思喰獣によって殺してもらうのが無難だろう。

「アルビー！」

白の有が叫ぶ。

反応なし。

「アルビー！」

黒の有も叫ぶ。

「聞こえてるよお」

黒い空間にぽっかりと穴が開き、そこからアルビーが転がりながら出てきた。

「君は誰だい？」

白の有はその質問には答えず、機能者を指差した。

「あれ？ 彼女がこんなところに……しかも、複雑なプログラミングが、こんな複雑なところにいるから、データが一部破損している

ね

「そんなことはどうでもいい。早いとこ、あいつを思喰獣によって始末してくれ」

白の有が言うと、アルビーは訝しげにその存在と片割れの存在を見た。

「君ら二人は誰？ そもそも、どうして、ここへ入る方法を知っているの？ それに、なぜ、アルビーってことを……」

そこまでアルビーは言っつて、はっとした。

「君ら……藤棚君？」

二人して頷く。

「いやいやいや。二人合わせて藤棚君なんて意味解んないよ」

アルビーが、首をいやいやするように振った。

「話せば長くなるけれども」

二人の藤棚とアルビーは向き合い、そして黒の方が口を開いた。

## 再びバグ空間

バグ空間へ移動する瞬間に感じるものは、移動というより、むしろ落下しているという冷たさだ。急速に落下し、明確な恐怖が足から腰にかけて這い登るあの心地よくないものに等しい。

三度目になるバグ空間に落ちてから、藤棚は辺りを見回した。

機能者が見せた青銅色の光が、辺りに散乱している。光のない部分は全くの黒。無と言っても差し支えないだろう。

その無と有で構築されいている場所に、機能者もいた。彼女は、人工的な美しさを維持してはいたけれども、気を失っているらしく、そのまま地面にうつ伏せになったまま反応がない。

ひよっとすると、今ここで機能者を殺せるのではなからうか。藤棚は手を伸ばし、彼女に触れようとした。しかし、手がぶれ始めた。そして、そのぶれる幅はしだいに大きくなり、まばゆい光が覆い込み、白の存在から黒の存在が誕生した。

「ああ……」

彼ら有の存在は二つして残念そうに感嘆詞を口にし、それから片方だけが、再び機能者を殺そうと手を伸ばした。

白の有は首を絞めて殺そうとしたがしかし、機能者の首の部分だけが分解されてしまう。やはり、思喰獣によって殺してもらったのが無難だろう。

「アルビー！」

白の有が叫ぶ。

反応なし。

「アルビー！」

黒の有も叫ぶ。

「聞こえてるよお」

黒い空間にぽっかりと穴が開き、そこからアルビーが転がりながら出てきた。

「君は誰だい？」

白の有はその質問には答えず、機能者を指差した。

「あれ？ 彼女がこんなところに……しかも、複雑なプログラミングが、こんな複雑なところにいるから、データが一部破損しているね」

「そんなことはどうでもいい。早いとこ、あいつを思喰獣によって始末してくれ」

白の有が言うと、アルビーは訝しげにその存在と片割れの存在を見た。

「君ら二人は誰？ そもそも、どうして、ここへ入る方法を知って

いるの？ それに、なぜ、アルビーってことを……」

そこまでアルビーは言っで、はっとした。

「君ら……藤棚君？」

二人して頷く。

「いやいやいや。二人合わせて藤棚君なんて意味解んないよ」

アルビーが、首をいやいやするように振った。

「話せば長くなるけれども」

二人の藤棚とアルビーは向き合い、そして黒の方が口を開いた。

黒の有の過去

藤棚 黒の有である方 は、元々移行者だった。彼はビニロジイーをプレイしていたことにより、非現実的世界に入ってしまったという点で、他の移行者と共通点を有していたが、一つだけ特異な面を持っていた。

他の移行者と接触し、情報交換を行ったり、ともに戦ったりして

危機を切り抜けるのが普通なのだけれども、彼はそうではなかった。これが、一般的な移行者と異にする点である。

偶然に偶然が重なった結果、彼は、他の移行者と会うことはなかった。チャットで混乱した発言をしなかったからかもしれない。

初めて移行した者の大多数は、コマンド入力なしに話すものだから、そのフィールドにいる者全てに「どうなってるんだ?」「何が起こっている?」「ゲームの夢でも見ているのだろうか」等々と混乱した言葉を発する。そして、そのフィールドに移行者がいれば、初の移行者との接触を試みるのだ。けれども、藤棚は初の移行の時のゲームの夢を見ていると思っではいたものの、ゲーム上でするようにコマンド入力をすることによって自分が本当に話したい相手にだけ自分の言葉を示していた。

そして、あの悪夢を迎えることとなる。ビロジイーを親友今田力宅にて遊び、目を覚ますと、彼は自殺をする。

親友の自殺を機に、黒は引き籠もり、やがて大学にも行かなくなる。そんな時に、設楽春香が彼に優しさを与えた。

設楽春香に携帯電話で住所を聞かれ、何事だろうかと黒が思っている、それはなんとテスト範囲や講義で配ったレジュメを、わざわざ家にまで持ってくるためだった。

しかし、それでも、最初、彼は冷たく彼女をあしらっていた。

ゲームのチャットを用いた無駄話。

そんなことで憂さ晴らし。

くだらない、つまらない、なんてことは百も承知だった。

人生の五里霧中で、より苦渋を味わった。

自己嫌悪に陥り、潜り込む先は心の白テント。何も聞こえず、とばかりに精神に蓋をしていた。誰も自分のことを理解できない、そう、偉大な地と天も。

設楽春香と知り合ってから、むやみに意地張って、いきがって、君だつてこういうことあるだろ、と怒鳴り散らしたこともあった。

幾度となくそんなことを繰り返していると、設楽は藤棚の母に彼が必要としているものを渡して帰るようになり、ほれみる、と彼は心の中で彼女を嘲った。

そんな風にして、無為な日々が流れていく中、藤棚はビロロジィーでの世界を堪能していた。その世界でゲームオーバーになると思喰獣に喰らわれるということや思考者、機能者、移行者、ペルトレツドとビロロジィーが関連しているということなど、彼は露も知らずに、それまでを架空世界で生き抜いてきた。

それは、良き仲間がいたからかもしれない。

現実世界に、彼は自分の心を打ち明けることができる人間関係を築いたことはなかった。だが、ビロロジィーには、その関係があった。

「スラツシュ、ユー」

藤棚の傍らに腰を下ろしたオンラインプレイヤーが、コマンド入

力をした。

「おいおい、そんなこと初めて聞いたな」

藤棚は今日、設楽春香のことを話してみたのだった。

ああ、確かにそいつは鬱陶しい奴だな、という返答を彼は期待していた。だが、彼の信頼していたオンラインプレイヤーはそういった類の言葉を口から出さなかった。

「お前には、解らないのか？ 彼女は、何も自分の虚栄心を満たしたいわけじゃあない。お前を救いたいんだろ。心配しているんだよ、お前のこと」

「一回生の時のクラスが一緒だったからって理由だけで？」

「ああ、そうだ。きっと、そういう子なんだよ。それにさ、お前。お前を心配してくれている人間がいるってことがどれだけ幸せなことか解ってないなあ。」

「ここじゃあ、俺もちよいとばかり幅を利かしているけどよ、現実に戻れば随分と哀れなもんよ」

「はははは、とオンラインプレイヤーはぎこちなく笑った。オンラインプレイヤーなので笑いのコマンドを入力して笑うのだが、その笑いは、どのオンラインプレイヤーも一様に歪になってしまう。」

「な、なあ、リアルで俺と会わないか？」

藤棚はそう提案してみたが「いや、いいよ。空想は、空想のまま

にしておいた方がいい」と言われただけだった。

「とりあえず、お前は、その子の善意を受け取る義務があるってんだ。いつまでも過去の鎖に繋がれているな！もしかしたら、その子の善意が単なる善意ってことじゃねえかもしれないねえだろ？」

単なる善意ではない、という言葉の響きに藤棚はどきりとした。複雑な善意というものがあるとしたら、それは条件付善意ということなのだろうか。

「ああ、それに近いかもな。考えてもみなよ、お前さんの年頃の死因トップはなんだ？」

藤棚はその答えに大体の検討をつけることができたけれども、答えるのが怖くて口に出せなかった。

「自殺だ」

オンラインプレイヤーが冷たい目で見る。

「その子がお前を好きで、そうしてくれていて、でもその結果、お前が無視を続けていたらどうなるよ。また、お前を拘束する鎖が一つ増えてしまっただけじゃないか」

藤棚は、自分の足や手がすでに重くなっていることを理解していた。錆びてぼろぼろの鎖で、とうに彼の身体は縛られている。容易に鎖を引きちぎれそうなのに、案外そうもいかないところがまたもどかしい。そんなものがまた一つ増えるとなると。

もちろん嫌だ。だけれども、彼はそういう現金主義に成り下がる

のはまっぴら御免だった。損得勘定で動く類の人間を彼は嫌悪している。そんなものに自分なるだなんて、想像しただけで吐き気がする。

「馬鹿だなあ、お前。それって、俺が嫌いな人間だぞ？ 何をするにしても、言い訳する奴。しかも、その言い訳が言い訳だと認識できてなくて、いかにもそれが真実だと信じ、疑わない奴。」

そうやって、自分を虚構の真実で塗り固めていつている奴、俺は嫌いだ。な？ いるだろ、こういう奴。例えば、運動系のサークルに入ればいいのに、やるなら部活並みに真剣に取り組みたいから入らない、だとか、この講義室の雰囲気は嫌だと言っているけれど、真実は教授が嫌いだけ、自分は何でもできると信じているけれども、何にもできないかもしれない事実を突き付けられるのが恐ろしくて、何事に対しても燃えない奴。大学なんて意味ねえって言って、勉強しねえ奴」

藤棚の周りにもそういう人がいる。彼自身も、オンラインプレイヤーの言っていることに該当している部分があった。

「解った。明日から、少しは話してみるよ」

オンラインプレイヤーが、また強張った笑みを浮かべた。

あれからというものの、藤棚は設楽春香と少しだがコミュニケーションをとるようになり、しだいに打ち解けてゆくようになった。が

しかし、両親との関係は依然として殺伐としていた。両親は自殺なんてしないだろう、と考えていたからだ。

そのように、オンラインプレイヤーの忠告を両親に関しては無視していた彼は、設楽春香と話す内に、彼女が意外にも特殊な人間であることが解った。

「ペルトレッドだって、殺すのはよくないと思うの」

ビニロジイーに登場する魔物に、よく似ているペルトレッドがいた。が、それはビニロジイーが神話や童話に登場する魔物を参考にしており、ビニロジイーの魔物に似ているというよりはむしろ、童話や神話に現れる魔物と酷似していると彼は認識していた。だから、別段気にも留めていなかった。

とはいえ、ペルトレッドが人間を殺すことに変わりはないので、どうしてそう思うのか問うた。

「ペルトレッドも生物だし、自分が悪いことをしているって理解していないからああいうことをすると思うの。せめて、生け捕りにすれ」

そこまで彼女は言うてから、口を嚙んだ。

「いいえ、自由の身でないことが最も残酷よね」

こういうやり取りもあったし、ビニロジイーを止めるように説得されたこともあった。元々ゲームに興味があったというよりは、することがなかったから暇つぶしにやってみたくらいの気持ちだったので、藤棚のゲームをプレイする時間は徐々に減り、その代わりに、

大学での勉強に精を出す時間が増えていった。レジュメや講義中のメモを渡してもらっておきながら、その心持をおざなりに扱うのは良くないと感じられたからというのもある。

### 白の有の過去

白の有は、彼の生きている世界に辟易していた。憔悴が彼の精神の大半を形成しており、今にも思考が破綻しそうだった。そんな時、救いの手が現れた。思考者の間でも噂になっていた機能者である。

彼女は現実世界の思考を抜き取り、がらんどうとなった肉体に思考者を憑依させることができると言った。

永遠の苦悩から解放される。白の有は機能者にそれをお願いし、機能者はそれを叶えてあげた。厳密に言うと、叶えてあげようとした、が真実だ。

実際に起きたことは、現実世界にいるある人物の思考を抜き取ることができず、そして、思考がまだ満たされたまま 陰惨さで飽和している思考 の肉体に憑依してしまった。

当然、船頭多くして船山に上る状態だ。白の思考と黒の思考は互いにもつれ合い、互いを攻撃しあうのが通常なのだが、白は暴力を振るうことに嫌気が差していたし、黒は全てにおいて気力を失って

いた。

ゆえに二つの精神は、一つの肉体を共有したのである。そして、黒の暗闇が白を被覆した。結果、白の性格はどんよりとしたものになる。更に、黒の思考の持つ圧力で、白は自分が自分であることを忘れた。

そのような多大な影響を与えた黒だったが、気力のなさから肉体操作の主導権を失い、記憶の隅へ追いやられた。けれども、死んだわけではないので白は黒の記憶を自分のものとして使っていた。というより白は黒の記憶を自身が所有するものと誤解し、本来彼が所有すべき記憶を喪失していた。つまり、白は自分を黒だと思い込んでいた。

これから……

「とすると君らは二人で僕の（・）知って（・・・）いる（・・・）藤棚君というわけか。なんだか、ややこしいね。果たして僕が理解しているかどうか怪しいからさ、君らの言ったことを理解しているかどうか確認してもらえないかな？」

アルビーは、白と黒が話したことを要約してみた。

白は赤ん坊をさらいオンラインプレイヤーに追われ、捕まろうが捕まらなかるうが、赤ん坊を喰らう固定イベントに従事していた思考者。

機能者によつて思考を転送してもらおうとしたものの、藤棚の新しい所有者である黒の思考の剥離が失敗に終わり、そのため一人専用の脳内に二つの思考が居座った。そして、機能者による思考転送はおよそ不安定なため、それが原因で白は自身が思考者であったことやビロジューで得た記憶を全て忘れ、代わりに黒の記憶を読み取り、自分を黒だと誤認識することとなる。そうして己の記憶を喪失した白だが、藤棚の肉体操作の権利を握った。

白の有と黒の有は、顔を見合わせてから頷く。それから彼らは、自分達の身体が青銅色に輝き始めていることに気付いた。

「ああ！ 元々、ここに何度も来れば、移行者を構築するプログラミングが不安定になるんだ。ましてや、君達のような不安定要素を詰め込んだ存在ならなおさらだよ！ 早く上の世界に戻るんだ！ バグ空間については駄目だよ」

「でも、待ってくれ！ 機能者を思喰獣に喰らわしてくれ！ あいつがいると、多くの人間が死んでしまう！」

白の有 思考者の部分 が嘆願した。思考者が、機能者を見ると、青銅色の文字や記号が渦を巻いている。

「再構築をしているんだね」

興味なさそうにアルビーが言った。

「人の話を聞いているのか？ 早く思喰獣を……」

「言わなくても奴は来るよ」

地鳴りのような音が、青銅色の空間を揺るがし始めた。

「思喰獣は言われずとも、自分でやってくる。そして、僕はこのバグ空間を管理するためのプログラミングだから、奴に喰われることはない。僕の親友もそうだ」

「あ、ありがとう。だったら、あいつは、思喰獣に喰われるということが」

「何を言っているの？」

アルビーが怪訝な顔をする。

青銅色のアルファベットの「J」が、黒 移行者の方 の頭を掠める。

「彼女は僕の親友だよ」

思考者も移行者も、アルビーの言っていることを、すぐには咀嚼できなかった。

ややあってから、二人ともアルビーの言わんとしていることを理解し、そして二人して彼に詰め寄った。

「どういことだ？」

アルビーは肩をすくめてみせた。

「彼女のしようとしていることが悪いことだって、僕は思わない。無限の可能性が広がる世界。無を満たすのは大変だろうけれども、元から満たされた容器を持っているよりは遥かにましってもんだよ。むしろ、歓迎すべきことだね。」

そんな現実世界に、君ら人間だけが住んでいるだなんて図々しいにも程があるよ。それに、僕も現実世界に行きたいしね。今、ここで彼女を思喰獣に喰らわすと、僕の夢が叶えられなくなってしまっ

「ふざけるな！ 現実世界が、人間の命が、危険に晒されるんだぞ！」

移行者が言うと、アルビーはこころと笑った後、急に真面目腐った顔になる。

「それは、僕ら側も一緒だよ。いつなん時、削除されてもおかしくない身なんだからね」

地鳴りのような足音が段々と近付いてくる。それにつれ、足音が木霊する間隔が短くなる。もうすぐそこにまで思喰獣が迫っているのだろうか。思考者が奥を見ると、二つの光る目が見えた。

次に全身を毛皮で覆われ、四肢を有する姿が現れる。あれが思喰獣だろう。その化け物は、前足を伸ばせば機能者に届く距離にまで近寄り、そして彼女に喰らい付こうとしたが見えない壁によってそ

れが阻まれた。

思喰獣は怒り狂って、見えない壁を破壊しようと繰り返す体当たりするも、凄まじい音を出すだけに終わった。

「お、おい。機能者を見る」

移行者が思考者の肩を叩いた。

壁の中にいる機能者は再構築がもうすぐ終わるのか、身体を取り巻く青銅色の光が徐々に潮が引くように減少してゆく。

「さて、これで僕も現実世界に行くことができるようになるね」

「止めてくれ！ それだけは！ 今ここで機能者を止めないと、あいつは現実世界に」

しかし、アルビーは首を縦に振らなかった。

移行者は雑言を吐き、思考者はアルビーを口汚く罵った。

「あー、君らの言い分も解るよ。解るから、一つだけいいことをしてあげよう」

「いいこと？」

移行者が、うさん臭そうにアルビーを見る。

「うん、白の方じゃなくて黒の方、藤棚君の真の所有者にね。君が暗澹たる精神状態に陥っているのを解消できると思うんだ。僕の話を少し聞いてくれるかな」

## 親友の自殺の真相

毎日、毎月、毎年、永遠、軽減されることのない苦悩に満ちた世界。そこで、元から決められた選択肢を選び直すアルビー。

退屈そのものの日々が少しだけ和らぐのは、時たま彼の認識できる範囲内に新米の移行者が来た時で、かつ、彼らが困っている時だけだった。

藤棚が困っていたように、多くの新米移行者はゲームの世界を見て戸惑い、時には難解なイベントに巻き込まれる。そして、本当に死ぬかもしれない、となるとアルビーは快く彼らを救いの手をさしのべていた。

善といった類のものをしたからではない。彼は、純粹に退屈凌ぎのためにそうしただけである。

そういったことを何度も繰り返していたある日のこと、思考者と移行者の入り混じった藤棚をここへ呼び寄せる時よりも前のことである。一人の男が、新米移行者としてこの世界へ落ちてきた。

大丈夫だろうか、とアルビーが見守っていると、やはり危険に遭遇した。この人はペルトレッドとなる存在だったので、警告をしておかなくてはならない。

アルビーは、新米移行者の中でもペルトレッドになる人物は、決まってこのバグ空間へ招待している。

というのも、彼らはペルトレッドとなり理性を失い、多くの人々を傷付け、時には大切な人を殺めてしまうからである。だから、アルビーはそんな彼らに忠告をしなければならぬと思っていた。これも善意からというよりは、暇つぶしといった方が真実に近いであろう。

ともかく、アルビーはバグ空間の管理に嫌気が差していたのである。その苦しさを少しでも紛らわすのに、移行者とちょっとした雑談を交えることは大いに有効だった。

そして、今回の移行者であり、現実世界ではペルトレッドに豹変するであろう男性は、無と記号、数式、文字といったこの世界を構築する元素を目の当たりにして、忙しなく辺りを見回していた。

「やあ、初めまして」

アルビーは、この頃、まだ藤棚から名前をもらっていない名乗りはしなかった。

「ああ、ここは一体、いえ、初めまして」

しどろもどろに答えるその男性に、アルビーはなんとなく愛着を感じつつ、こんな彼も現実世界に戻ると駆除されるのか、とほんの少し哀れみを覚えた。

しかし、だからといってアルビー自身にできることは何もない。

このゴブリンを元の間人として現実世界に戻す手段を、彼は知らないし、おそらくそんな便利な方法があるとは思えなかった。

結局、彼がこのゴブリンに話したことは、今までにここへ来たペルトレッドとなる移行者に話したそれと同じものだった。

現実世界へ帰ると、君はペルトレッドとなり理性を失う。

今までの記憶は全て奥深い所で深い眠りにつき、本能のままに動くことになる。

どこにいるのかは知らないけれども、近くにいる人が最初の犠牲者になるだろう。

最後の情報を与えると、ゴブリンはなんだって？ と声を上げた。

「いやいや、しかし、これは夢だ……夢のはずだ。さっきもエルフに追いかけられたしな」

この男の夢は、追いかけられ型が多いらしい。アルビーは夢というものを見たことはなかったが、知識としては知っていたし、追いかけられる種類の夢はどんな人でも一度は見たことがあるくらいに有名なものだということも、以前ここへ来た移行者に教えられていた。

やれやれ、面倒だな。アルビーはゴブリンを見てから思った。

大抵の初心者の移行者は、これが夢だと信じている。妄信してい

ると言っても過言ではない。特に、ペルトレッドとなる移行者となれば、なおさらその現象は顕著だった。

それを突き崩すのははっきり言って不可能なので、彼はあえてそれをしなかった。アルビーはただ、彼らにこう言っただけだった。

「じゃあ、この夢から覚めて、自分の身体を見てごらん。それが自分のものではなく、別のものに、君の場合はのろまゴブリンになりかけていれば、もう死んだ方がいい。そうすれば被害を抑えられる。早いとこ自分を殺さないと、理性を失うからそれができなくなっちゃうよ」

「要するに、自殺しろってことか？ まあ、これが夢ではなかったら、そうするよ」

彼が言った時、時刻は二時十二分になっていた。

「もうすぐ夢から覚める時間だよ。自分の大切な人を傷付けたくなかったら、早いとこ死んだ方がいいよ」

秒が流れ、十三分となった。

のろまゴブリンだった彼は、現実世界で朝を迎えた。目覚めると、急にあの鮮明な記憶が蘇る。

まさかとは思いが、のろまゴブリンになっていやしまいか。彼は、自分の身体を確認した。

やや痩せ型で、馴染みある気だるさの残る身体。いつものまま。これといった変化は見られない。

ほっと彼は胸をなでおろし、それから、傍らでまだぐうぐうと寝ている親友の顔を見た。

「ん？」

起き上がろうとして、彼は身体の異変に気が付いた。腕が妙にこりこりし始めている。明らかに人間の筋肉の付き方ではない。何が起きているのだろうか。

と思っている内に、急に部屋にある本棚が大きくなり始めている。

いや、違う！ 俺の身体が縮んできているんだ！

ふいにあの少年の顔が彼の中で蘇った。

あの子が言っていたことは本当のことだったのだ。心臓が恐怖で締め付けられる。

慌てて彼は窓に近付き、カーテンをさっと開け、そして窓の棧に足をかけた。

本当に俺は死ななくてはならないのか。

ペルトレッドとなり自我を失い、暴れ回るのか。

そうこう考えている内に、彼は自分の記憶が削られていくのを感じた。

ゲームが好きだったこと、学校でのこと、大学受験、自分の名前、そして、親友の記憶が削り取られるのを感じた彼は

窓から飛んだ。落ちる時に、冷たい恐怖が身体に浸透することはなかった。それどころか、ああ、これから俺は死ぬのか、と妙に落ち着いている自分に彼は気付いた。

目まぐるしく過去のことが見れては、泡のように弾けて消えてゆく。それを数十回、数百回繰り返した後、彼は柔らかな衝撃を感じた。

意識が遠のいてゆく。強い眠りが彼を覆い込む。その感触に浸されながら、彼は誰かが上から自分を見ている気がした。それが誰なのか、だいたい予想は付く。

俺の親友だ。

名前は。

名前は？

おかしい。

知っているのに、思い出せない。

そして、今田力というペルトレッドは息をしなくなった。

約束

今話されたことが、真実だった。親友の今田力は、何かに悩んだ末に、自分に相談もせず自殺したのだ。

「今田君は、そんなことをする人じゃなかったと思う。彼とは短い付き合いだったけど、なんとなくそう感じる」

移行者である彼は心の中にあつた空洞が、本来そこにあるべき温かい存在で満たされてゆくを感じた。

今日は、己がペルトレッドになり親友を傷付ける、あるいは殺してしまうことを恐れて自殺したのだ。己より他を優先したのだ。

藤棚は、それに気付かず、いじけ続け、果ては引き籠もり、自宅警備員へと降格していた自分が非常に情けなく感じた。

人の命を代償として頂いていたにも関わらず、自分は親に八つ当たりし、設楽の行為もあのオンラインプレイヤーのアドバイスをもらうまでは踏みにじっていたのだ。彼の尊い犠牲の上に生きていた藤棚は、それを知らずに親友に信頼されていなかった不甲斐なさを悔やみ、自分を呪った。そして、もしかすると、彼は自分が単に親友と勘違いしていただけではなかったのか、と考え始めてもいた。それがいかに馬鹿げている考えだと頭で理解していても、心でそれを考えてしまっていた。

「ありがとう……」

消え入るような声で、移行者はアルビーに言った。

「さて、そろそろ、君らは上へ戻って一つに戻らなくちゃならない。そうしないと、現実世界に戻れない。もちろん、思考者が抜け殻のマジロマに戻って、移行者が藤棚君の肉体に戻るってこともできるけど、どうする？」

「そうだな……俺は、もういいよ。藤棚、お前だけであいつを仕留めてくれ」

思考者が移行者の肩に手をかけて、頷く。

青銅色の世界で、二人は互いの瞳を見合った。

「いや、マジロマ君にも来て欲しい。俺の力だけじゃ、機能者、そ

れにアーマルズみたいな英雄を倒せるかどうか自信がない」

「し、しかし……」

思考者が肯定するのを渋ってみせると、移行者は頭を深く下げたみせた。

「頼む」

「でも、俺がお前の中に入ると……」

「多分、思考者の記憶はもう消えないと思うよ。移行者側の藤棚君の精神状態が黒くて不安定だったから、思考者の記憶が消えただけで、今の移行者は精神的にとっても安定しているからね。でも、肉体の操作は……どちらになるのか解らない」

思喰獣が見えない壁にまだ体当たりしていた。アルビーのかけている壁を、必死になって破壊しようとしている音が反響している。

「そうだぞ。前のように、お前は精神の隅に追いやられるかもしれない。それでも、いいのか？」

移行者は真剣な面持ちで頷いた。

「ああ、いいとも。現実世界の平和が守られたら……それくらいしないと、僕は今田に顔向けできない……」。

それに、あいつらをやっつけた後、君と俺をここに来て分離して、君を何かのイベントを使って現実世界に呼ぶこともできるんじゃないか？」

沈黙が二人を包んだ。空気が固まったかのように感じられる時、その重みを振り払うかのように、思考者が移行者に向けてすっと手を差し出した。

「ありがとう」

差し出された手を移行者は握り、そして思考者は握り返した。

### 英雄達の横暴

結局あの後も、アルビーは機能者を守り抜く姿勢を貫いた。二人

が何度も機能者を思喰獣に喰らわせる、と言ったが彼は頑としてそれを拒んだのである。

藤棚は、思考の隅に真の藤棚がいることを感じながら、これからどうすべきかを部屋で考えてみた。

マスターもハナもない今、味方は誰一人いない。頼れるのは自分だけ、否、もしかしたら、いるかもしれない。

マスターの妹。彼女は、少なくとも、ペルトレッドではなかった。理性ある思考者のはずだ。英雄か魔物かは別として。

味方に付いてくれるとしたら、彼女しかいない。マスターは地球よりもまず妹を救え、と言っていたが地球を守らなければ、結局、妹も死んでしまう。彼女を戦闘に参加させるのは、別段悪いことではないはずだ。それに、今回のことは自分には荷が重すぎる。

そうだろ？ 藤棚は移行者に語りかけた。

ああ、確かに。だが、英雄だったらどうする？

その時は、その時だ。

その前に……マスターの言っていた裏山ってどこだ？

それを忘れていた。藤棚は地団太を踏んでベッドを蹴り、痛さのあまり片足でびよんびよんと飛び跳ねた。

待てよ。

藤棚は、以前にマスターが住所を送ってきたことを思い出した。携帯で過去のメールにさかのぼり、すぐに掘り当てた。

「よし！ あまりメールを受信していなくて助かった」

少し悲しいけどね

それを言うな、と脳内で反論した。

藤棚は財布にお金があるかを確認し、親がお金を渡しに出てくるのを待たずに、家から飛び出した。

## ミシヤナ

電車を乗り換えること二回。ようやくマスターの地元に着。この近くに山は一つしかない。マスターは、エクスヴィジで妹を透明にしてからデストラストによって石化している、と言っていた。

藤棚は、この肉体の真の所有者に魔法を使えるかどうか聞いてみた。ああ、使えるさ。それに、場所もすぐに解る。行くぞ、サブグラ急に藤棚の身体が浮いた。肉体操作は無理でも、魔法は使えるらしい。そのまま高度を上げ、藤棚は山を発見し、そこへ向かう。山の手前に着くと、ぴたりと止まった。

## リスタ

状態異常回復魔法を移行者が唱える。すると、山の一部がぴかりと光った。そういえば、ゲームでもリスタをかけられた相手は光っていた。藤棚はあそこへ向かおう、と念じた。

移行者が心の中で頷く。高度をやや下げて少し飛翔し、光源へ到着。

そこには、一人の少女がいた。まだ幼さが残っており、肌は朝日を浴びたことがないのか、というくらいに白かった。後ろの髪は、肩にぎりぎり付かないくらいに切り揃えられている。

藤棚が近付くと、少女は目を開けた。

「誰？ それに、私はどうして……ここへ……ん？ ああ……」

機能者に転送してもらったことを思い出したらしく、自分で勝手に納得している。

「君の協力がある」

藤棚は自分の境遇、そして、今から起こることをかいつまんで話した。

「いつ何時、奴らがここへ来るか解らない。ビロジィーでは毎日イベントが起きているんだから」

話し終えてから、藤棚はあることに気付いた。この少女が敵であ

ったならば、どうしようか。自分はとんでもない間違いを犯してしまったのではないだろうか。

「私は、ミシヤナです。ウエポに良くしてもらったミシヤナ。彼の意思による親切なのかどうかは別にして、私は彼に好意を持っています」

「ということとは？」

少女は愛らしい笑みを浮かべてから、「ええ、協力します」と答えました。

ありがとう。藤棚がそう言おうとしたまさにその時だった。地中から嫌な響きが伝わりとともに、地面が揺れ始めた。何が起こっているのか解らないが、少なくとも危険な何かが起こることは想像するに難くない。

藤棚は考える間もなく、ミシヤナの手をつかんだ。間髪入れず、移行者がサブグラを唱え、藤棚とミシヤナは空高く昇った。

安全だろう、と思える高度まで昇り終えた時、爆発音とともに黒褐色の煙がもうもうと立ち昇る。

藤棚はその煙に掌を向けた。

ワウシティー

移行者が風魔法を詠唱し、嵐を巻き起こす。たちまちの内に、煙のカーテンは押し退けられる。そして、藤棚とミシヤナが見たものは巨大なピラミッドだった。それは前に彼が現実世界で見たものと同じのものであった。

「あそこに機能者がいるのね」

藤棚はミシヤナに頷いてみせてから、サブグラの力を弱めて地面に降り立った。足が地に着いた時、焼けるような音とともに足から焦げ臭い臭いが立ち昇る。爆発して間もない地面のため、熱いのだろう。

「行こう」

藤棚とミシヤナは、ピラミッド内部へと突入した。

神秘的な雰囲気とともに、入る者を威圧する独特の空気もそこにはあった。

藤棚とミシヤナは、数々のトラップをくぐり抜け、途中で遭遇した魔物の思考者を味方に付け、最深部へと向かう。

移行者としての力とマジロマとしての知恵を身に付けた藤棚、そして、魔導戦士であるミシヤナの二人が揃えば、向かうところ敵なしだ。今までの話だが。

英雄が待ち構えている扉に辿り着いてから、藤棚は振り返った。

「君達は戦ってくれるのか？」

尋ねると、魔物達の大多数が首を横に振った。唯一、一つ目の魔物リッグアイだけは、戦うと言ってくれたが。

「俺らは、なんとかして言葉で説得してえ」

骸骨兵士が骨をからからと鳴らしながら言った。リッグアイを除く、他の八体の魔物もそうだ、そうだ、と口を揃えて主張する。

「お前が戦いにこの部屋へ入る前に、俺らに説得させてくれ。口で話す前に、戦うのはどう考えても野蛮人のすることだ」

ゲーム中では、野蛮人として登場する魔物が声高に言った。

藤棚は反論しようとしたが、ミシヤナに止められて口を噤んだ。

「彼らには彼らなりの考えがあるのよ。それに本当に戦わずに済むのなら、それでいいじゃない？」

最もな考えを、おまけにミシヤナに言われたとあつては、引き下がるしかない。

「英雄どもが、平和という言葉を理解できるとは思えないがねえ」

大きな目玉をぱちくりさせながらリッグアイが言う。藤棚がその青い魔物に「ありがとう」と言った時、野蛮人を先頭に、英雄の待ち構える部屋に入っていた。

八体目の魔物が入り終わると、藤棚、ミシヤナ、リッグアイと続いた。

中に入ると、すでに野蛮人が一人の英雄に話しかけている。

「だから、駄目だろ？ 選択肢があるからといって、なにもそんな物騒なものを選ばなくてもいい」

他の生命を奪う権利は、お前にはない。そんなことをしていると、お前もいつか生命を奪われることになるぞ。

等々と八体の魔物は英雄を説得できると考えられるありとあらゆる言葉を並べ立ててみたが、英雄によって全て拒絶された。

「やかましいぞ。俺は、この世界を征服しただけだ」

そう言うのは、アーマルズの兄トートルスであった。

トートルスは真紅の鎧をまとっており、腰に帯刀する剣は一般的なものより一回りも大きい。

「そうやって俺に不快な思いをさせておくのも今の内だ」

トートルスが天に向けて掌を向けたかと思うと、天井が全て吹き飛んだ。

衝撃魔法でも使ったのだろう。強烈な風圧と残骸が、その場にいる者に襲いかかる。

カヴァアピード

移行者が壁魔法を唱えて、藤棚、リッゲアイ、ミシヤナ、その他八体を守る。トートルスは、それを面白くなさそうに見て、次に天を仰ぐ。

上から丸見えの場になってしまったこの空間。

一体、何をやる気なのか。皆が固唾を呑んで見ていると、何者かがこちらに向かってくるのが見えた。

二人いる。誰なのか解らなかったが、近づくにつれ、その二人の内一人は何者かはっきりと解った。

アーマルズだ。そして、残りは

残りは

設楽春香だった。目でそう理解したが、彼の脳は理解しえなかった。移行者としても、思考者としても。

「おうおう、兄貴。連れてきたぜ」

アーマルズが馴れ馴れしく、設楽の頭に触れる。

「彼女を放せ！」

藤棚が声を低める。

「はあ？ 何言ってるの？ この方が、誰だか解ってねえようだな」

誰だ、誰だ、とがやがやと魔物達がざわつき始めたところに、ア

ーマルズはある人の名前を言った。

「彼女は機能者だ」

その名を聞いて、藤棚は頭がくらくらし始めた。自分に良くしてくれた彼女。ひよっとすると、自分に対して恋愛感情を持っていたかもしれない彼女。その彼女が機能者？ 冗談にも程がある。

藤棚が彼女を見ると、彼女の目に驚きの色が浮かんでいた。

「ああん？ お前ら二人は、現実世界で知り合いだったのか？ ったくよお、機能者さん、面倒なことはいしないでくださいよ。今更、ここで思考者全員を呼び寄せることをまさか止めないでしょうね？」

設楽春香は、否、機能者は自分より一回り大きいアーマルズを威圧するように睨んだ。

「解っている。私が暇を持て余し、この肉体　「彼女は自分の胸に手を当て」　に憑依したのは、自己責任だ」

裏切りはしない。そう言い足すと、アーマルズ、トートルスの顔に安堵した笑みが広がった。

「なら、いいです。さっさと、開通門を開けてくださいよ、っと、その前にあの邪魔者どもを殺せ」

トートルズがアーマルズに命じ、アーマルズは機能者に目配せした。

機能者は小さく何かを呟き、そして掌を藤棚達へ向けた。

## サイテイド

何をする気だ。藤棚は身構えたが、全く無意味なことだった。身体が金縛りにでもあったかのように動かない。微動だにしないのである。

「ごめんなさい。本当はこんなことしたくなかった」

機能者は、藤棚の頬に触れた。

「記憶の断片に触れさせよう」

機能者が彼の頬に触れていた手を胸へとずらし、そして目を閉じる。

冷たい何かが胸から頭にかけて走る。その流動物は、彼に機能者の断片を見せた。

機能者は、思考者を移行させてばかりの日々を送っていた。ゆえに、自分だけ現実世界に行けないのことを、しだいに不公平に感じ始める。というのも、もし自分のデータを現実世界へ全て送り込んだなら、自分の管理するバックアップが破壊されてしまう。思考者の侵入する肉体が有する思考をバックアップしていたのに、それでは意味がないからだ。

したがって、彼女が選んだ方法は、朝と昼だけある人物 設楽春香が偶然にも選ばれた に憑依するというものだった。その間、自分のデータには設楽を送っておいた。

ビニロジィー内での設楽春香に機能者のデータを操られるのを防ぐため、自身に自動操縦のプログラミングを施しておく。こうして、本物の設楽春香は朝と昼を自分の意思とは無関係に動く機能者として過ごし、夜は現実世界で睡眠に従事していた。

「安心するがいい。私は、もうかれこれ十年間は設楽春香として生きていた。つまり、あなたと出会った時から、すでに設楽春香は・・あなた・の・・知る・・設楽・春香だったということ」

心からあなたのことが好きだった。

消え入るような声が藤棚の心に流れ込んだかと思うと、身体の中にあるとはつきり感じていた流動物が消え去った。

「話は終わりましたか？ それよりも、どうです？ 身体に湧き上がる力を実感できるでしょうか？」

トートルスが尋ねると、藤棚を見つめていた機能者は振り返り、頷いた。

「あなた達といると、力が増すようだ」

「そうでしょうか？ 俺の力と弟の力をあなたが使えば、いとも簡単に思考者全員を呼び寄せることができますよ」

身体が全く動かない藤棚達を一瞥してから、機能者はアーマルズとトートルスに触れた。

「エネルギー確保。対象の収束幅を確認。通過門の拡張に入る」

雷鳴のような轟きの後、吹き抜けのやや上方に漆黒の穴が現出する。それはまるで帯電しているかのように、しきりに青白い電気の火花を散らしている。

「通過門具現化。極めて安定した次元だ。私がいなくとも、通過門に手をかければ開かれるだろう。私は今ので大部分のエネルギーを放出してしまった。しばらく休ませてくれ」

機能者が淡々とした口調で語り終えると、アーマルズとトートルスが顔を見合わせ、それから彼らの額に触れている機能者の手を振り払った。

きよとんとしている機能者に、英雄の兄弟は二人、口を揃えて「用なしだ」と言った。

「あばよ」

二人の掌から衝撃波が彼女に向けて放たれる。

大気を白ませる衝撃のうねりが彼女を食し、もうもうと煙が舞い上がる。

そして、小さな呻き声が聞こえた。

藤棚は瞳さえも動かせない肉体に苛立ちを感じながら、なんとか

ならないものか、相棒に尋ねた。

無理だ。これは魔法でもなんでもない。おそらくプログラミングだな。俺はプログラマーじゃないから、これを解除することは不可能だ

とすると、これを解除できる存在は機能者ただ一人ということになる。

じれったい。藤棚は固まった身体のまま、機能者を見守った。彼女は無事なのか。煙があるので解らなかったが、すぐにその靄が退く。彼女の服は切り刻まれており、額や腕から血が滲み出ている上に、息も荒いことが一目で解った。そして、どうにか生きているということも。

「しぶといな。これで最後にしてやる」

アーマルズが帯刀している剣を抜き、それに凍える吹雪をまとわせ、機能者に歩み寄る。

「じゃあな」

白い息を吐いているかのように輝く剣が、彼女に向かって振り下ろされる。誰も彼女の死を止められない。

また人の死を目の当たりにしなくてはならないのか。反射的に藤棚は目を閉じようとしたが、その自由すら彼は有していなかった。

目が前方の情報を遮断する。彼は真実の光景を見ているにも関わらず、脳に伝達されるものは真つ白ただそれだけだった。

硬質な物体同士が衝突し合う音。

続いて、鞘から素早く抜刀した時のような音もした。

「なんだよ、お前！」

不愉快そうに唸るアーマルズ。

「君達の好きにはさせないわ。今すぐ剣を下ろしなさい」

聞いたことのある声質を聞いて、藤棚の目が通常の機能を取り戻した。

ウエポだ

「ウ、ウエポ……」

咳き込みながら機能者が、彼女の背を見上げる。

「ウエポ？」

きよとんとするアーマルズに、その兄だったが、やがて、ははあ、と頷いた。

「お前か。ペル・ウエポンか。何度、お前をぶった斬ったことか。

あの感触、今でも俺は覚えているぜ」

「ええ、そうでしょうね」

その答えに、アーマルズは面白くなさそうに顔をしかめた後「何しにきた？」と問うた。

「暴れるのは止めなさい。ここに元々住んでいる者に危害を加えるのは駄目。別に正義を行え、と言っているのではないわよ」

「図に乗るな！」

居丈高にトートルスが言った。

「貴様！ そもそも、どうして、人を殺めてはいけないのだ？ そんな善悪の境界線、認識、道理は全て人間が勝手に築き上げてきたものだ。俺らよそ者に、そんなエゴが適用されてたまるか！ それに、もう、うんざりだ！ 正義面するのはもう沢山だ。これから、俺ら英雄は好きにやらしてもらおう。だから、俺らと対立する存在は全て消し去るまで」

トートルスも抜刀し、アーマルズの横に並ぶ。

「この二人組に勝てるつもりでいるのか？ 散々、お前を殺したよな」

兄弟は顔を見合わせて、下卑た笑い声を出した後、ペル・ウエポンに襲いかかった。

兄であるトートルスは左から、弟であるアーマルズは右から。

ペル・ウエポンはその巨体に似合わぬ敏捷な動きで、左右からの攻撃を受け流し、彼らの背後を取った。

「永煉獄」

ウエポの両肩が裂け、万の霊が顔を覗かせ雄叫びを上げ、彼らへ突進する。

兄弟は巧みな剣さばきで、霊を弾き返し、ウエポとの間合いを詰め、再び衝撃波を放った。

究極煉獄の反動で鈍化していたウエポは攻撃をかわしきれず、脇腹と右腕に深手を負うも、ファネントを使った。

瞬時にして兄弟とウエポとの間に距離が置かれた。

「おいおい、この部屋には無数のトラップがあるって知らないのか？」

剣を肩に乗せて、トートルスがウエポを嘲って見せる。

「何？」

ウエポがそう言ったのとはほぼ同時に、床から飛び出た鎖が、ウエポの身体をがんにがらめにする。

彼女はファネントを唱えて鎖から抜け出そうとしたが、魔法は不発に終わった。

「魔法無効化の作用もある鎖だぞ、それ」

手で口元を押さえ笑いをこらえているアーマルズだったが、たえ切れず豪快に笑い出した。

「弟よ。さつさと、始末するぞ」

「了解。こいつを殺すのは、やはり、あの技でなきゃなあ」

「ああ、もちろん」

二人の剣が交差させられる。

「サイティード」

過去に何度もウエポを殺してきた伝説の魔法が詠唱される。

「同じ技で私がそうやすやすと殺されないわ！」

ウエポの顎が外れ、骨の軋む音がした。ぎりぎり骨が悲鳴を上げながら、ウエポの顎は地に付くまでに降りる。彼女の喉の奥から紫と黒の入り混じった暗黒波がよじ登ってくる。

「なんだ、あいつ？」

「魔法は使えないから、おそらく特技だろう。さあ、こちらも迎え撃つぞ」

兄弟の魔力が光となって交差された剣に収束し、神秘的でいて熱

い光が球体と化し、みるみる巨大化する。

ウエポの暗黒波も、それに比例して球体となる。

正義だった者が生み出した球体と悪だった者が作り出した球体が、平均的な人間を直径とした大きさになると、それらは放たれた。

二つの球体が、直線的に大気中を突き進む。

まがまがしいが、正義を貫こうとしている暗黒波。

神々しいが、目的を見失った伝説の魔法サイテイド。

「奴を燃やし尽くしてしまえ！」

「今までやってきたように殺してしまえ！」

狂気が滲んだ言葉。

彼らのなす悪事を止めてくれ。藤棚はそう祈りながら、二つの球体が衝突し合う様を眺めていた。

二つの球体が衝突する。

最初は、まがまがしい力が押ししていたが、しだいに押され始めた。神秘の光がもりもりと押し返し、遂にはウエポを飲み込んでしまった。

燻る音。蒸気を身体から発しているウエポの目は虚ろだった。死んだのだろうか。

ウエポがびくりと痙攣した。まだ生きているらしいが虫の息だ。

あの二人の暴走を止めたい藤棚だが。

ああ、もはや誰も彼らを止めることはできない。あの魔王たる存在でさえ、あっけなくやられてしまった。仮に、自分がここから解放されたとしても、何の役にも立たないだろう。

それは、ない。きっと、何かの役に立つ

移行者が囁く。

それを聞いて、思考者の藤棚は、胸が詰まった。今までは消極的  
思考だった移行者が、自分より積極性を帯び始めている。それにひ  
きかえ、自分はどうかなのか。

今、彼らを押し留めることができるのは、いや、食い止めること  
ができるかもしれない可能性を持っているのは、己ただ一人。

それを理解して、藤棚は心の中で叫んだ。  
俺を解放してくれ。

必死に念じると、倒れている機能者の指がこちらを指す。  
かちり。

身体の中で歯車が噛み合った。もう、自分を縛るものは何も無い。  
藤棚はげらげら笑う兄弟を見てから、ミシヤナを見て頷いてみせた。  
彼女も頷き返した。

まだ兄弟はこちらに気付いていないらしく、ウエポに歩いていつ  
ている。

ウエポが微かに呻くと、彼を縛る鎖が解かれ、巨大な体躯が冷た  
い床に倒れる。

「しぶとい奴だ。だが、安心しろ。もう一発、あれを食らわしてや  
る。そう、ゲームの中と同じようにお前は死ぬんだ。結局、お前は  
あそこから抜け出そうとして抜け出せなかつたんだよ」

アーマルズがウエポの耳元で囁いた後、彼らはまた剣を交差した。  
「サイテイド」

聖なる光の球体が膨張し始める。

最後によって最後を終わらせる(前書き)

ネット接続ができず昨日更新できませんでした。すみません。

## 最後によって最後を終わらせる

藤棚はさつとウエポに手を向けた。

ワウシティー

素早く、かつ、彼を傷付けない優しい風でウエポを運ぼう。

彼らが球体を放つ寸前でウエポを風で安全圏に運ぶ。そうしたら、兄弟は攻撃の反動でしばらく動けないはずだ。そこを突いて、一気に止めを刺す。

ミシヤナは藤棚に名案があると感じたのか、何も言わずに黙している。

他の魔物達は、身体が動けるようになったのに気付いていないらしく大人しく突っ立ったままだ。茫然自失の体であるとも言える。

風の球は完成した。後は、サイティードが放たれる瞬間に

急に兄弟二人ともがこちらを向き、にやりと笑った。

バレた！

そして、彼らは不完全なサイティードをウエポへ撃ち込んだ。

慌てて藤棚はワウシティーを撃つたが、時すでに遅し。ウエポの身体が白い光で包まれる。

「ペルー！」

ミシヤナが叫びながら、ウエポに駆け寄る。藤棚がそれを止める間もなかった。

「大丈夫？ ペルー！」

もう何度目になるか解らない兄弟二人の大笑い。

哄笑だけがやけに響く空間で、魔物八体、リッグアイが自分達の身体自由に気付き、静かに喜んでいる。

「あ…… あああ…… ミシヤ…… ナ？」

ウエポの大きな手が何かを掴もうとするように上げられる。その手をミシヤナが取る。

「もっ…… 何も…… 見えない…… 何も…… 感じない…… また君を……」

…守れ…なか…は…ははは

弱々しく笑った後、ウエポの身体は揺らぎ始め、その場に存在しなかつたかのように消散した。

ミシヤナの身体であると同時にマスターの妹のものであるそれも、きらきらと光り始める。

「魂繋ぎの効力が切れたのよ……ごめんなさい。勝手に、人の身体に潜り込んで……」

ぺこりと頭を下げて、ミシヤナも彼の後を追うようにして消えた。「残りはお前らだ」

ぎよろりとした目付きでアーマルズが藤棚、そして魔物達を睨む。竦み上がった魔物達は一目散に逃げ出した。言葉の通じない相手と解ると、自分達は何もできないということをしつかりと理解しているようである。

「おやおや、手間が省けた。じゃあ、貴様と半壊してる機能者、後は雑魚モンスター一匹だけか」

雑魚と言われたリッグアイが、兄弟を大目玉で一睨みした。

どうやって、あいつらを倒そうか。自分とリッグアイだけでは歯が立たない。何かを利用してはならない。何を？ この部屋にあるものはトラップしかない。

先程のトラップは重みで反応するタイプのものであった。だが、よほどの重さがないと反応しないタイプのもの。ウエポだったからこそ作動したトラップなのだ。あの種類のものには、周囲にも同じタイプのトラップがある。効果は違うけれども。

ウエポを捕らえたものが『魔封じの鎖』だったことから考えるに、残りのトラップは『知力の縛り』と『破壊の溶液』だろう。

知力の縛りにかかる、一定時間ぼんやり状態になってしまう。破壊の溶液は、対象に大ダメージを与える。ゲーム中でもそうだったので、藤棚にはそれが解っていた。

よほどの重さで作動するトラップは、そのだいたいが強力な魔物向けに作られているために強力なものが多いのである。

がしかし、アーマルズにしる、トートルスにしる、そんなに重くはない。

大の大人四人分の重さがなくては、あのトラップは作動しない。が、あの兄弟はどこからどう見ても二人だ。どうしようもないのか。絶望が彼の中で広がり始めた時、ふと名案が思い浮かんだ。そうだ、まだ世界は終わっていない。勝機は微かかもしれないが、それでも可能性はあった。

藤棚は小声で、リッグアイにあることを言った。大目玉をくりくりさせて、その魔物は頷いた。

「おら、もう神への、いやいや、雑魚モンスターへの祈りは済んだか？俺はせっかちだからよお」

二人が地を蹴り、藤棚へ同時に攻撃を仕掛ける。リッグアイよりも、まず先に手強そうな方から殺そうとする算段だろう。

藤棚はサブグラで身体を浮かして、二人の攻撃を回避した。

なんでもいいからとにかく強力な魔法を放ってくれ。

ギガント・クルド

じんと手が熱くなる。

藤棚が掌をさつと二人に向けると、強大なエネルギーの塊が爆音を発しながら発射された。

掌が焼けるように痛いのを我慢しつつ、藤棚はリッグアイの作業がはかどっていることを確認した。

「余所見している余裕があるとはな」

トートルスがいつの間にか、横にいる。

ファネントを使われたんだ。現実世界とゲームじゃあ、勝手が違う

う  
剣が横に払われる。

藤棚は身を捻り、それを避けようとしたが脇腹を抉られた。

熱い感覚が脇腹から広がるのを感じる。

ファネント

移行者の藤棚が唱え、アーマルズの背後へ回った。

ファネントで逃げればいいじゃないか。臆病な考えが彼の脳裏を掠めたが、彼はすぐさま安直なその提案を振り払い、アーマルズに殴りかかった。

マジロマにならずとも、ある程度の力があるのは事実だったがしかし、相手が相手だった。

「殴ったか？ お前？」

アーマルズが振り返りもせずそう言う。彼の身体から紫色の布状の光が発せられ、藤棚は弾き飛ばされた。

脇腹がずきずきする。血が内から外へ流れ出てゆくのがはつきりと解る。

マジロマになれ

しかし、藤棚はマジロマになりたくなかった。自我を喪失してしまつかもしれない。そうなれば、機能者やリッグアイを傷付けてしまいかねない。

俺が意識を制御してやる。お前が本能のままに動くのを防いでやる。だから、感情を解き放て

「ぼつつとしてる余裕があんのか？」

藤棚は頭上がひやりとするのを感じた。見てはいないが、剣を振り下ろされているのか、あるいは、魔法でも放たれていることくらい想像できる。

早く！

最後によって最後を終わらせる

藤棚の頭とアーマルズの剣が接触する。後は、そのまま剣が彼の肉と血、そして骨に触れ合いながら彼の内部を横断するはずだった。

しかし、現実にはアーマルズの剣が折れただけだった。

「貴様……前みたいになりやがったな」

強固な装甲に、人間の目とは比較にならない程に優れた目、鉄を

も軽く切り裂く鉤爪、俊敏な足。

マジロマと化し、アーマルズより一回り大きくなったマジロマは、アーマルズの首をへし折ってやろうと腕を突き出した。

舌打ちして、アーマルズは上空へと退散する。

「兄上、二人でかかればなんてことはない」

トートルスが頷く。兄弟二人は自身にステインテンプをかけて移動能力を上昇させ、二手に分かれる。

リッグアイの方を見ると、頼んだ作業が終わっているようだ。

藤棚は先程までウエポのいた付近にまで移動し、そして、攻撃を受け流す姿勢をとった。

足を肩幅よりやや広げる。硬い握り拳を作らず、野球ボールを柔らかく包み込むくらいに開けておく。

床にすとなん、と兄弟二人は降り立った。

「なあ、お前、俺らの仲間になんねえか？」

トートルスの予期せぬ質問に、藤棚は面食い、アーマルズはそれに反発した。

「静かにしろ」

兄が弟をびしゃりとはねつける。が、藤棚の出した答えは「断る」だった。

「それに、お前達は、今、ここでトラップに引っかかるんだからな」

「トラップ？ 作動するわけないだろ？」

トートルスがそう言っって肩を竦めてみせた時、ぴよこん、とリッグアイが彼らの傍らにきた。アーマルズはそれを見て鼻で笑った。

「こいつの体重を足しても、このトラップが作動するにはまだまだだ……」

二匹目のリッグアイが背後から現れ、三匹目、四匹目、そして五匹目と続々と現れ、トラップが発動した。

青紫色に光る鎖が二人を拘束しようと、床から飛び出す。『知力の縛り』だ。

アーマルズは信じられない反射神経で自分自身にワグシティーを

撃ち込んで、後方へ吹き飛び、それを回避した。トートルスだけが知力を縛られた。

「くそっ！」

できれば、二人とも知力を縛られて欲しかったが仕方ない。二人から一人に減ったのだ。今までよりかは、やや優勢に持ち込めている。

「ごめん、ごめんよお。仲間達……」

トートルス以外にも、リッグアイが『仲間を呼ぶ』で現れたリッグアイ達も知力を縛られている。藤棚とともに戦うことを決意したリッグアイは、仲間のために大目玉から大粒の涙を流していた。

アーマルズが無表情にこちらを睨んでいる。先程までの、ちゃらちゃらしている雰囲気は皆無だった。自分の勝利が、不安定なものへと落ちていったからだろう。

「やられん！俺はお前なんかにはやられんぞ！」

彼の長剣に、聖なる光が帯びる。アーマルズは、その剣を構えると藤棚に突っ込んできた。

このまま直線的に奴は飛び込むつもりなのか。

それとも、それはフェイントで、実は別の攻撃を繰り出すのか。

解らない。

解らない

落ち着け。冷静に最後の最後までアーマルズの動きを見て入れれば、解るはずだ。

十四歩、十三歩、十二歩、十一歩。

十歩、九歩、八歩、七歩。

六歩、五歩、四歩。

三歩、二歩。

このまま来る！藤棚は、彼の剣を強固な外皮に包まれた腕で防いだ。しかし、運の悪いことにそれは聖なる力を帯びていた。

いくら正義を行っていても彼の成分は悪で構成されていたし、どれだけアーマルズが悪事を働いても彼の要素は善で構築されていた。

焼けるような痛みが藤棚の腕を走ったかと思うと、右腕が切断された。

それでも、意識を失わずに藤棚は左腕で正義の仮面を被った悪を引つつかんで地面に叩き付けた。

鈍い音がして、アーマルズは岩から切り出された床に半身を沈めていた。が、それでも、彼はある魔法を唱えた。

「サイテイド」

不完全すぎる伝説魔法だった。しかし、それでも十分すぎる程だった。

マジロマの弱った肉体は後方へ弾き飛ばされる。床の上へ滑り、滑って、床に横たえている機能者の傍らに。

左腕は両断されている。その上、脇腹はマジロマと化しいくらか回復したとはいえ、えぐられたままだ。何よりも先程のサイテイドが大きかった。

神々しいエネルギーが邪悪な肉体を侵食し、マジロマは藤棚へと姿を戻し始めていた。変化が解けるのだ。藤棚に戻れば、もはや勝機はなくなるだろう。

大ダメージを受けると、変化が戻るみたいだ

絶望的な心の声を聞きながら、藤棚は悔しくて涙を流していた。傍らに居るのは、エネルギーを使いきった機能者。身体を僅かばかり動かす以外に体力は残っていないさそうだ。

リッグアイもあの英雄が相手では、てんで話にならないだろう。

かといって、藤棚はどうすることもできない。彼自身が、最も絶望的だった。

いや、勝機はまだある。藤棚は口の中に広がる血の味を感じながら、あることに気付いた。

相棒にそれをやってみてもいいかどうか尋ねてみると やれつてと、すんなり返された。

「お……おお……」

床にめり込んだ身体を起こし始めたアーマルズ。

トートルスは相変わらず知力を縛られたままだ。

藤棚は二人の状態を確認してから、設楽春香を見て弱々しく微笑んだ。

「頼む……俺を……殺してくれ。首を掻っ切るだけで……いい。あ  
るいは、ちよいとしたプログラミングでもなんでもいいから……」

設楽春香が目を見はり、首を横に振った。

「俺をやれば」

藤棚は設楽に自分を殺せば、アーマルズを倒せることを言った。

「でも、どうして私に？ また、ここへ思考者を呼び寄せるかもし  
れないのに」

アーマルズが半身を起こした。

「君を……設楽さんとしての君を……信じる……」

「しかし……」

今までも、そしてやはり今でも藤棚の片方は、選択を恐れていた。  
その後についてくる結果は未知であり、無限であり、責任をとまな  
う。

友人に救われたこの命。

救われた命によって、救いを与える。

己の命を断ち、他を繋ぐ。

自身を完了することにより、未履行の不幸をそのまま終わらせる  
ことができる。

早く、と掠れて弱々しい声で藤棚は嘆願した。

「解った」

設楽は目をすつと細め、そして彼に触れた。次の瞬間、藤棚の身  
体は白い光の粒となってこの世から消えた。

最後の願い

今のプログラミングで、彼女は体内に残っていた残滓に近いエネ

ルギーを使い果たしてしまった。もう何も残っていない。真に機能者は身体を軽く動かすことくらいしかできない。

「あーあ、どうして、あいつを殺しちゃったかなあ」

アーマルズが、肩を回しながらこちらに向かって歩いてくる。

身体に損傷がないかどうかを確認しているのだろう。彼の首には『精霊の守護』というペンダントが身に付けられている。

あれは、ビニロジィー内において、アーマルズが強敵の攻撃によって死の淵へ追いやられた時に、彼を何度も救ってきたものだ。

ある時は、敵の魔法を弾き返し、またある時は瀕死の英雄に活力を流し込み。

もしかしたら、今、設楽春香が持つ藤棚からの最終手段が単なる手荷物になるだけに終わるかもしれない。

けれども、それしかアーマルズを殺す方法はない。

機能者はずっと立ち上がった。ふつと眩暈がするも、なんとか倒れずに済んだ。

「おいおい、俺とやり合おうってのか？ 大人しくしてりゃあ、楽に死なせ」

彼女は手にするものをアーマルズに向かって投げ付けた。

「ん？」

爆滅ボム。マジロマが死ぬ時、落としてくれるレアアイテムだ。

このために、マジロマ狩りは昼夜を問わず行われる。

「ファ」

アーマルズはそれが何か解ったのだろう。ファネントを詠唱し逃れようとしたが、遅かった。

激烈な爆発が彼を飲み干す。彼の身体を紅く気性の荒い熱と衝撃が抱擁した。『精霊の守護』は一瞬神々しく光りかけたが、どうしたわけか途中でその輝きを失った。

もはや、と恐れていたものが不発に終わるのを見届けてから、機能者は安堵の吐息を漏らした。

爆滅ボムの影響はしばらく続いた。たった数秒間のことだったの

だが、機能者にはそう感じられた。

やがて爆発が静まると、そこには英雄だった兄弟二人の影も形もなかった。ただ、『精霊の守護』だけがきらりと輝いて拾ってくれるように頼んでいただけだった。

機能者は『精霊の守護』を拾い上げた。

英雄は正義を行うことに辟易していたが『精霊の守護』だけは正義に飽きてはいなかったのだろう。だから、悪である彼を護らなかつたに違いない。

「な、なあ、機能者さん。マジロマさんの望んでいたことを叶えてくれるのか？」

少し及び腰のリッグアイが尋ねた。

藤棚の望みは、思考者による地球破壊を止めることだろう。それに対して、機能者は思考者に自由を与えたかった。しかし、思考者の中には横暴な者がいる。

一体、何が悪いのだろうか。そう考えて、機能者はあることに気付いた。

「ゲームが悪い。つまり、ゲームを変えればいい。オンラインゲームの世界自体に自由を与えればいい」

機能者がそう呟くと、リッグアイが大目玉をぱちくりさせて彼女に近付いた。

「俺も協力するよ」

「ありがとう。私はこれからビニロジィーの世界を変えることにする。そして、その団体の名前は インボムにしよう」

インボムとは内部破壊を意味する。

今までは、外に出て外部を破壊してしまいかねなかった。しかし、今回は中から変える。

「俺もそれに入るよ」

機能者はこくりと頷き、リッグアイの頭を撫でた。

## 後書き

ようやく更新終了です。興味を持った方がいれば、ぜひともホームページへきてください。ブログは毎日更新していますし、最新情報にはHPの方が早いので。ただし、携帯では一部表示されない部分があります。(ブログは大丈夫ですよ)

<http://www.geocities.jp/pericite/index.html>

で、そんな宣伝はさておき、今作は、いかがだったでしょうか。言いたいことは結構詰め込みました。

ただ、盛り上がり部分が少ないかもしれません。

以上。

だと後書きから読む人は、おいおい、と思うので、一応後書きらしく、本作の紹介を少々。物語の核心には触れませんが、未読の方も安心してお読みください。

ゲームに入るなんて、アリキタリじゃねえか、と思う人もいるかもしれません。

が、私は相当なひねくれものでして、そんな王道作る気はさらさらありません。

ゲームでも、オンラインゲームですし

魔物として入りますし

ゲームの固定キャラは自我に目覚め、彼らの主張を通そうとしますし

勇者と魔物の立場が×××だったり、と

物語の根底はありきたりかもしれませんが、葉の部分は独自性を出しているかと思えます。

それでは、読み終えた人、長文に付き合っただきありがとうございます。  
ごぞいます。

未読の方、読んでいただければこれ幸い。

ではでは、これからも物語を紡いでいく予定ですので。頑張ります。雨にも負けず風にも負けず。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7477c/>

---

思考者 R P G

2009年7月1日21時18分発行